

396.5
SH71a



3

0057218-000

396.5-Sh71aウ

銃剣道

塩原庫三・著

帝国在郷軍人会大阪支部

昭和18

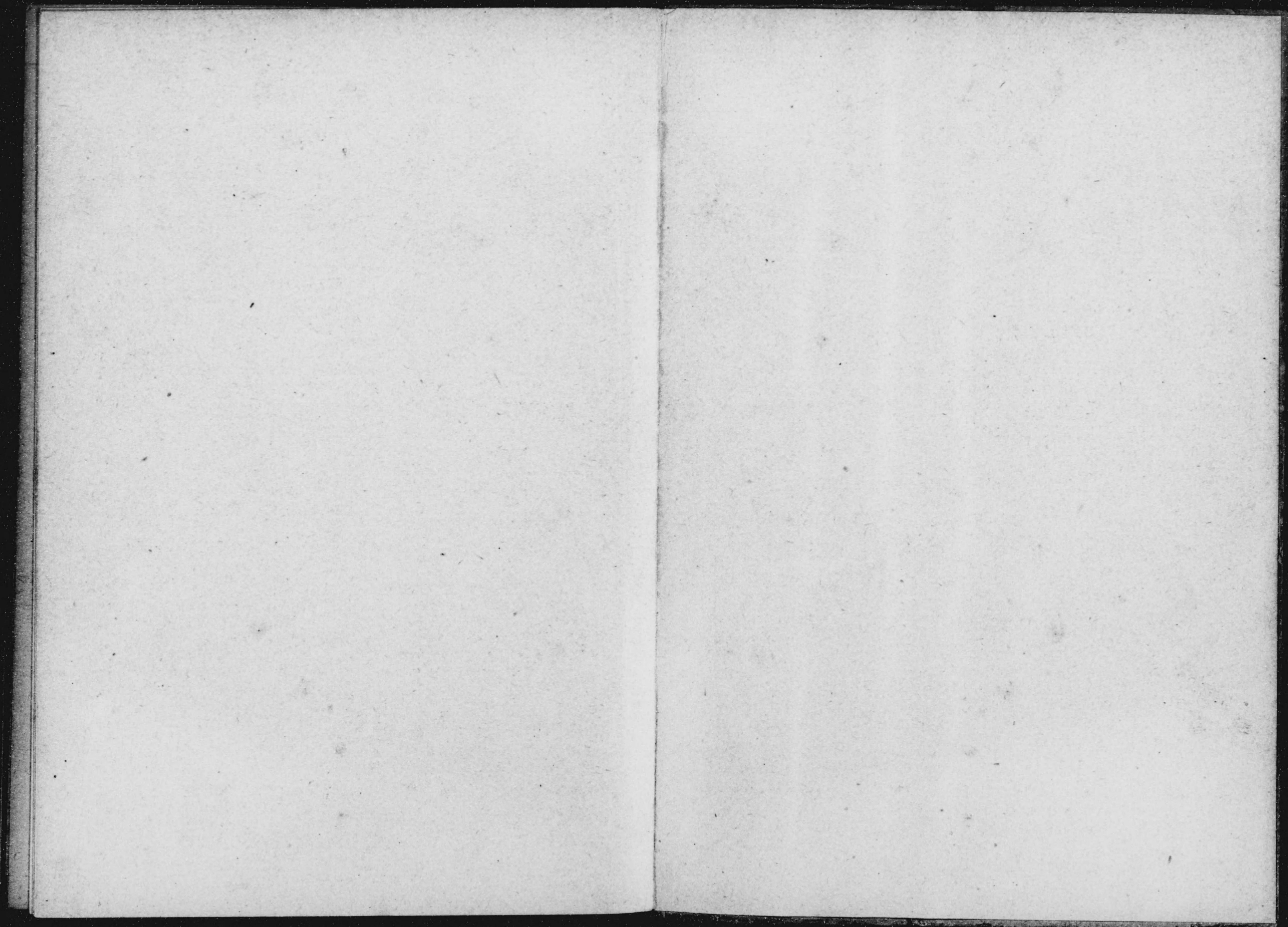
AJF

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

396.5
SH71a

道劍銃

佐少軍陸
著三庫原塩



396.5

SH71a

銃劍道



陸軍少佐

塩原庫三著

陸軍認可
文部省推薦



序

こゝに支那事變は既に六周年を閲し、大東亞戦争又一年有餘に及び、日の丸の旗は大陸の全域を席捲し、今や陸・海・空に南溟北漠の涯までも果てしなく進みつゝある。

これひとへに 大御稜威の然らしむるところとはいへ、忠勇無比な皇軍將兵の奮戦力闘と銃後國民の眞摯な協同とに據るところでもある。赫々たる戦果の教ふるところによれば、先づ武力戦に於て最大有終の勝利を得るところのもの、精巧緻密な近代科學兵器の熟練周到な操法と用意至妙な作戰計畫と相俟つて、殊に皇軍傳統の果敢不屈な白兵の威力と必勝の戦意に存すること、萬人の痛感せるところである。即ち、銃劍道の技術と精神の具現こそは、實に實戦場裡に於ける白兵必勝の武器であり、且つ國防武道の精華である。従つて戦時下青少年の剛健な精神涵養と體位向上に最適のものである。これ今日に於て銃劍道が國民的・國防的な新武道として特に重んぜられる所以のものである。

本著「銃劍道」は新工夫になる寫眞解説法に依り、その基本技術の精髓を最も正確且つ模範的な姿勢に於て會得せしめ、明朗、端的に初級習技者にも容易にその全般を修得せしめんとしたる、寔に恰

好の解説書であることを欣快とするものである。

著者鹽原庫三少佐は大阪聯隊區司令部に在つて日夜斯道の指導普及に盡瘁し、在郷軍人會及び青年學徒の實際教育を擔當し、日本新武道精神の鼓吹に努力しつゝあるものにして、本書は又、著者年來の熱意の一端を要領宜く輯成して、實技指導及び修得上の参考に公開せるものであり、懇切、簡素な解説をもつて編まれたものである。

幸ひ本書に依つて、現に斯道に精進せらるゝ青少年諸君は益々日本新武道の技術と精神を研磨され、戦時下緊要の國民的鍊成に不撓の精勵をされんことを希望してやまぬ次第である。

こゝに敢て所懐の一端を述べ、本書の刊行に當り推薦の言葉を寄する所以である。

大阪師團兵務部長

陸軍少將 下 川 義 忠

序

航空機、巨砲等の科學兵器が近代戦を勝ち抜くために如何に重要であるかは更めていふまでもないが、しかもなほ「銃劍」の威力が如何に皇軍戦勝の基礎を造り、敵膽をして寒からしめてゐるかは、苛烈を極める西南太平洋の戦鬪に關する報道に於て、諸子が日ごとに見聞し痛感してゐる通りである。洵に銃劍突撃こそは皇軍の精華である。しかして銃劍道の鍊磨はただにこの緊要なる戦技の慣熟に資するのみならず、積極敢爲の大和魂、一突必殺の皇軍精神を鍊成し、且つ靱強なる體力を養成するの道であつて、大戦下ひとり軍人のみならず壯青少年學徒悉くの精勵するところでなければならぬ。本書「銃劍道」の著者鹽原少佐は銃劍道教育の權威者として夙に著聞せる人、適切なる寫眞と明確且つ簡潔なる解説によつて修練者を裨益するところ甚大なるものあるを信する。敢て世にすすむる所以である。

大阪聯隊區司令官

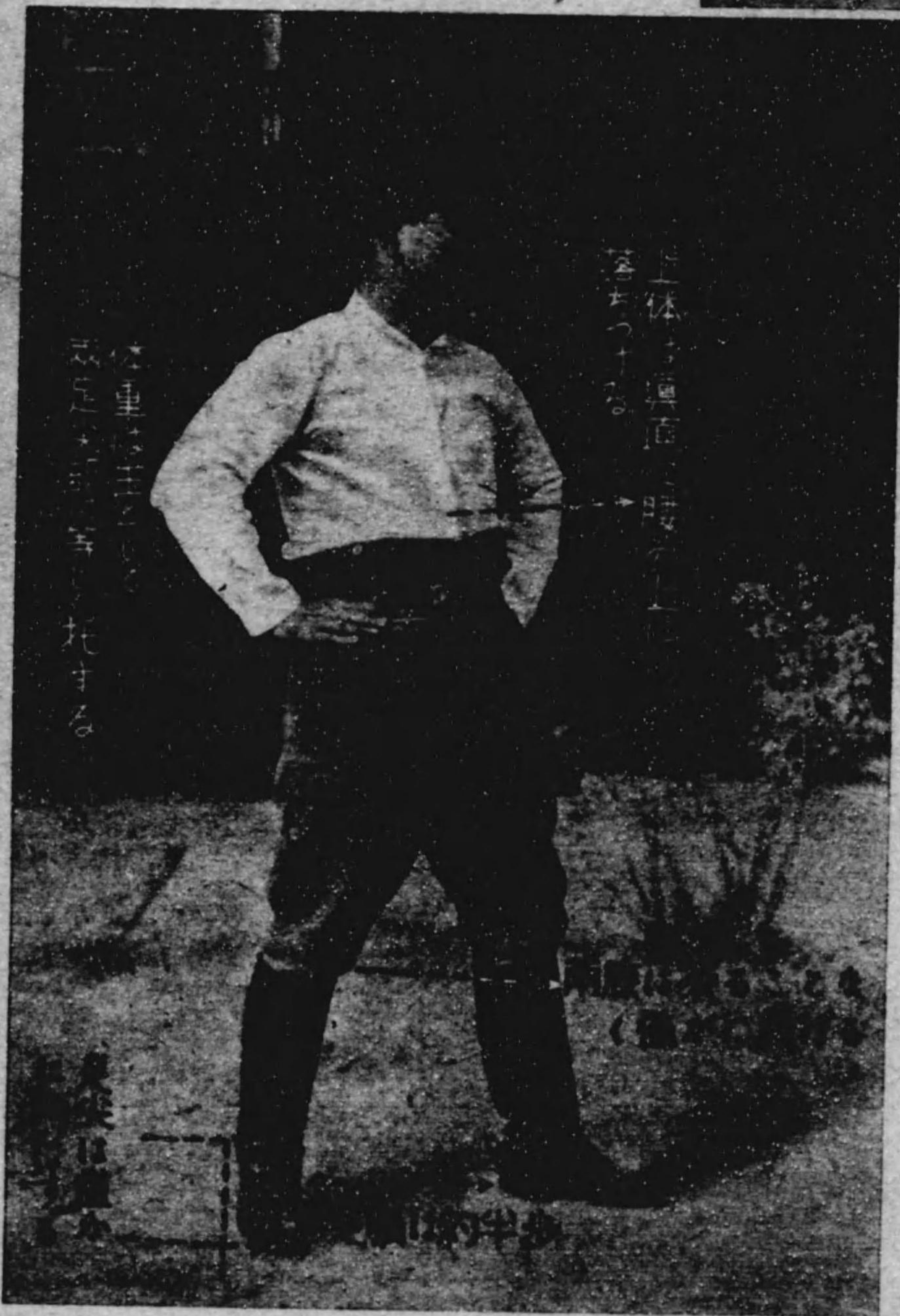
陸軍少將 芦 塚 長 藏



正面

頭を正面にし、眼を敵眼に注
いだまま、右足尖をもつて半
右に向きつつ、左足を約半歩
前に踏み出し、手を腰にする。

側面



右足、左足を
托する

上体、正面
を向く

約半歩

統へ構い悪



①

←

足幅が広く上體が前にかかつてゐる。

右足が後にひけてゐる。膝が伸び、上體が正面を向きすぎてゐる。

↓

③



2



⇒ 左足が内、右足尖が外を向いてゐる。

ろこどるす統立りよ統へ構

←

正面に向きつつ右足を左足にひきつける。



⇒ 不動の姿勢に復する。

3

進退は敵に對して距離を伸縮し、また移動の輕捷を計るために行ふものである。
左足は地面に近く過ぎ右足は左足に伴つてすぐに移動する。



①

右足大股を軽く踏み切る



③



②

左足一定位置におく

例のLへ前い悪



右足を屈げすぎ、左足を上げすぎたところ。

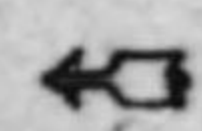


④

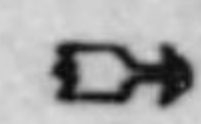
左足尖が内に入り右足が後に残つてゐる。上體がまた前にかかりすぎる。

へ後・例の

〔へ前〕い悪

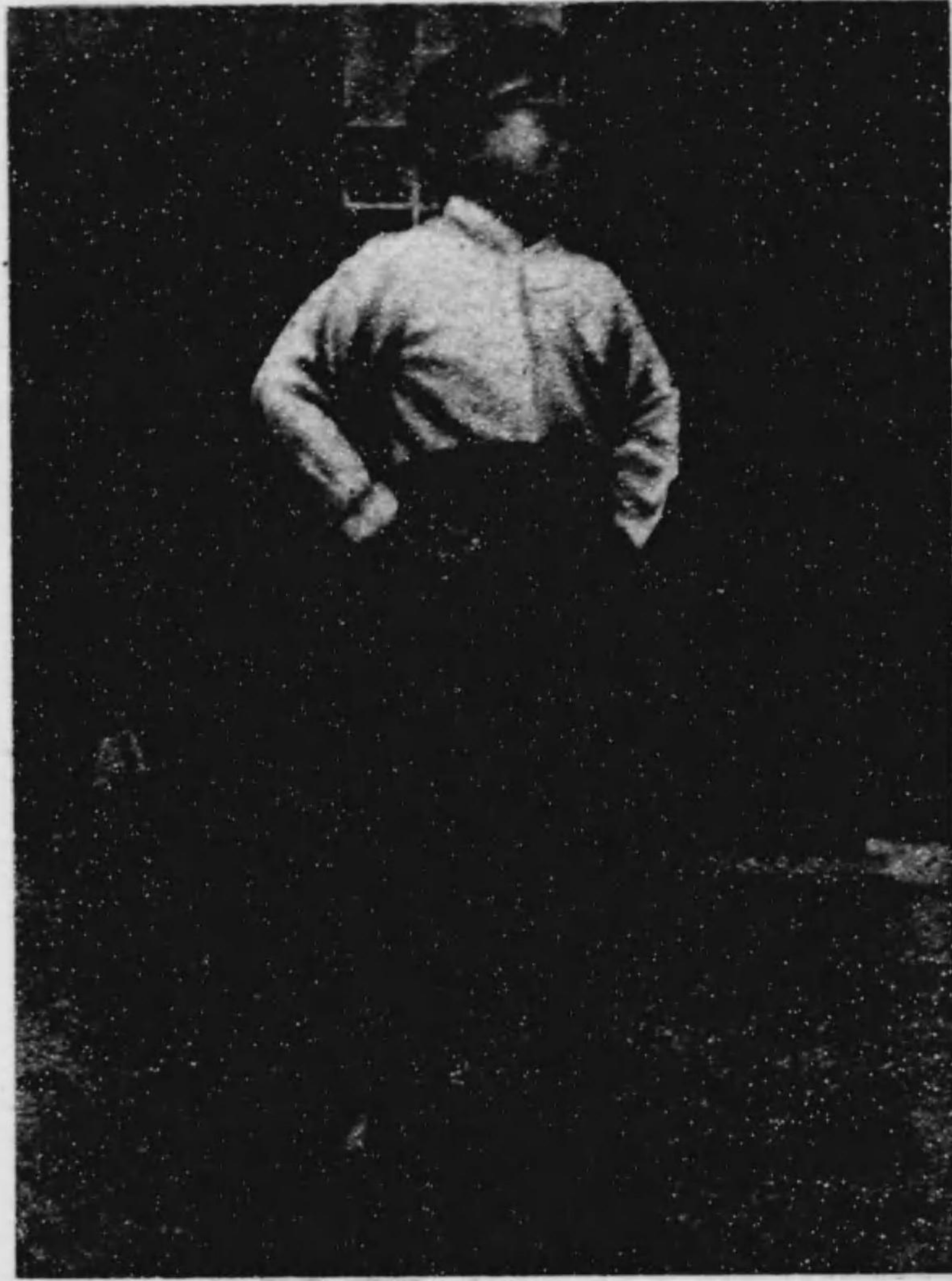


両足を同時に踏み切つたところ。

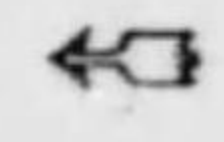


両足をふんばつて踏み切らずに歩く式のもの



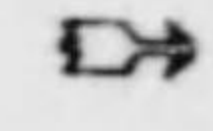


へ 後・例 の



兩足を同時に踏み切つたところ。

〔へ 前〕い 惡



兩足をふんばつて踏み切らずに歩くもの

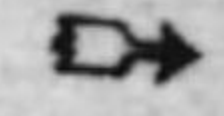




上体を正しく腰を推進す
下腹に力を入る

足は時を引抜く
銃へ構てしへかにともを足は時を引

引抜く時は足をともにかへし構へ銃の姿勢に復す



左足を真直ぐ後に
ひかずに斜め後に
ひき、足が交叉し
てゐるところ。
この癖は多いから
特に注意を要する



左足を正しく
ひかずに、狭
くなつたとこ
ろ。



←

膝を屈げすぎ、
上體が前に傾き
すぎてゐる。



→

上體が後に反つて
膝を正しく足の方
向に屈げずに、内
方に屈げてゐる。



①

① 右足尖部で十分に強く短く踏み切る。左足はなるべく地面に近く、足尖を敵方に向けて進出する。
② 左足を平らに地面に踏みつけ、體重をこれに托す。右足は後に残さぬやう左足の運動に伴ふ。
③ 下腹部に力を入れ、左足に體重を托し、右足は約半歩後方の正規のところ、地面につけて平均をとる。



②



③



會をと方び運の足右と方けつみ踏の足左、ち保を均平の體
 せらやにすけつに面地、後り切み踏を足右、めたるせさ得
 出がとこすほなを癖る残に後が足右、とるやてしうか。る
 。る來



る才損を容威ぎすげ曲を膝兩



←

左足が地面から
 上りすぎる。

兩膝を屈けすぎ、
 體が前に傾き、
 右足は爪先のみ
 にて立つてゐる。
 足幅もまた廣い。

↓



劍尖が上り、且つ敵
眼に注いでゐる。

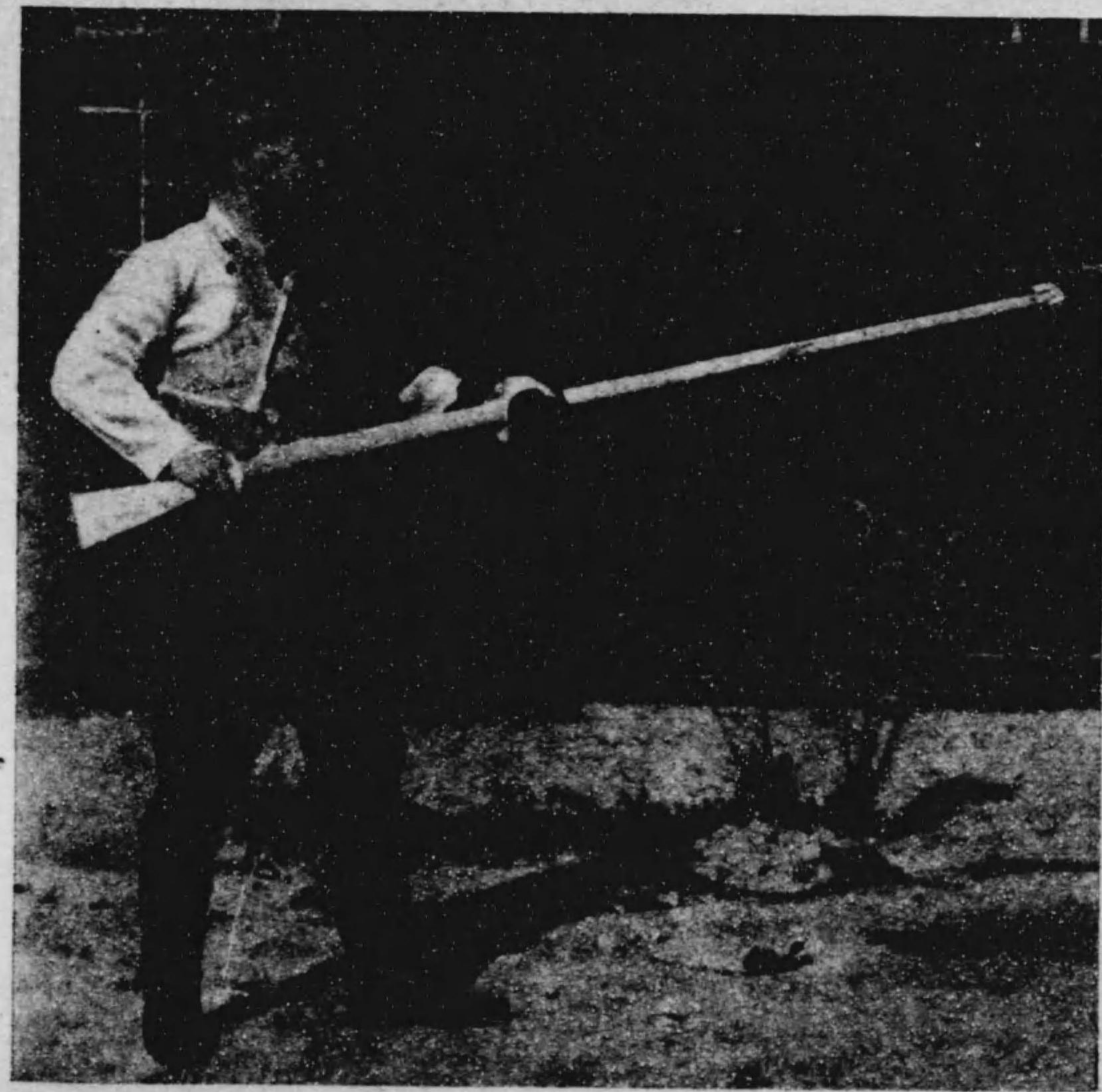
↓



第一動にしておいて劍尖が上る



両手の持ち方が悪



第一動

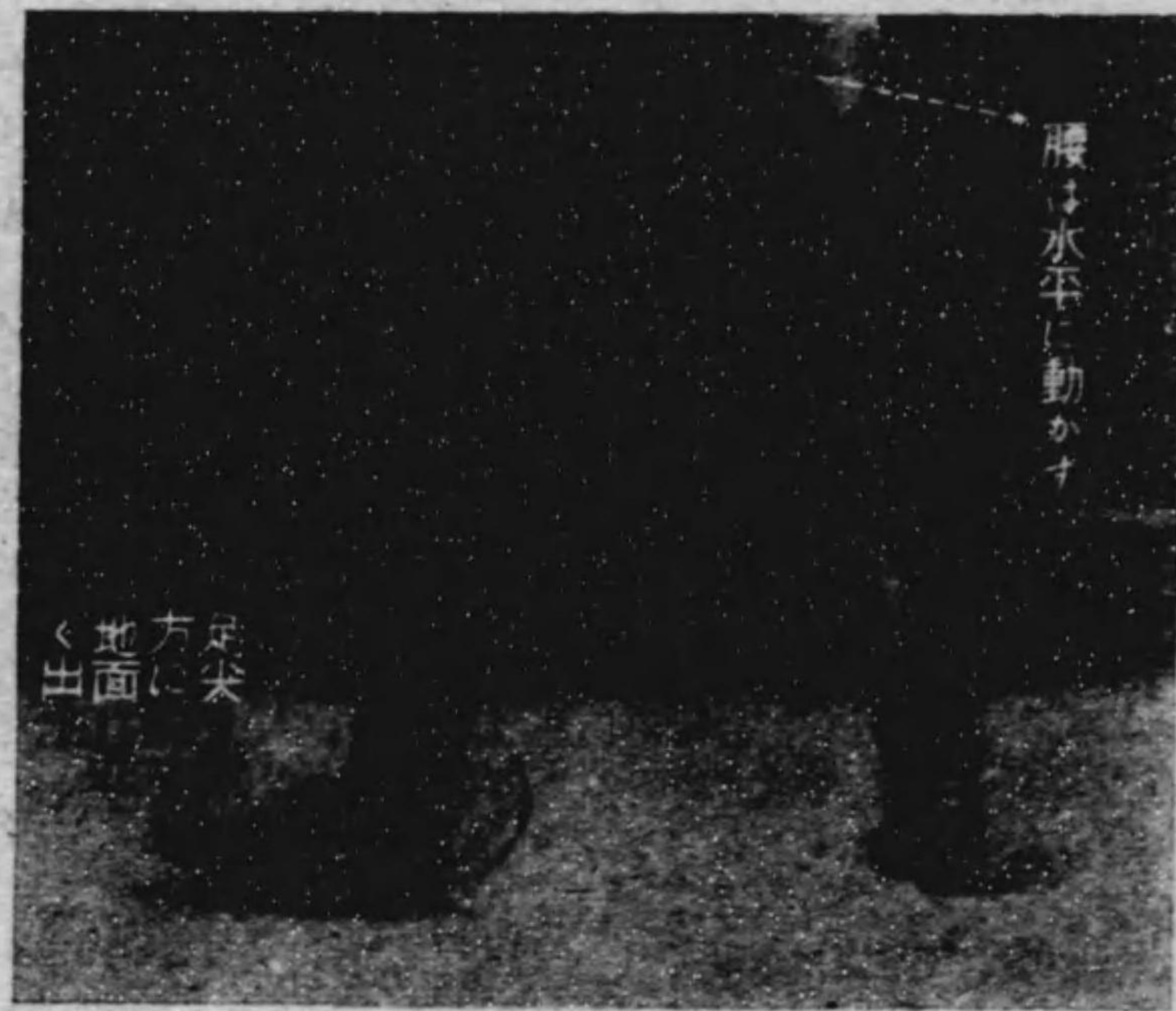
左足を前に出すと同時に、右手をもつて銃をあげつつ前に倒し、左手をもつて概ね下帯の下部を握る。

第二動

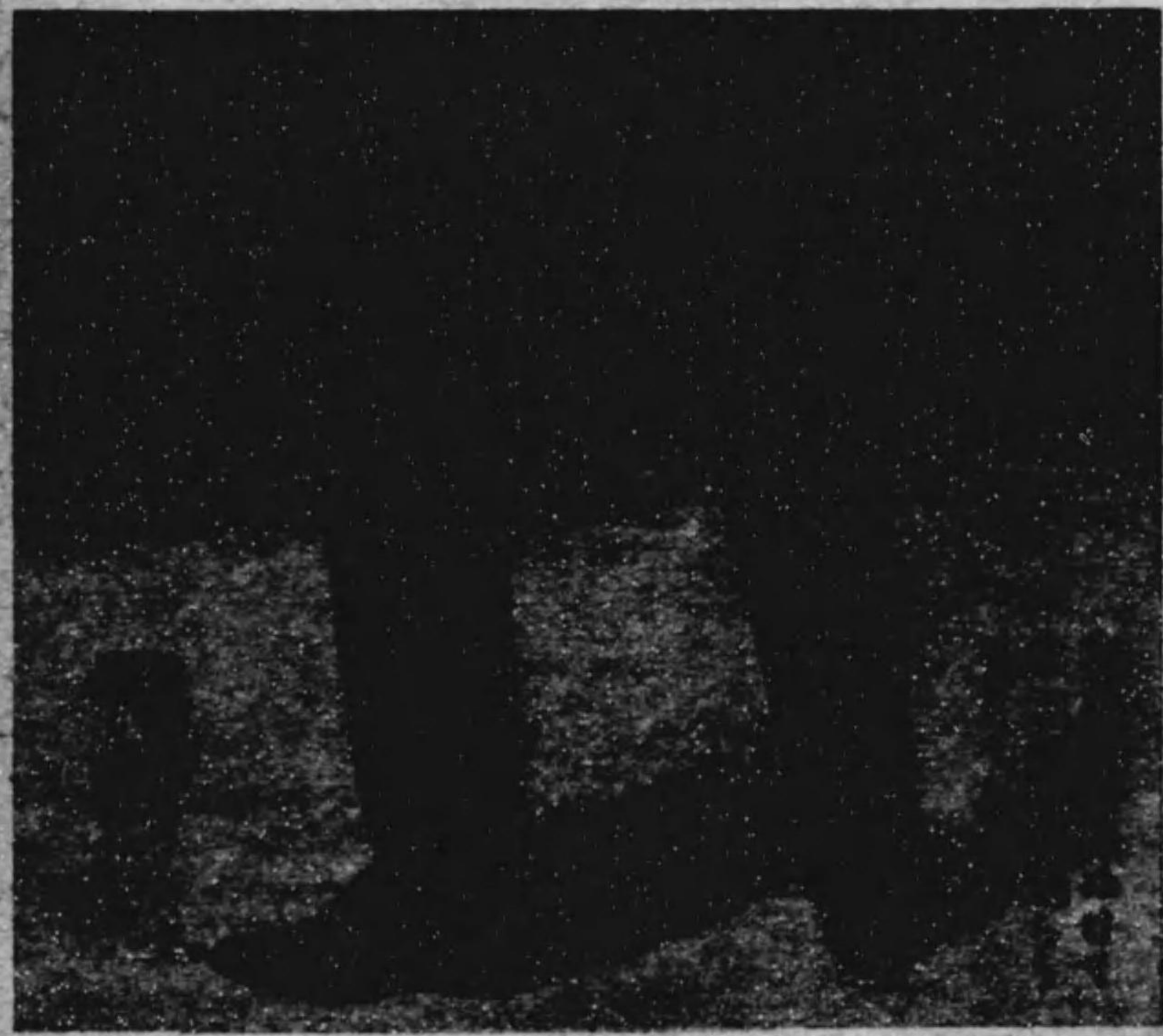
右手をもつて銃把を上方より握り、右拳を臍骨(こしぼね)附近におく。劍尖は概ね敵眼に注ぐ。右手の位置は圖にとらはれず、體格に應じ「こしぼね」附近におく。



領要り切み踏の足左



領要く退を足左



領要り切み踏の足右



領要す出を足左

かるあで動運對反はへ後へ前〔註〕
。い難り判はで真寫たしうか、ら



←

小指の方に力を入
れて軽く握る。

木被のところが
上方から握る

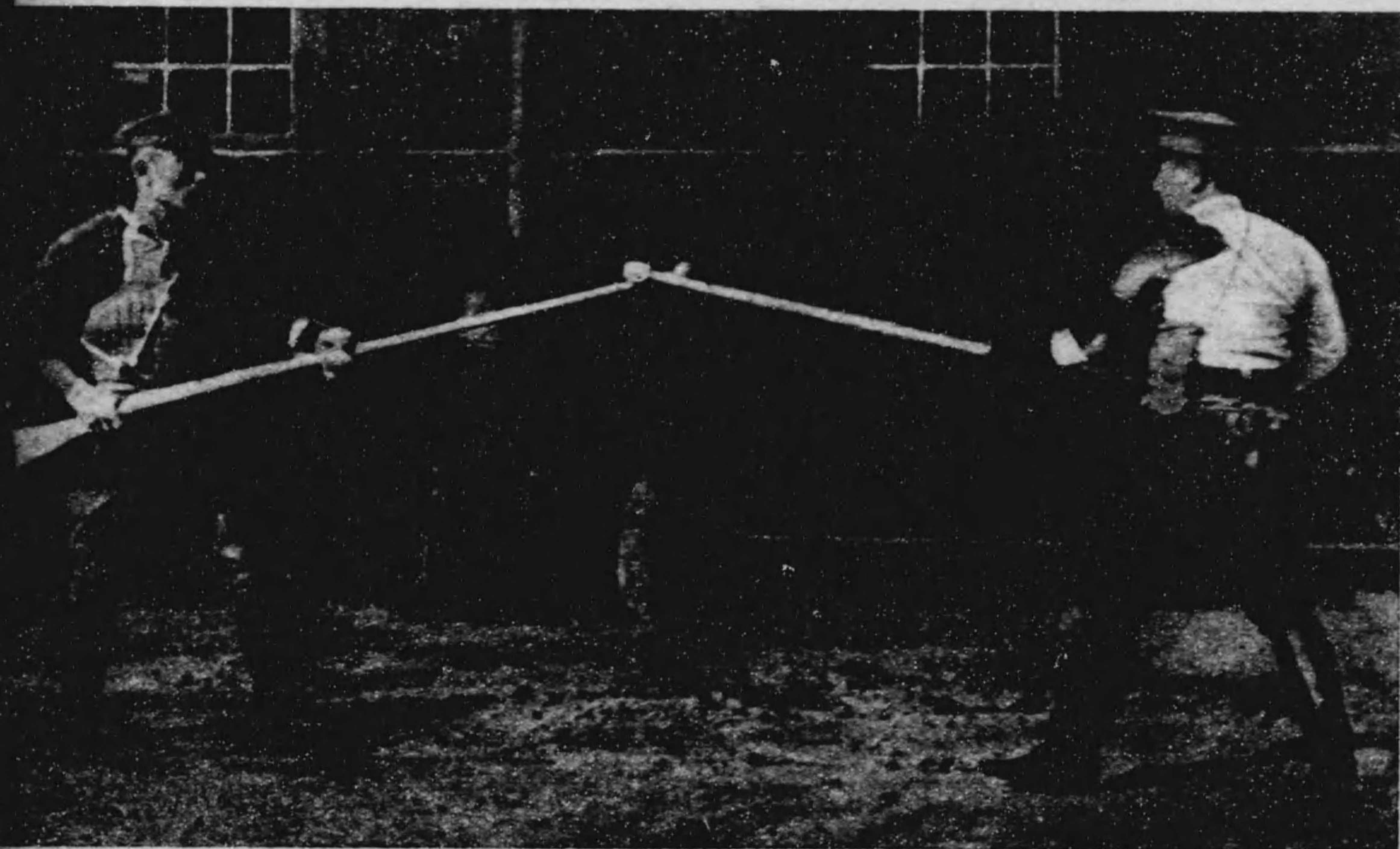
格體すれはらとに圖は置位の拳右〔方り握の統いし正〕
くおに近附ねぼしこりよに



〔方り握い惡〕

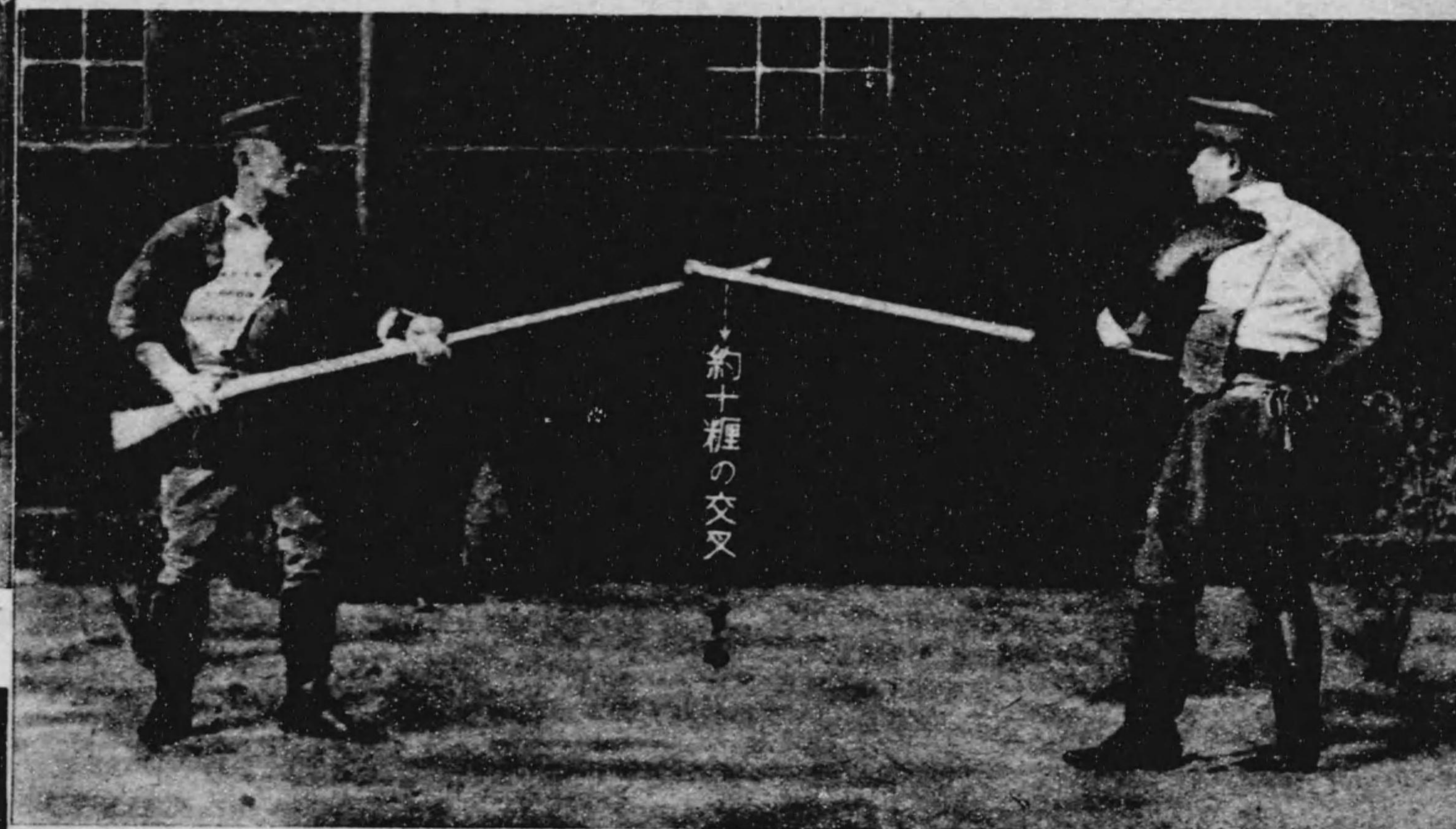


しへ後しへ前て

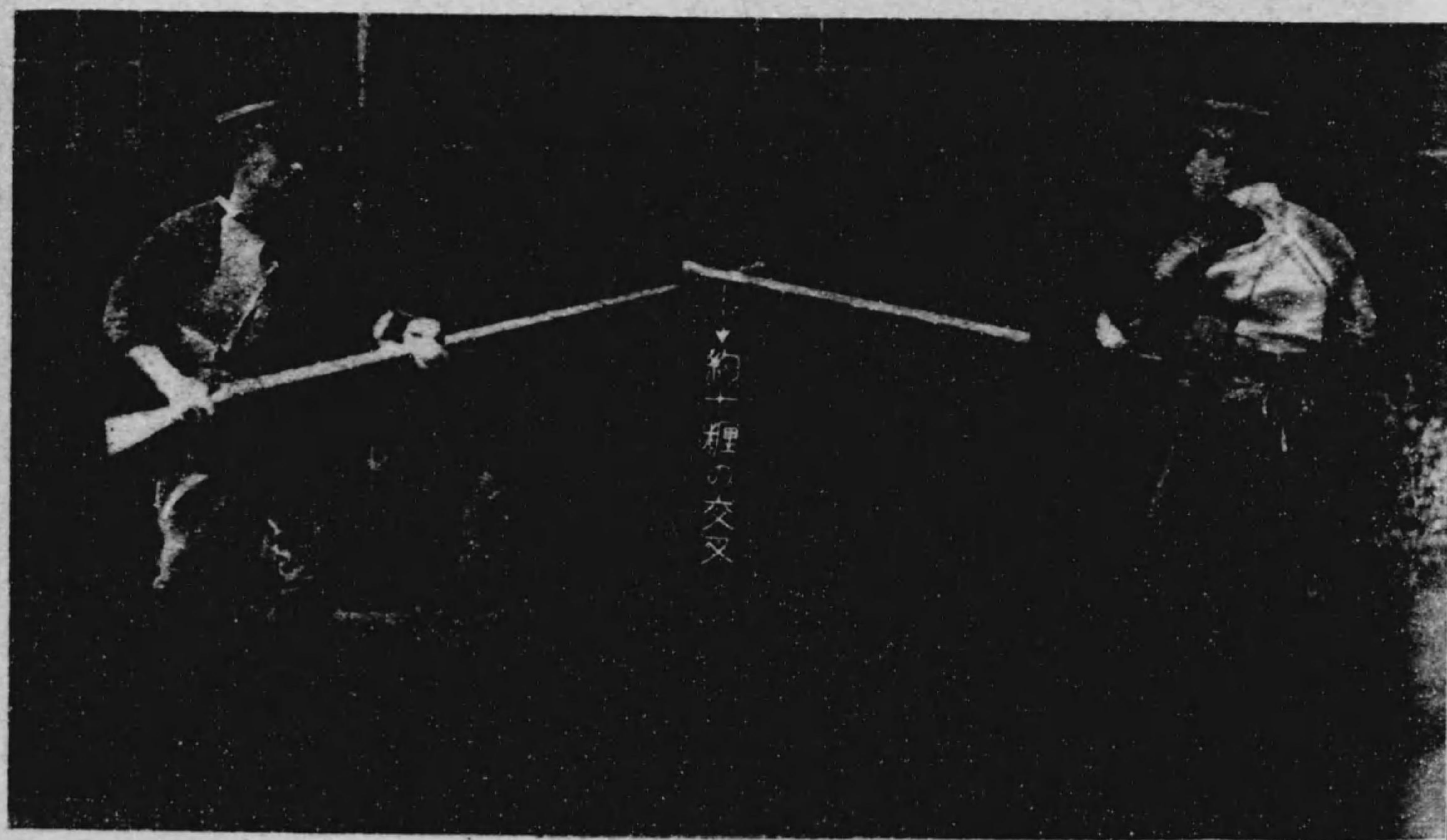


きつに地が足後は者の側左、足前は者の側右 ③
るゐてしとうば運を足前び及足後各

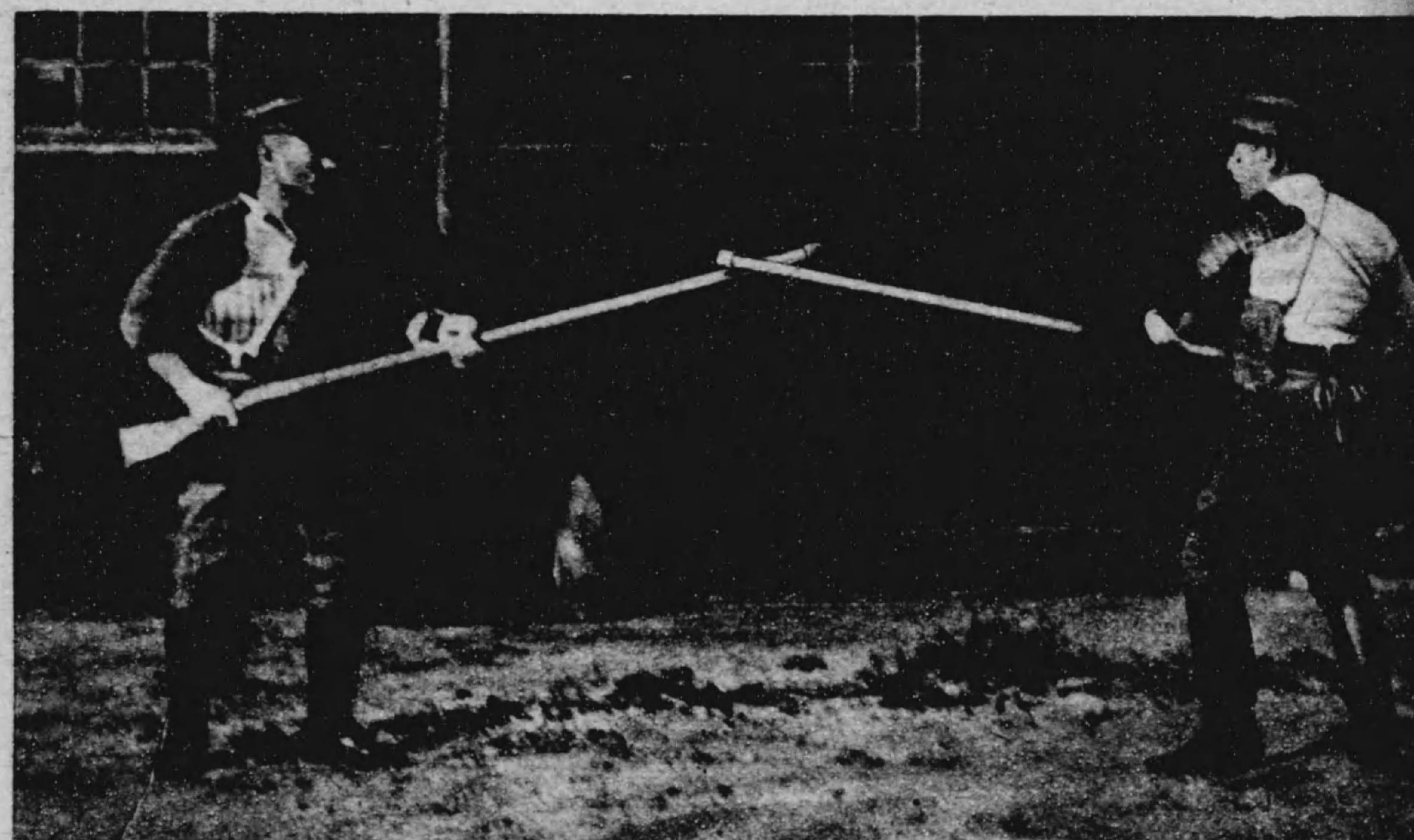
し又交を剣



ろことたし又交を剣 ①



ろことたつ終が作動のへ後、へ前 ④



ろことるすしへ後しが者の側左てつ従にるすしへ前しが者の側右 ②

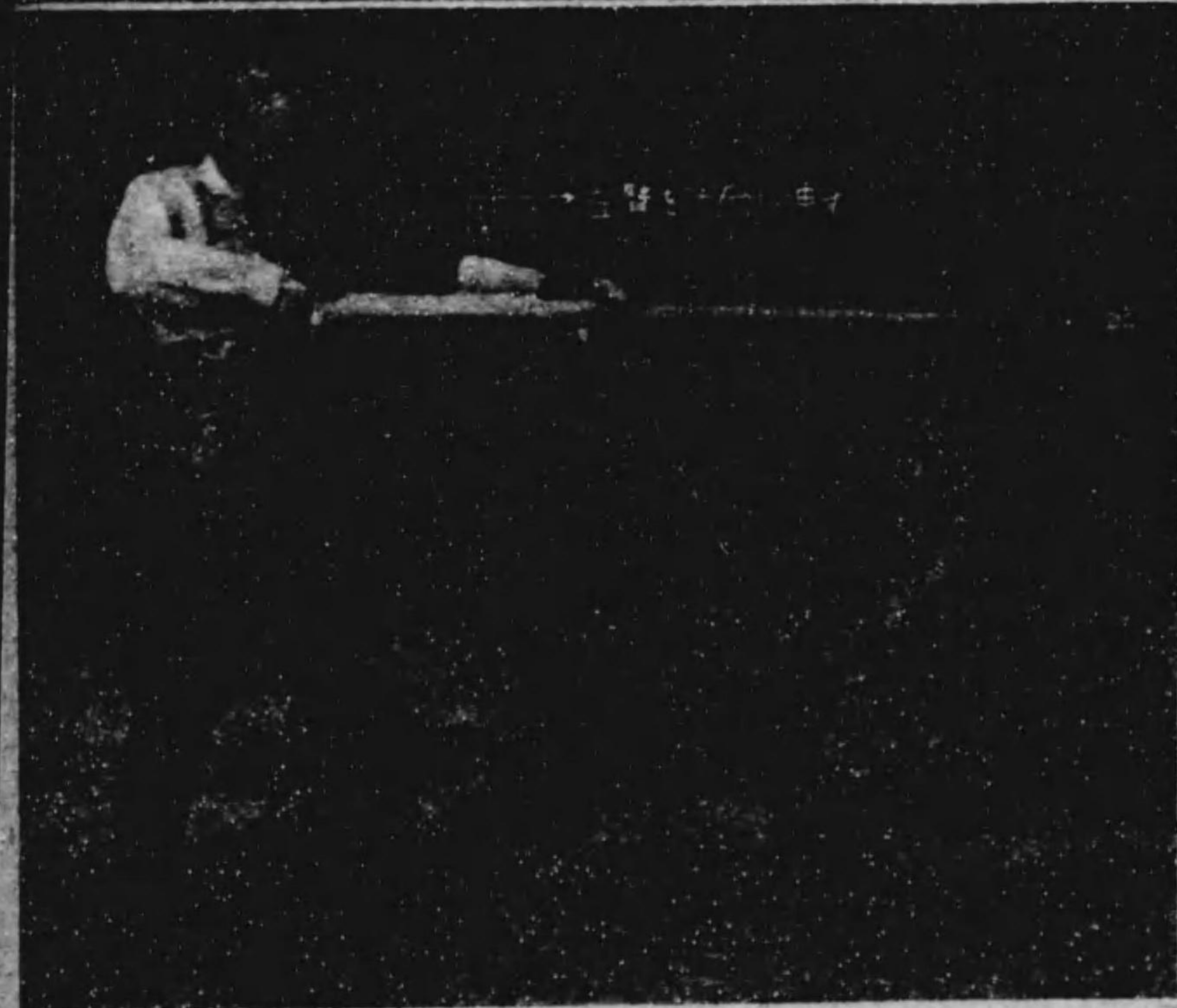
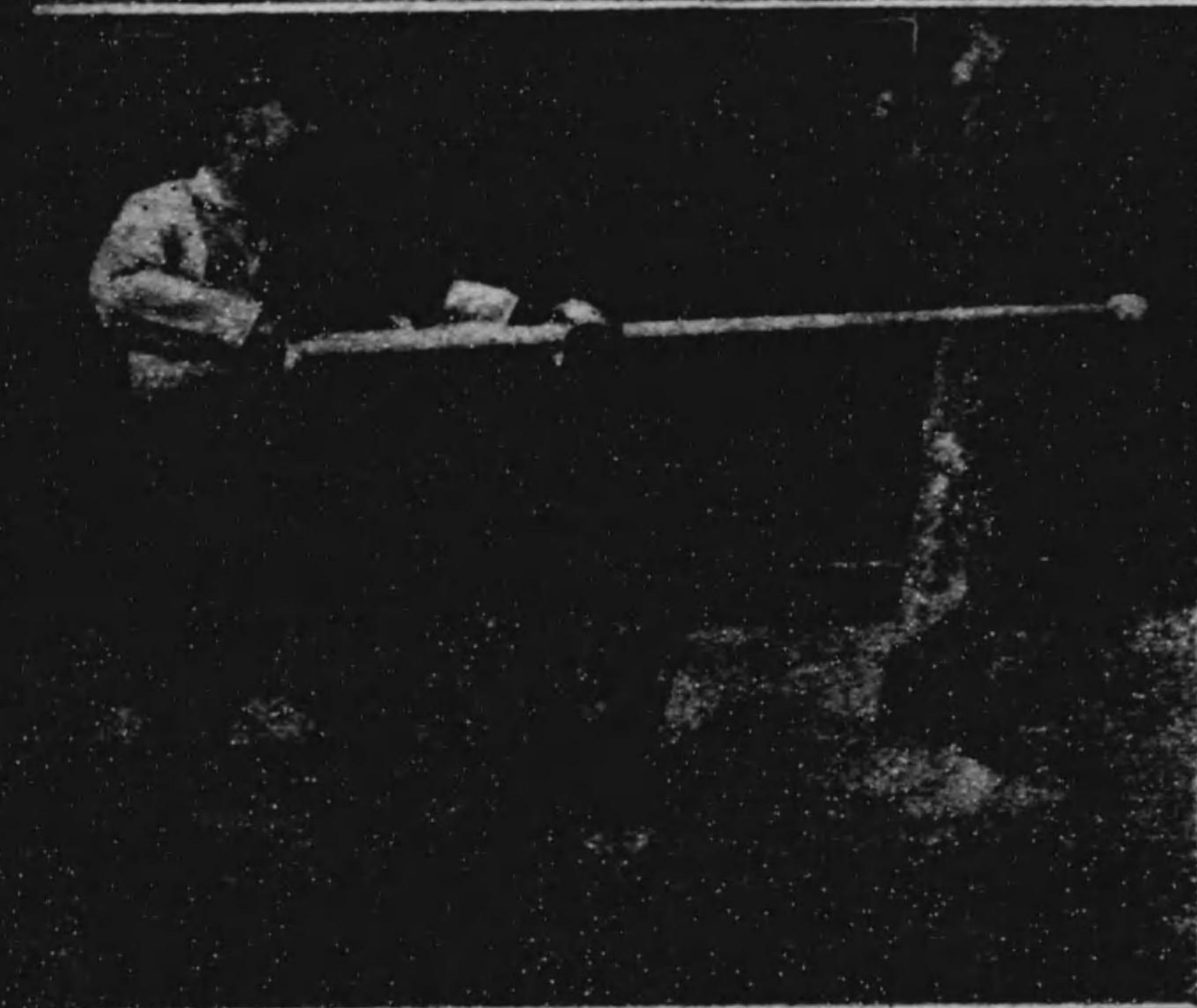
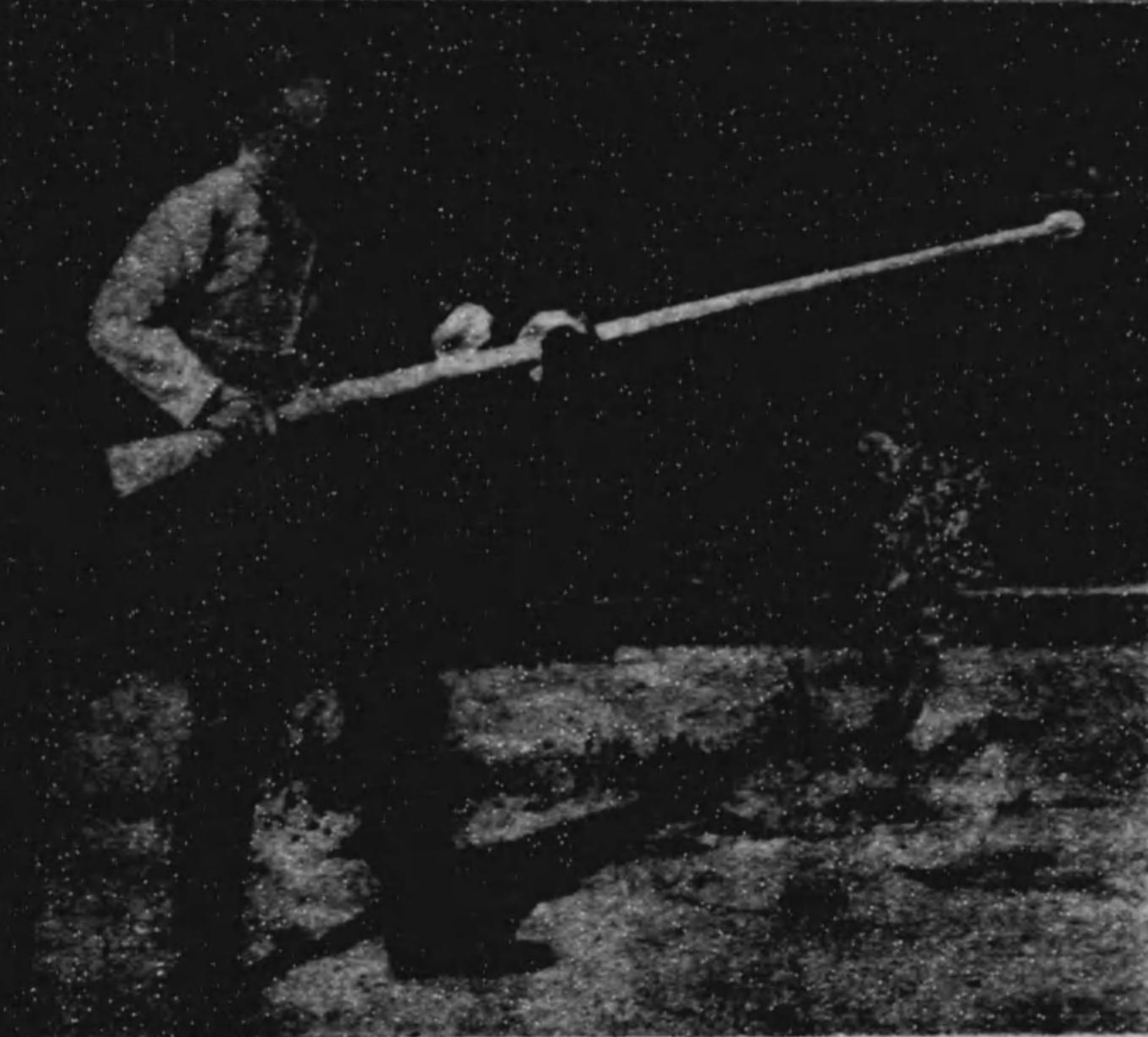
其場刺突
右手の出し方



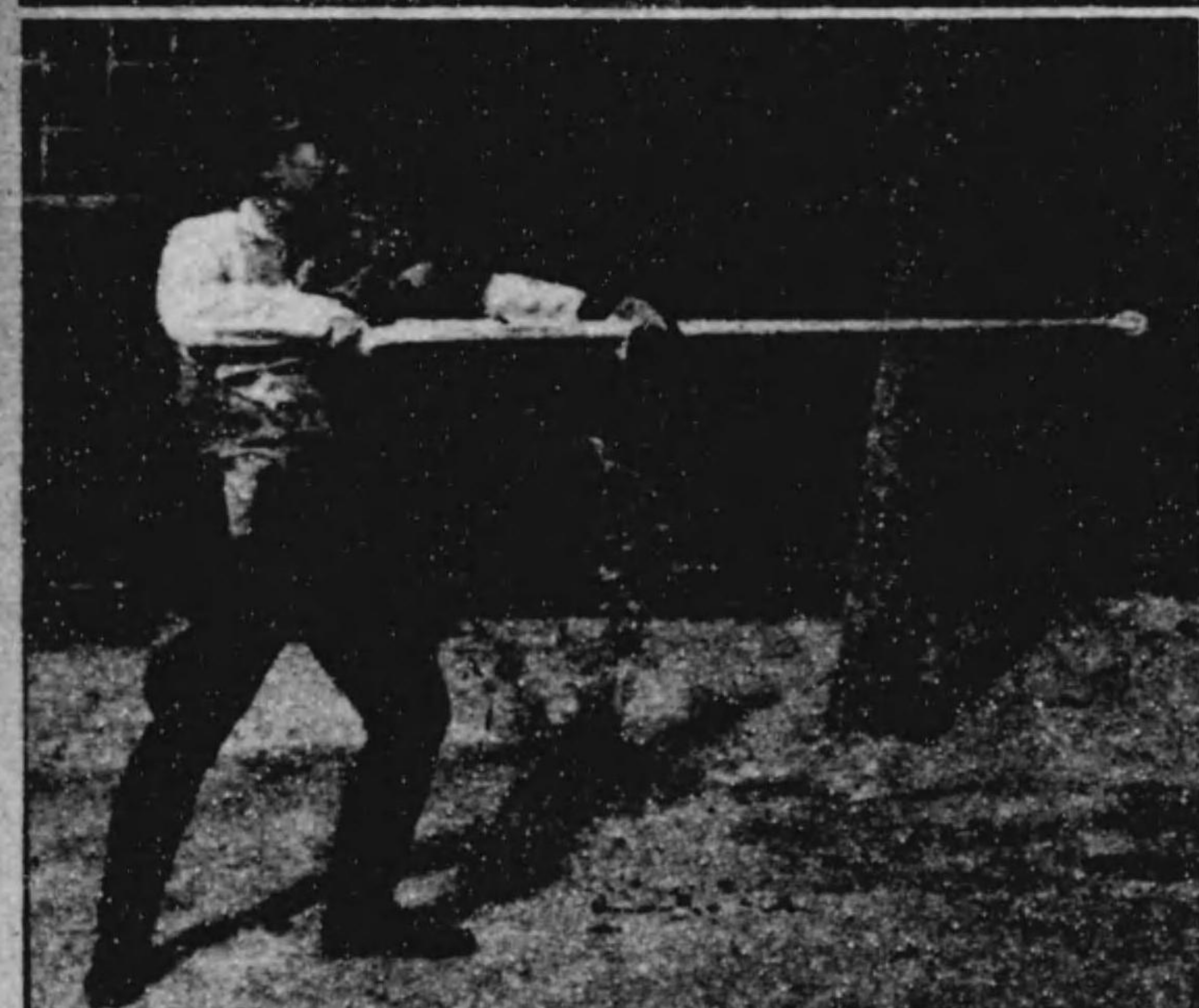
臆骨(こしほね)附近に
ある右手を近路を経て
左乳のやや下方にもつ
てゆく要領を示す。



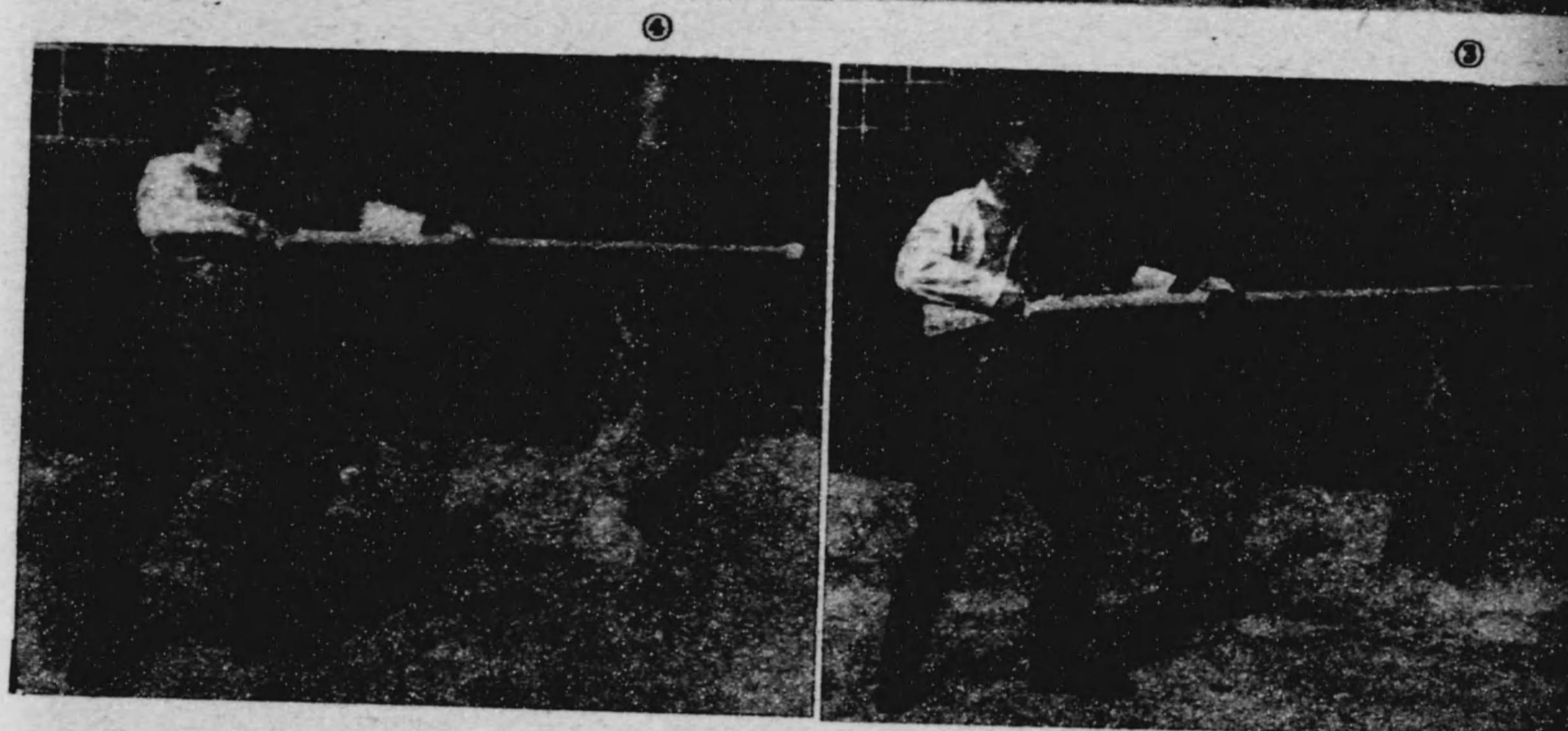
臂の動作



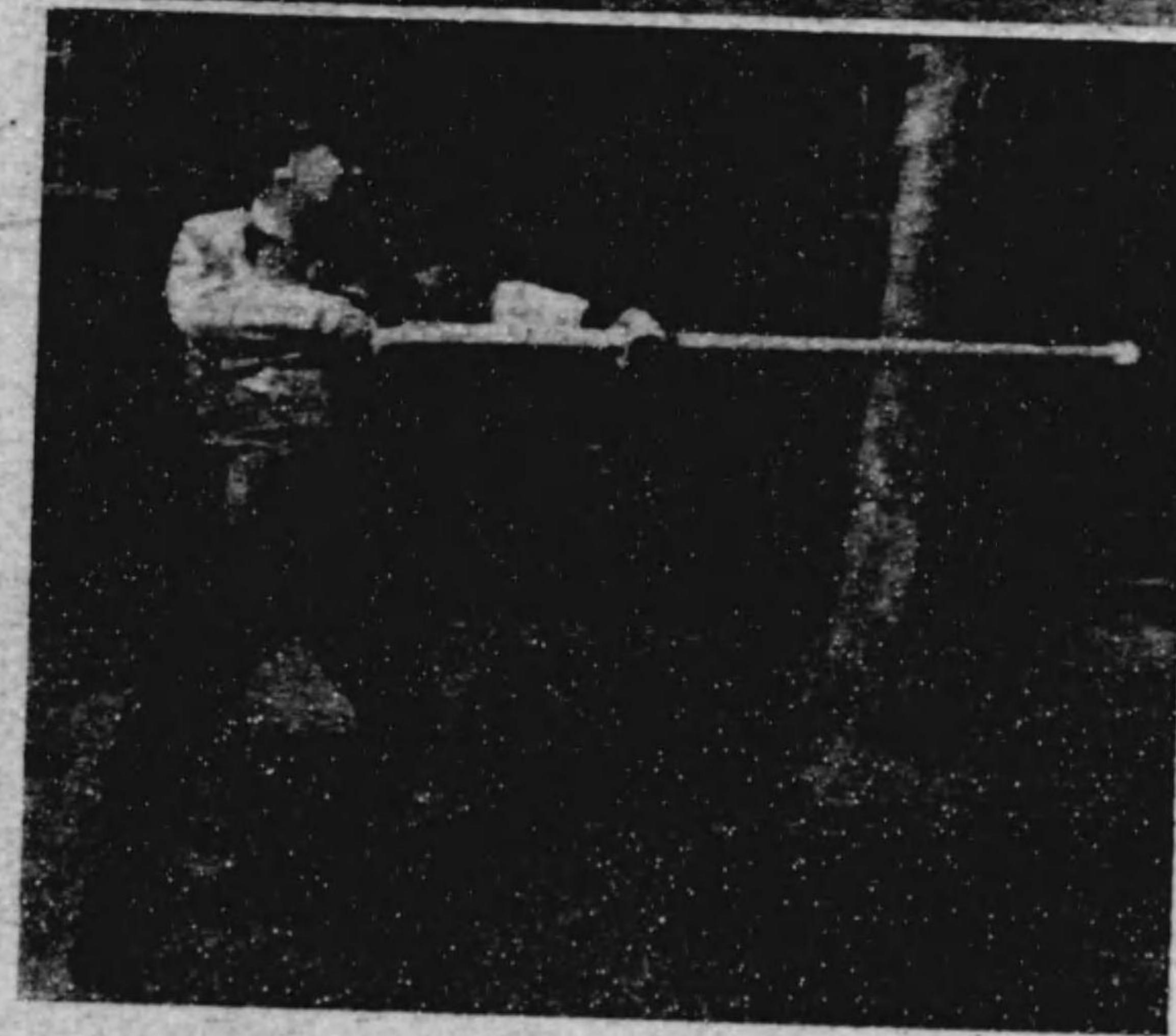
両手を握りかへることな
く、茶巾絞りの心もちで
まっすぐ前に突き出す。



右足で強く踏み切り
約一足長突進して刺
突するところ。



臂と腰を推進
して體重を左
足に托し膝を
屈げる動作を
一致させる。

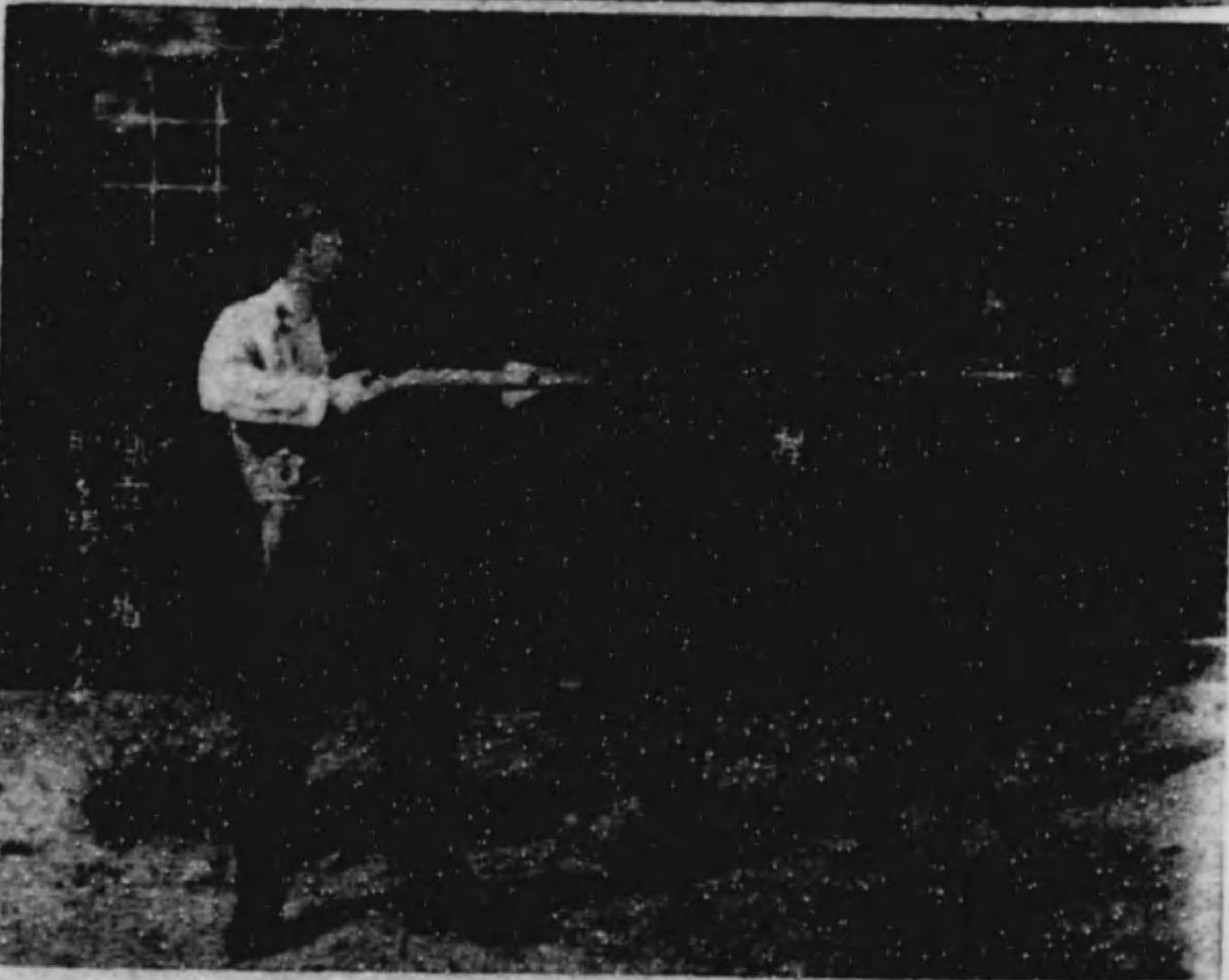
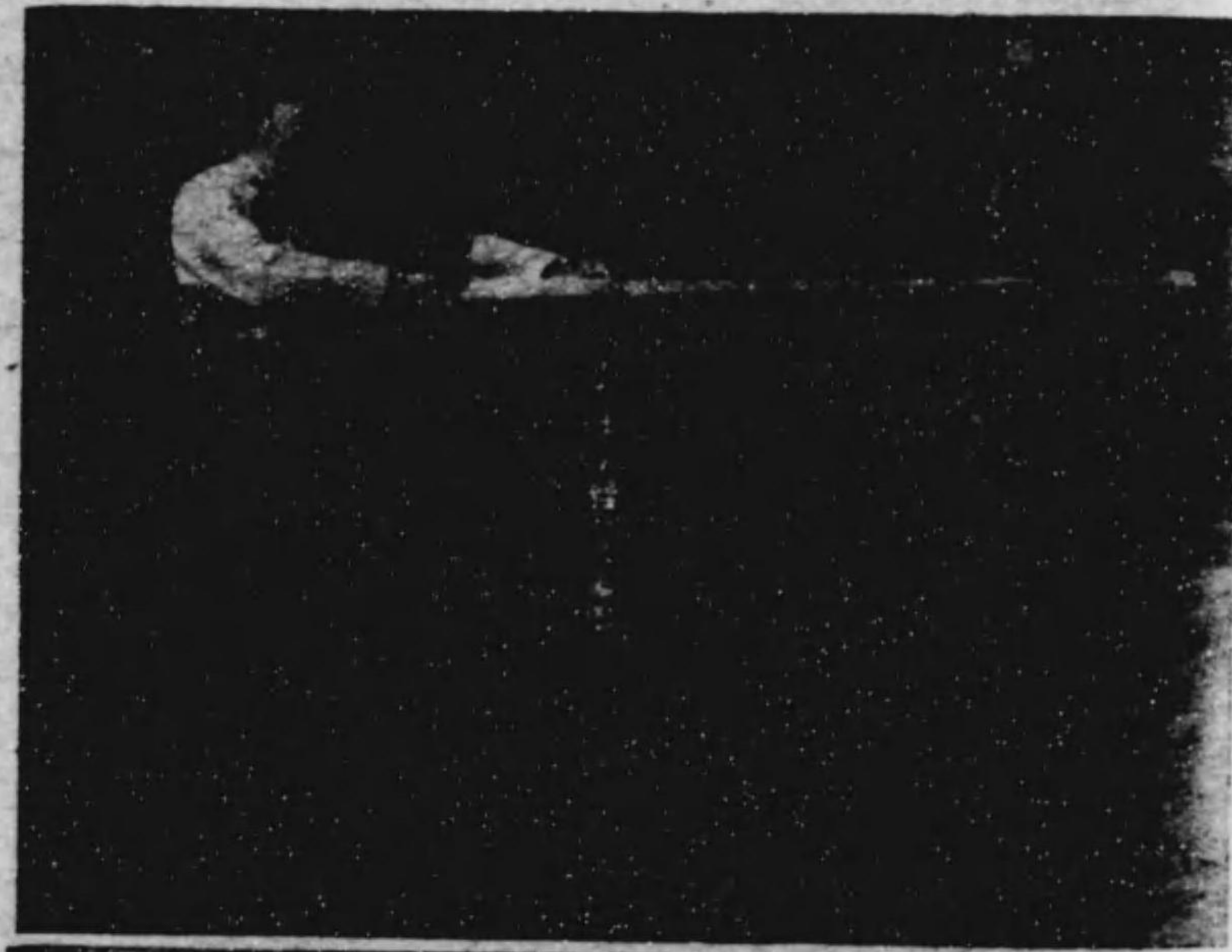


十分に踏み切つて刺突する。



突き上げ

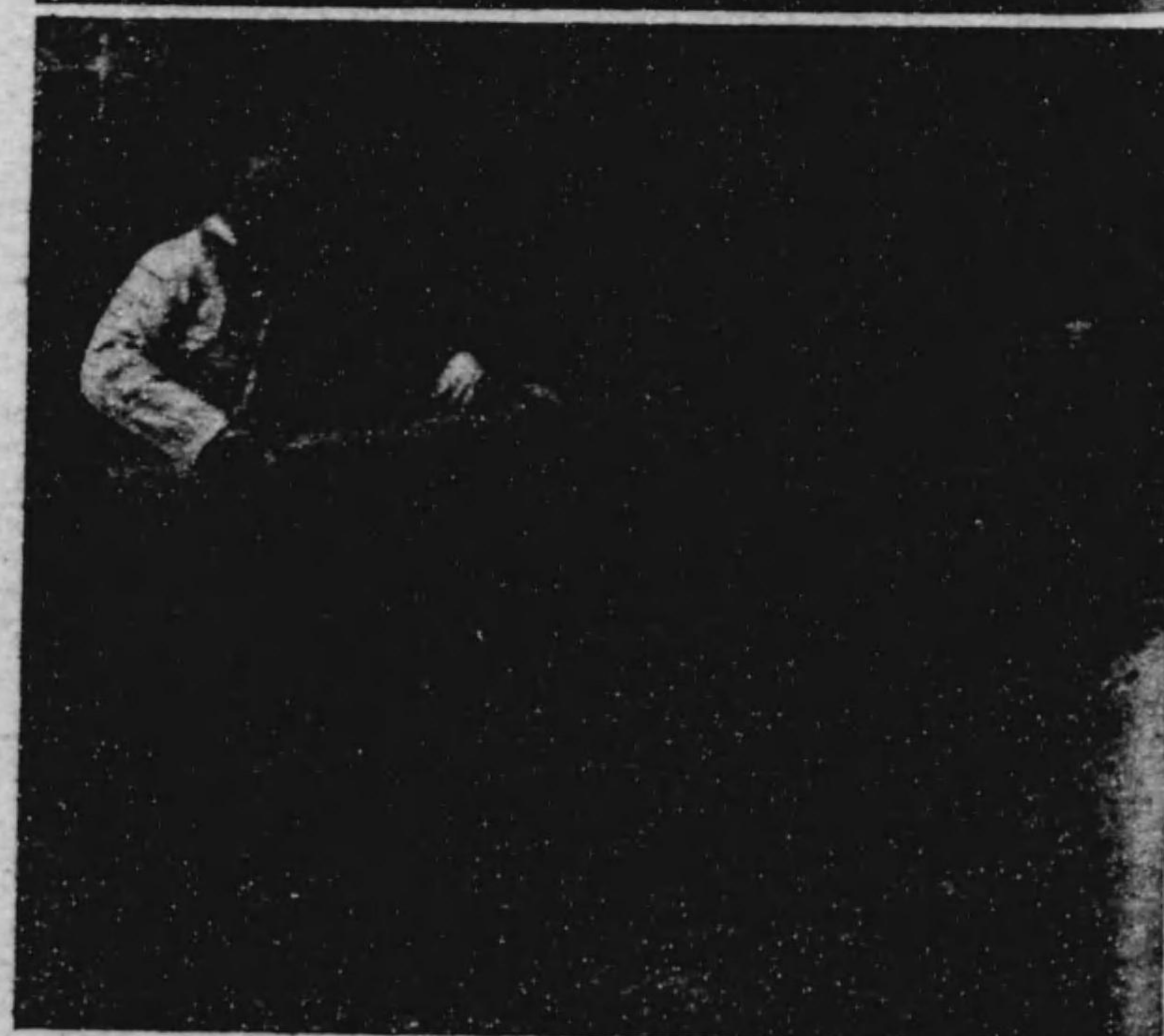
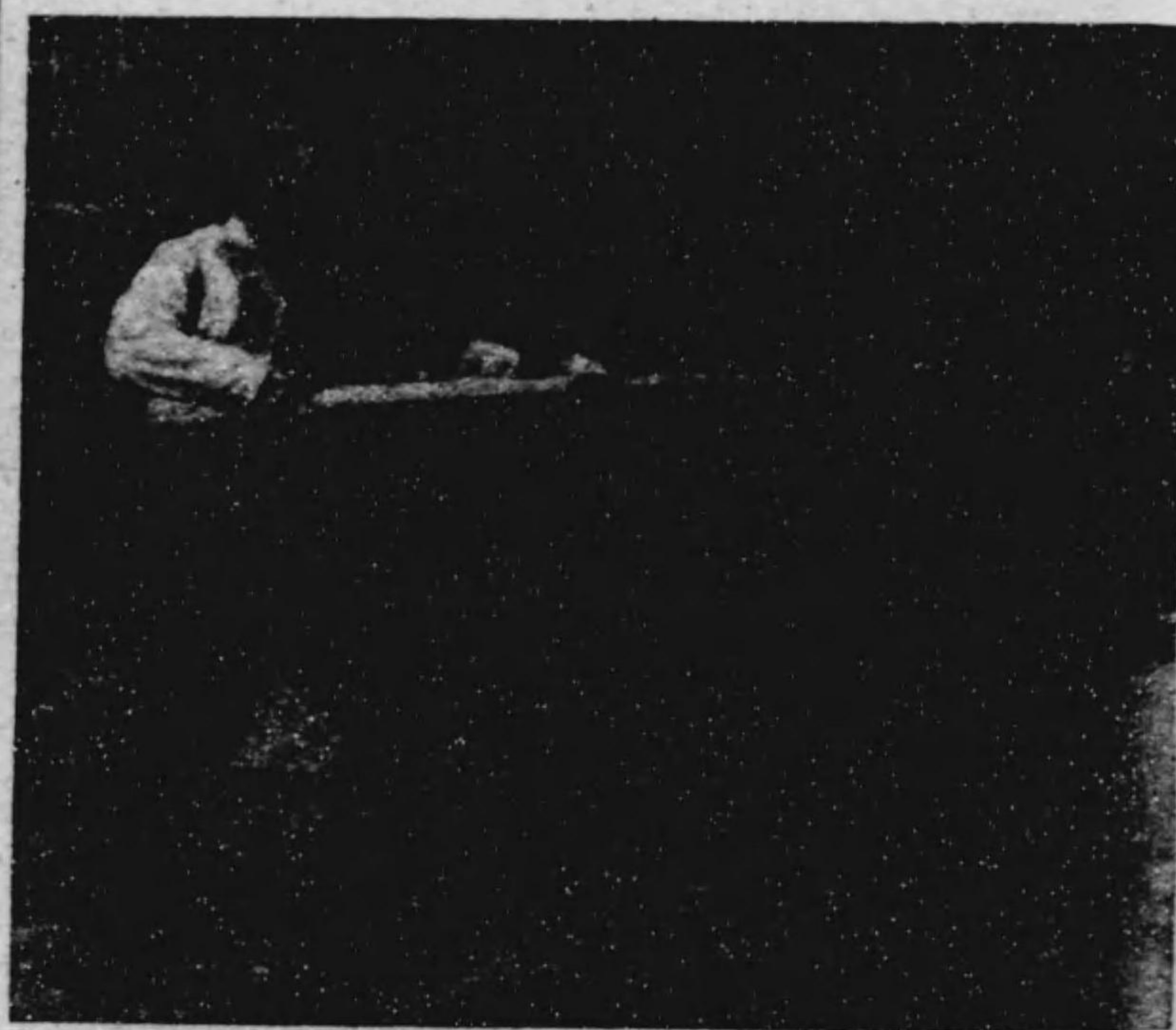
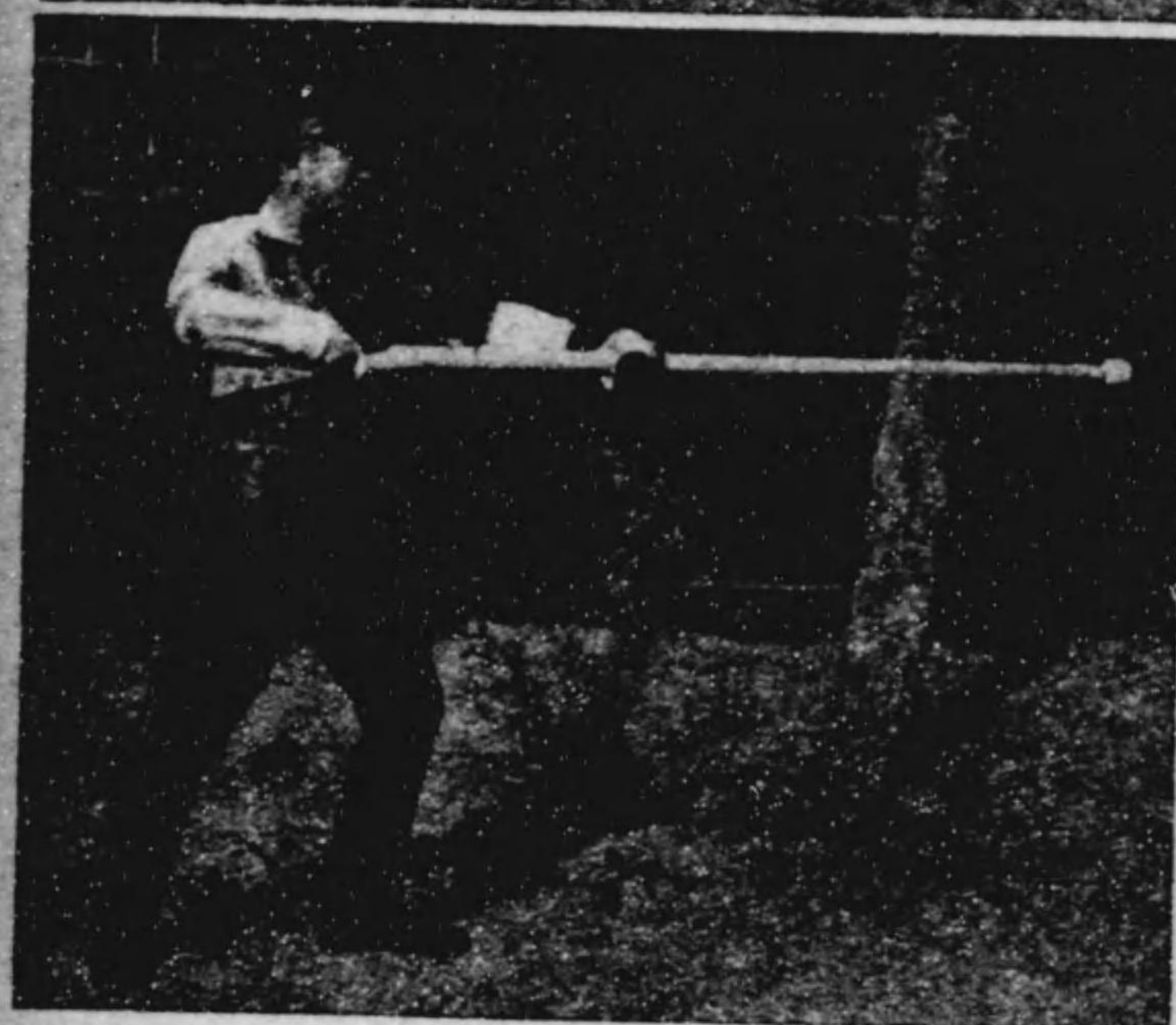
右肩に力を入れ
左手を上から握
りかへてゐる。



繰り突き

射撃姿勢のやうな突き方

作 動 き 抜 引



其場刺突と反對のやり方
である。刺突のときと同
じ氣合で迅速に抜く。

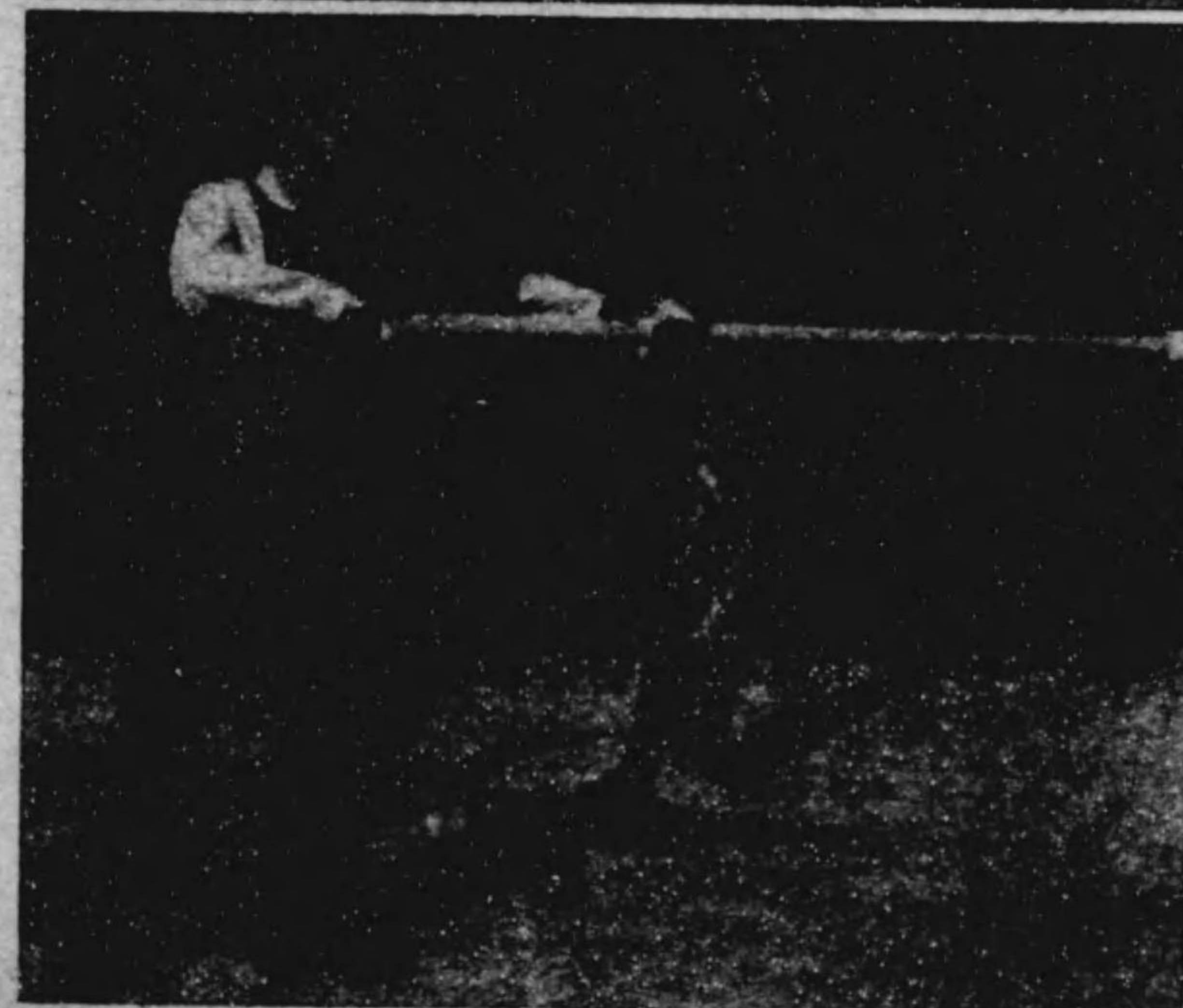
例 の [突 刺] い 惡



左膝を屈げすぎ、右足が
残り、前足に伴つてゆか
ない。踏み切りの悪いも
のによくある例である。

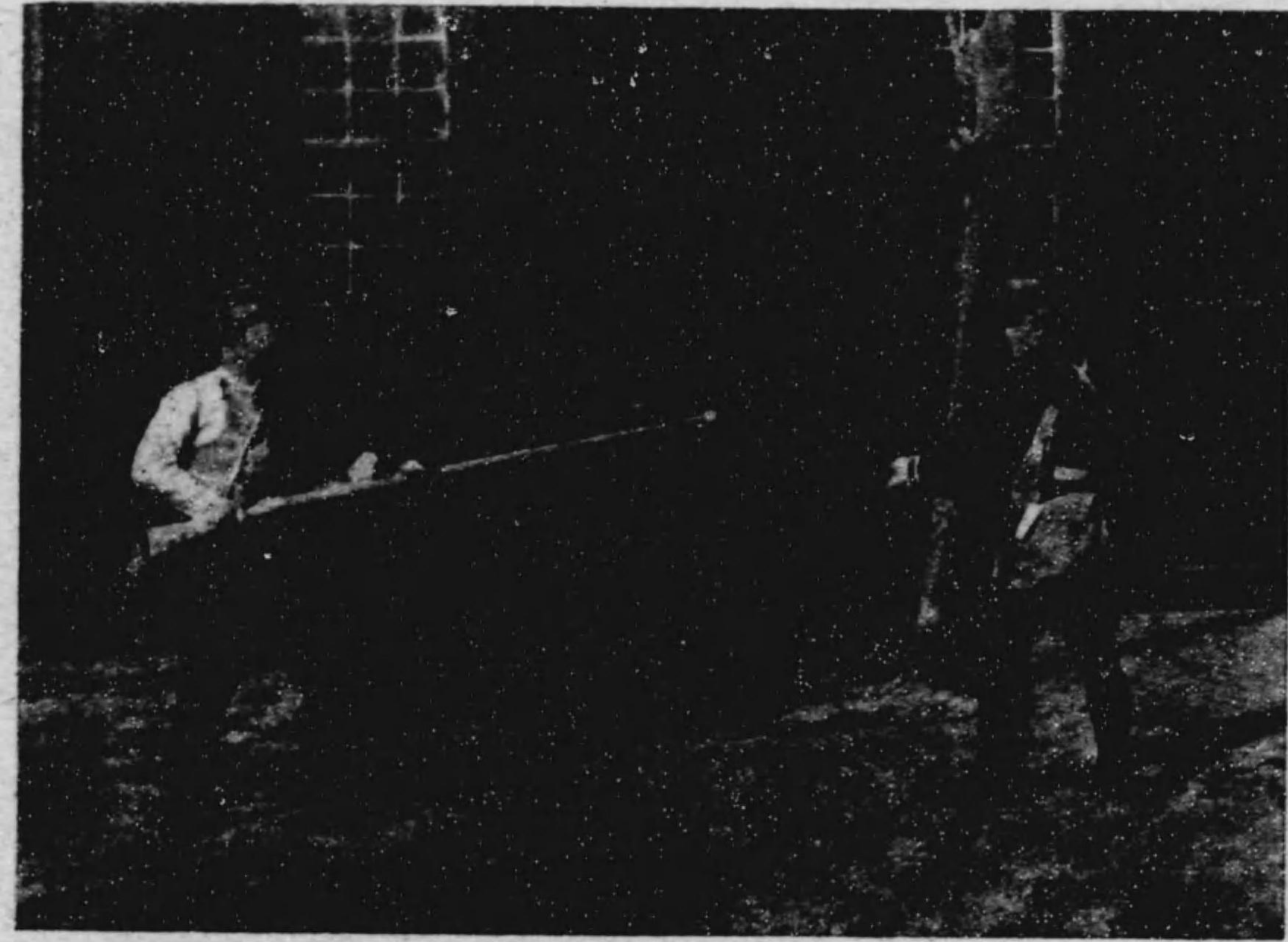


右足を踏み切らずに歩く
やうに足を出してゐる。



足幅がやや狭く右足が
斜後に退いてゐる。

正しい交又
約十握とする。



悪い交又

交又が深すぎる。

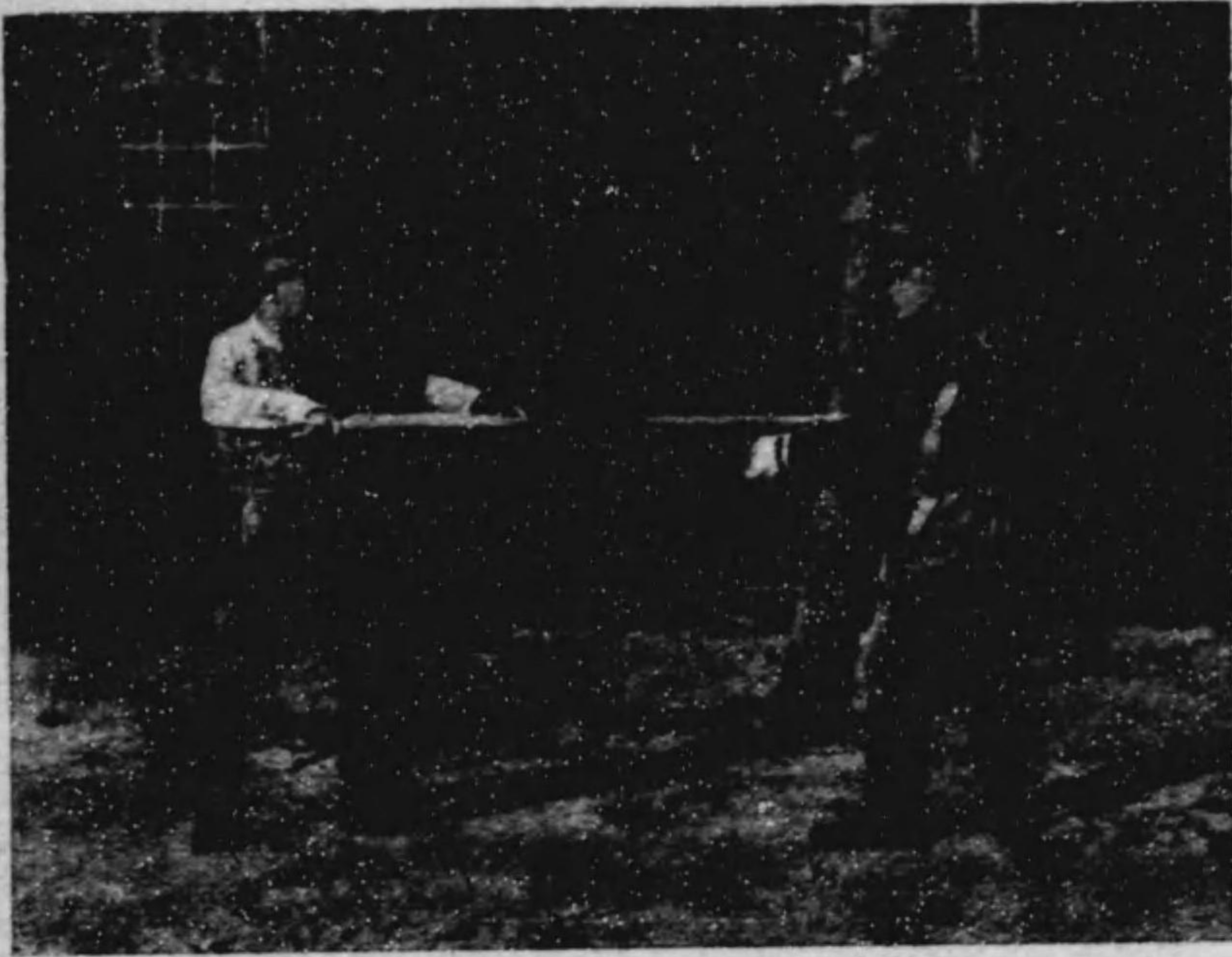


交又が片ちんばだ。



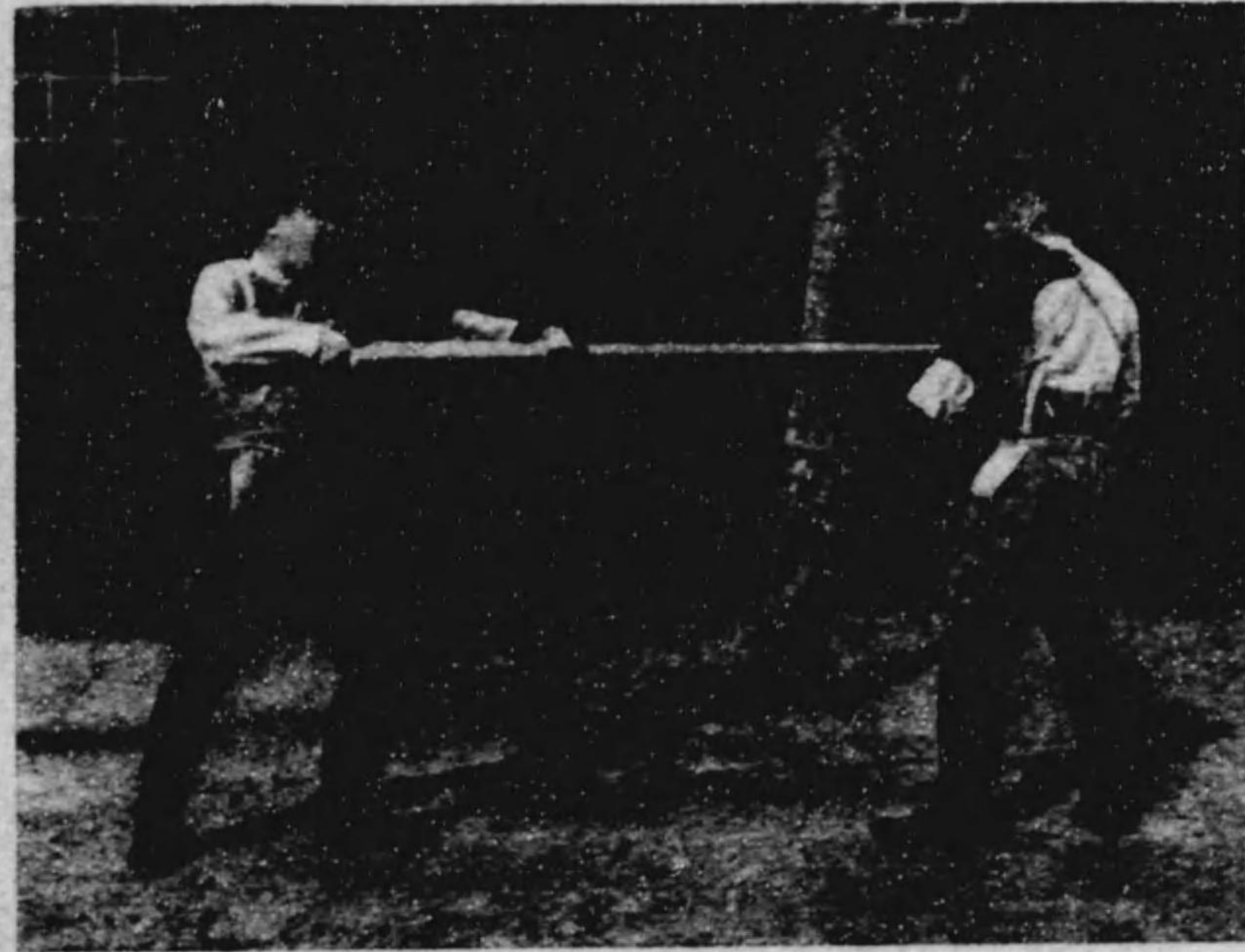
間合の取り方

脚はそのままにし、臂を正しく伸す。教官は劍尖の觸れるところまで進出する。



其場刺突

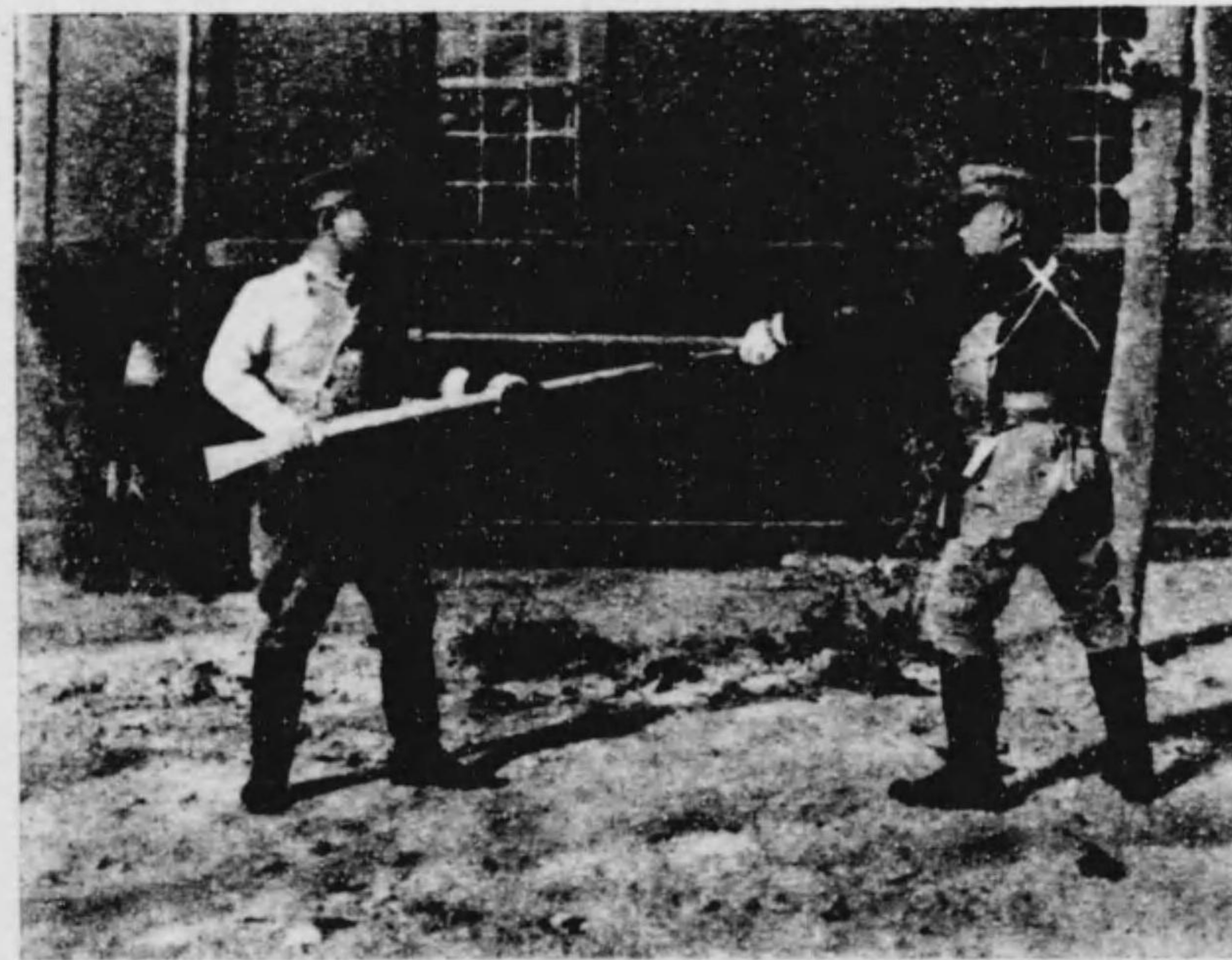
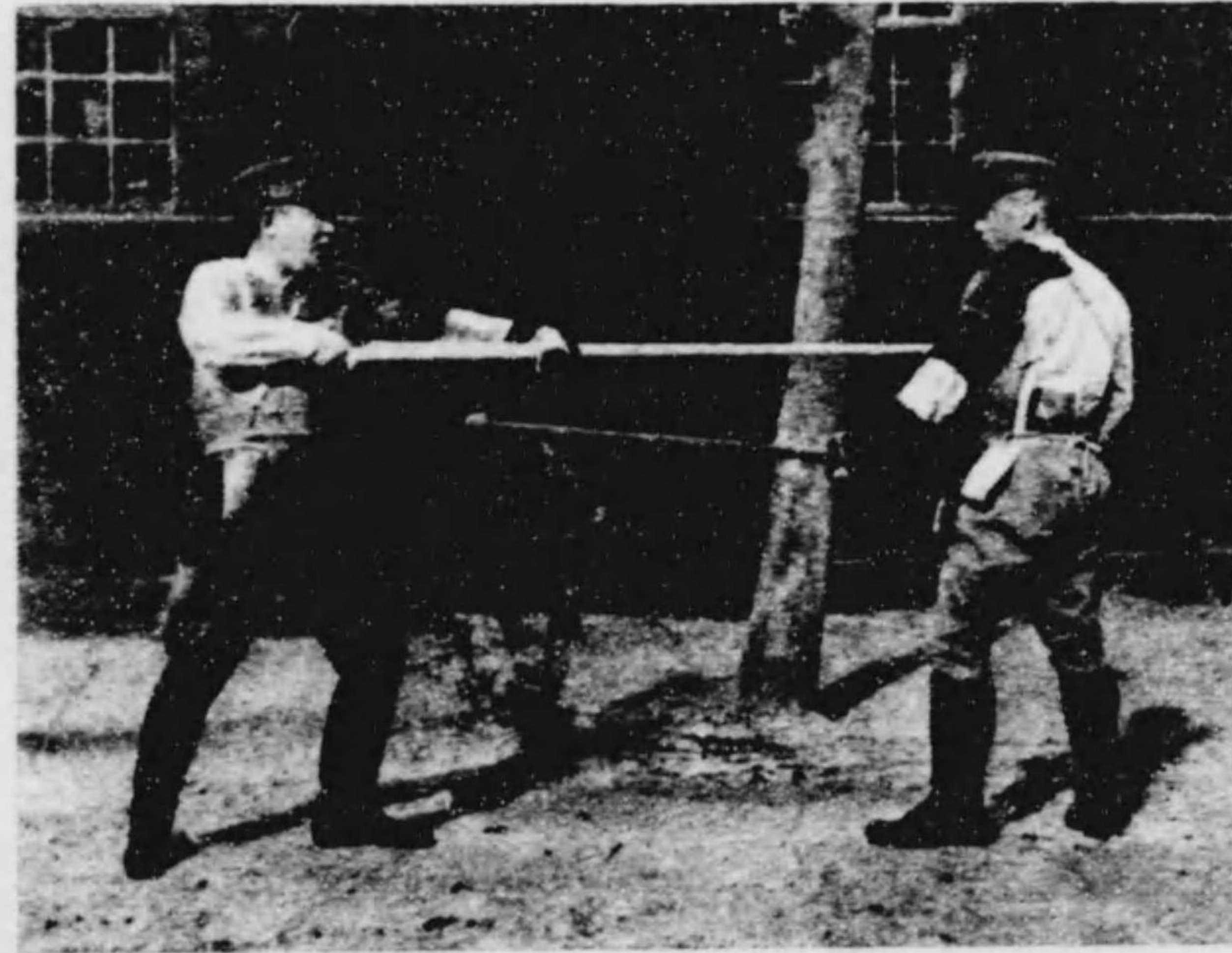
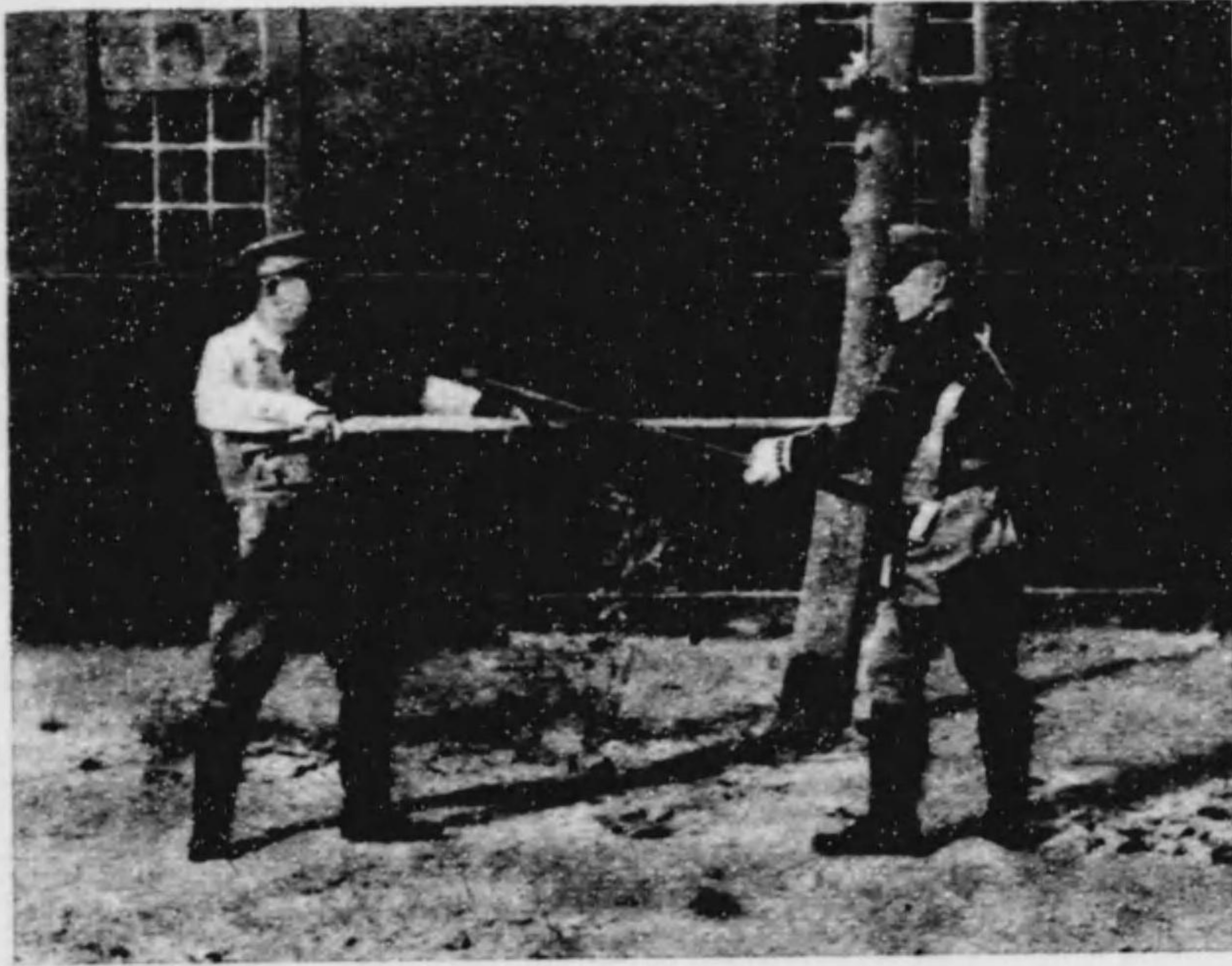
もたれかからぬやうにする。



教官動作

下腹部に力を入れ、劍尖を左方にする。





間合の取り方

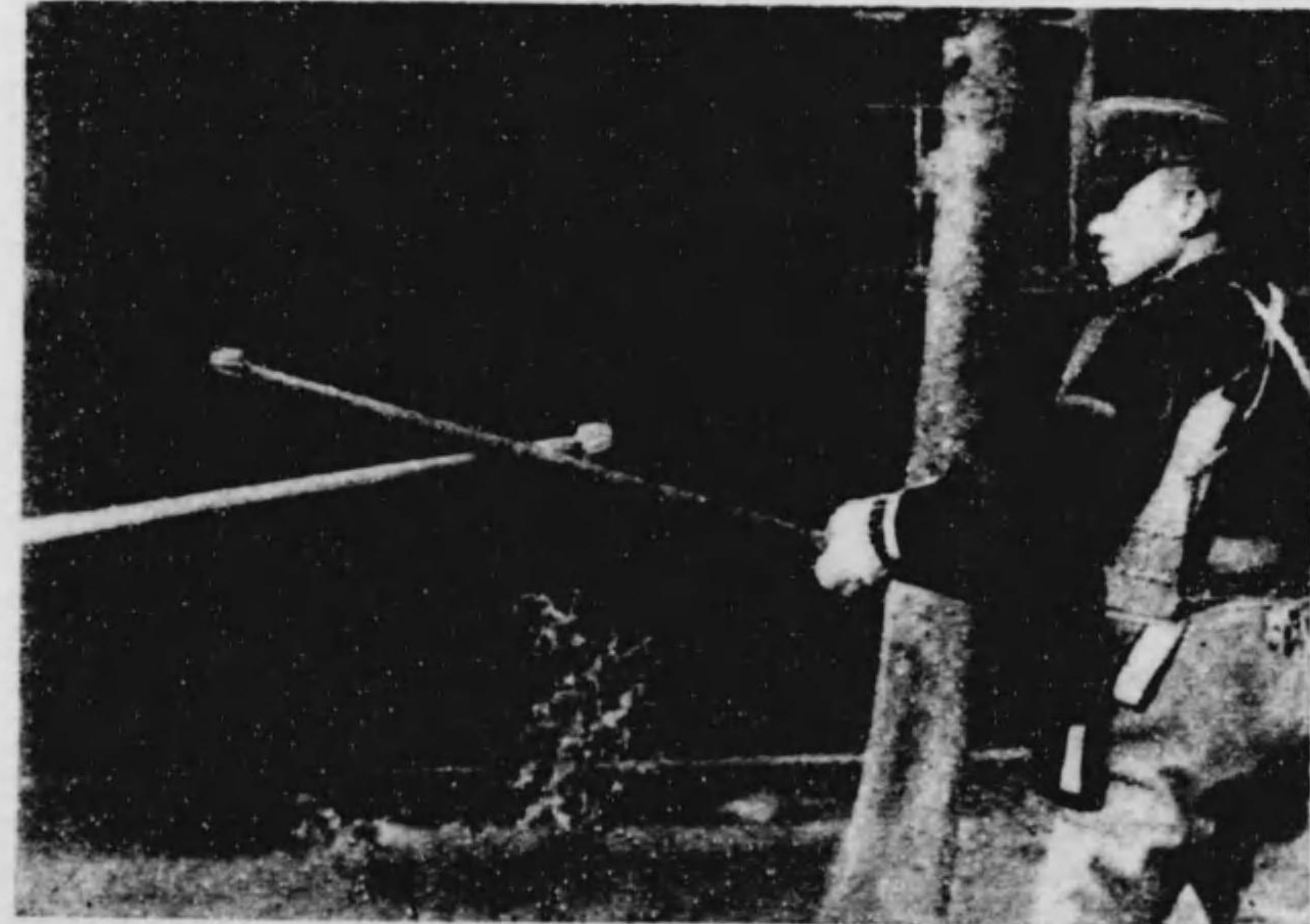
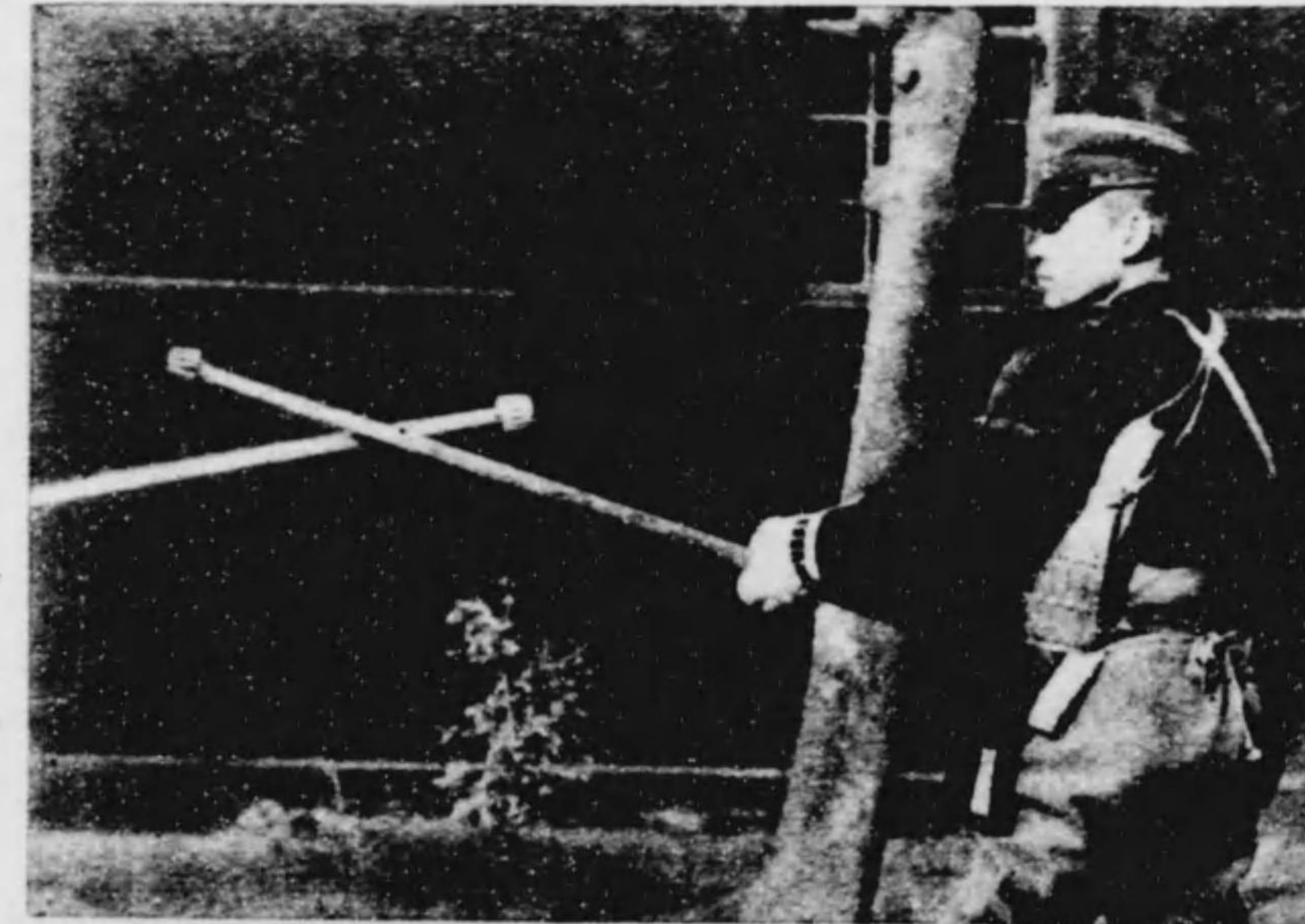
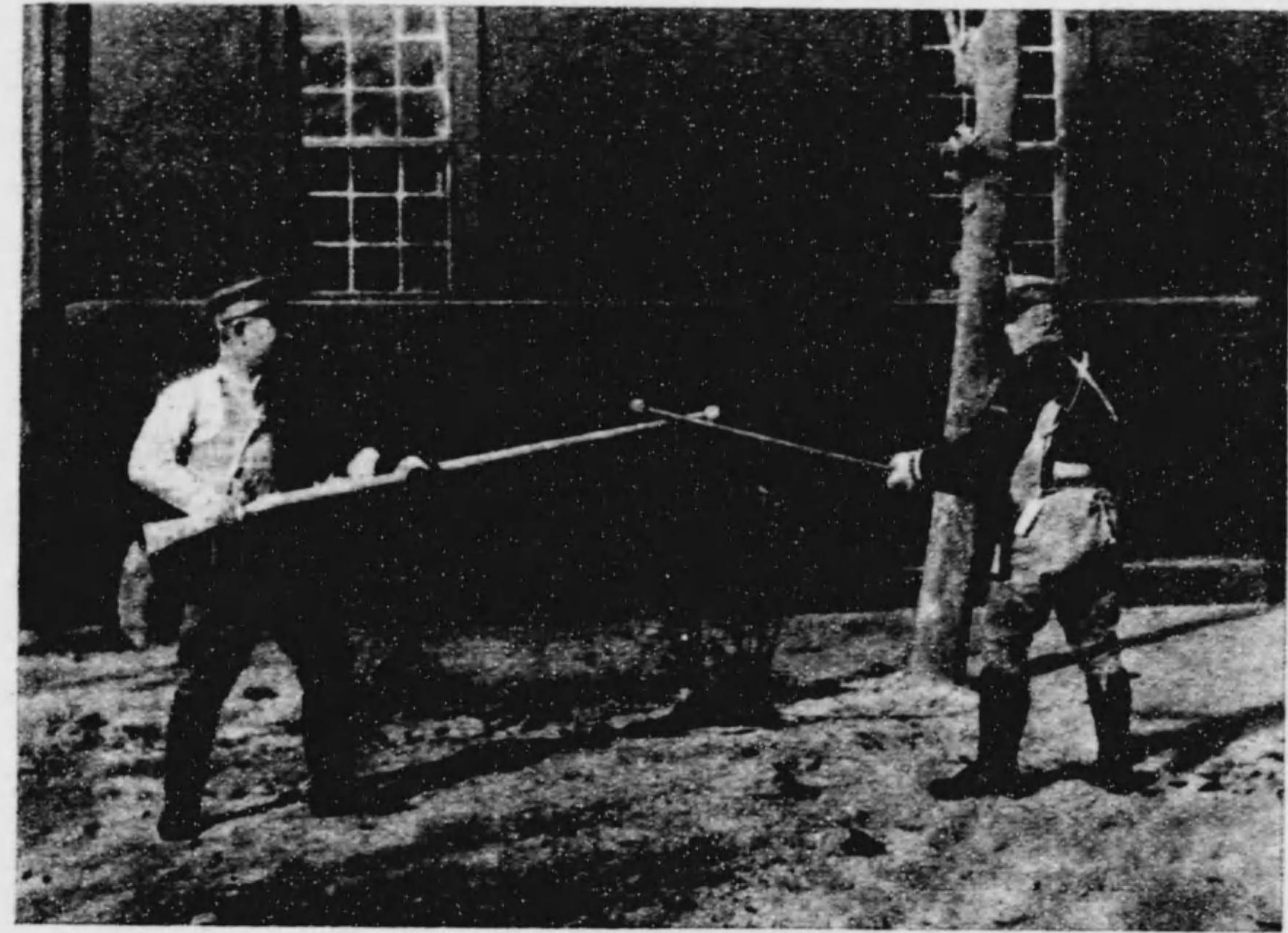
脚はそのままにし、臂を正しく伸す。教官は劍尖の觸れるところまで進出する。

其場刺突

もたれかからぬやうにする。

教官動作

下腹部に力を入れ、劍尖を左方にする。



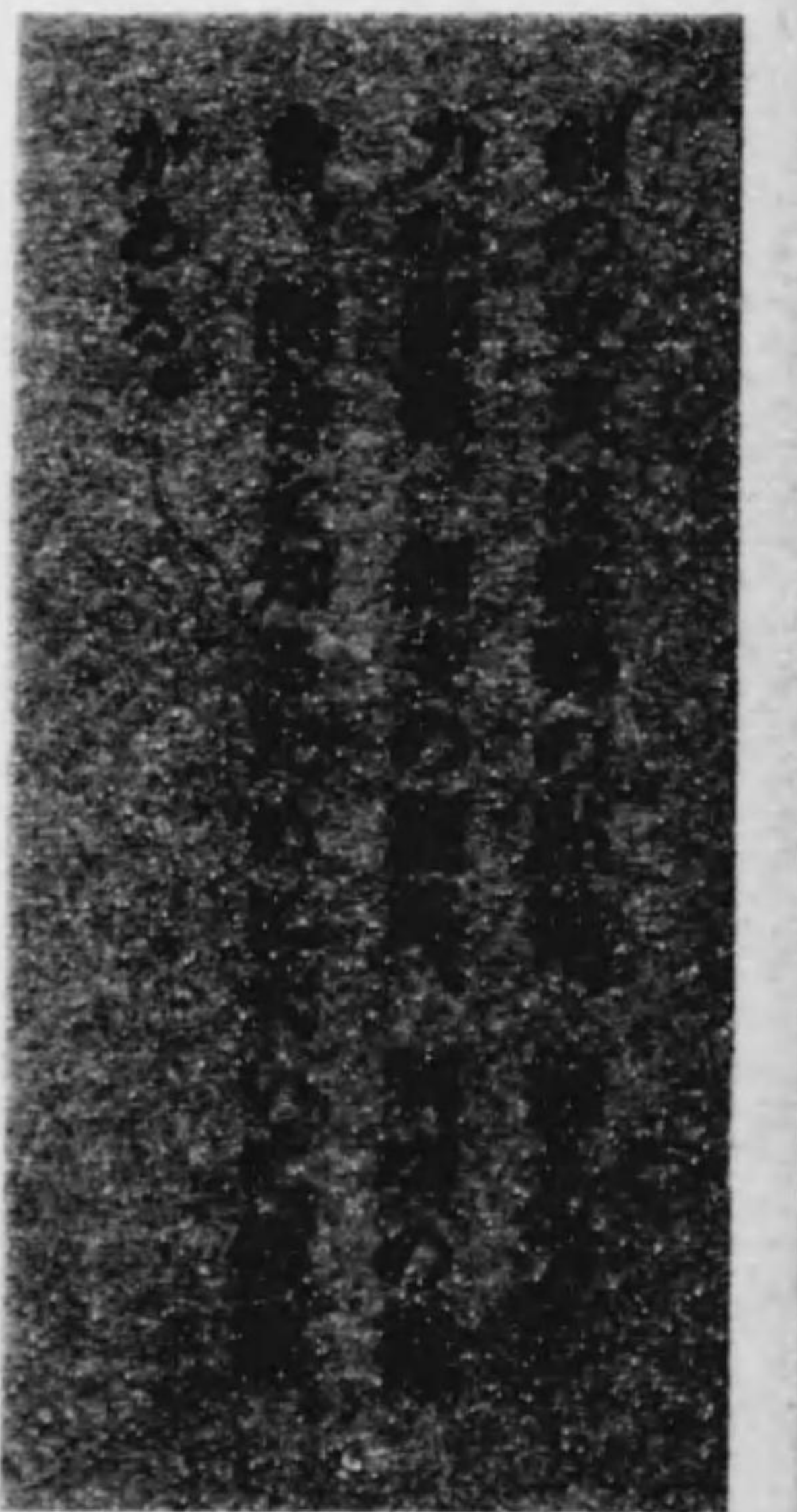
正しい交叉

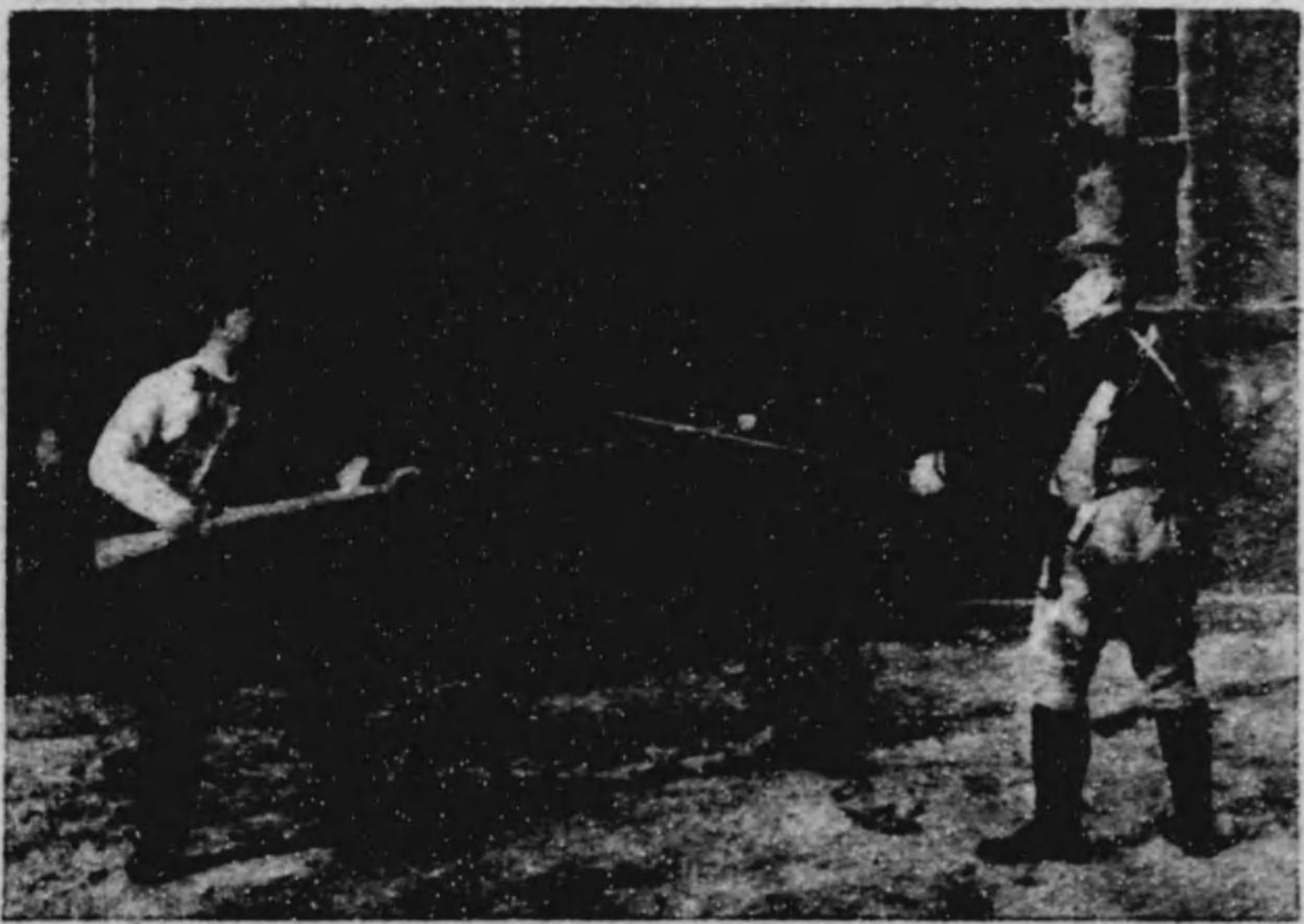
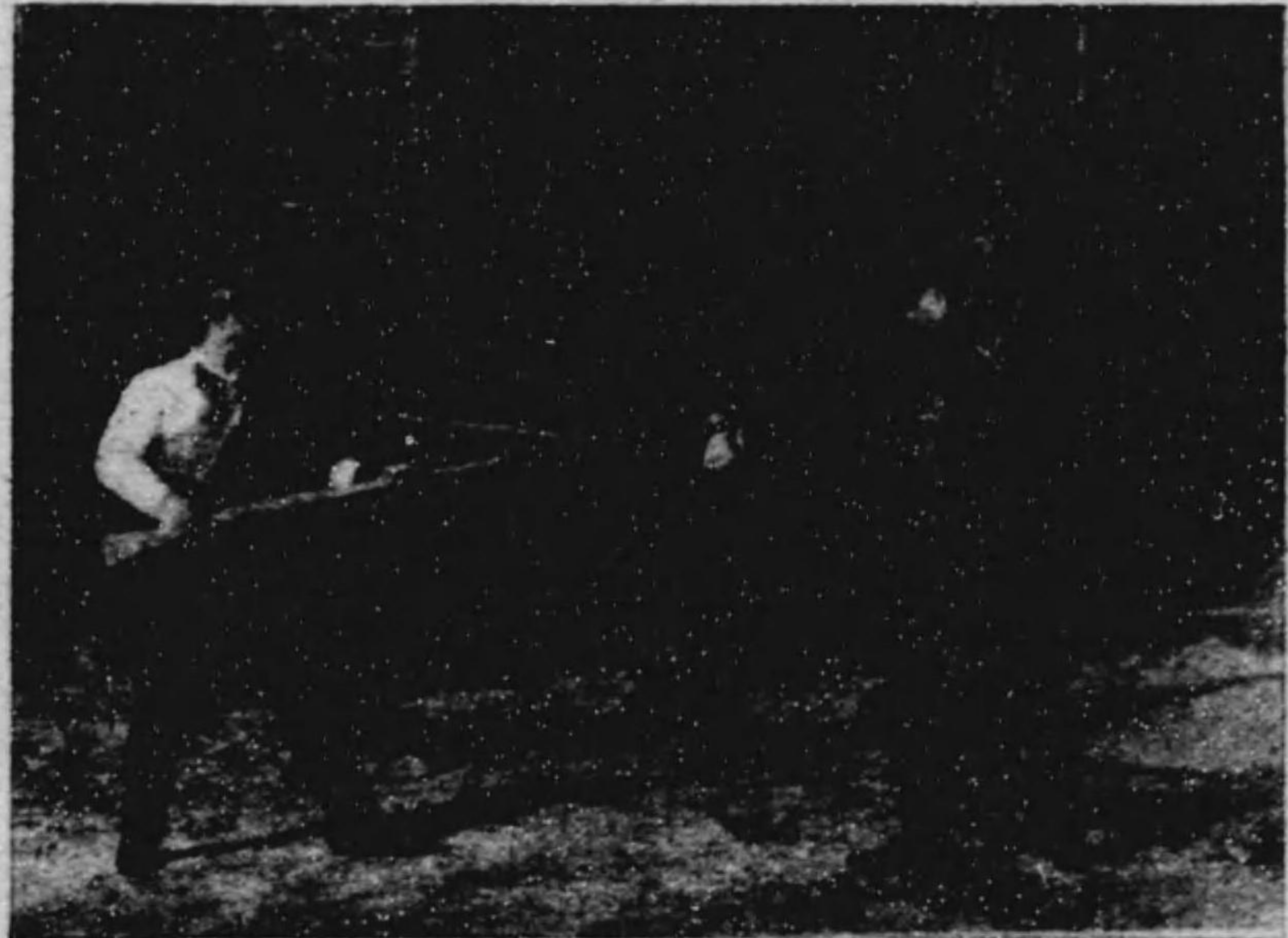
約十握とする。

悪い交叉

交叉が深すぎる。

交叉が片ちんばだ。





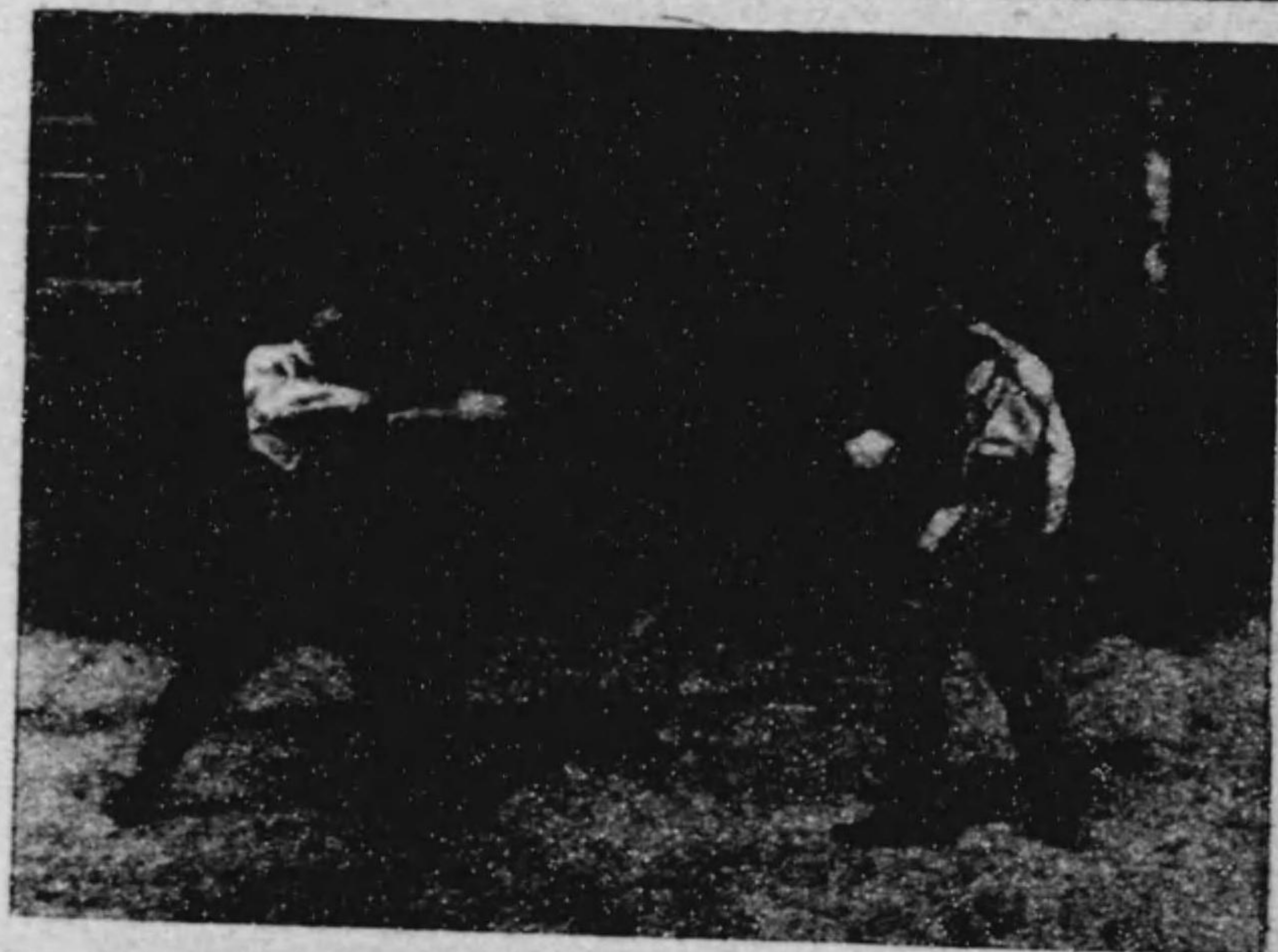
作動官教の突直

教官は極く僅かに退つて體を締め、刺突させる。習技者の劍尖が體から離れるほど退つてはいけない。

習技者が引抜くや僅かに退る。

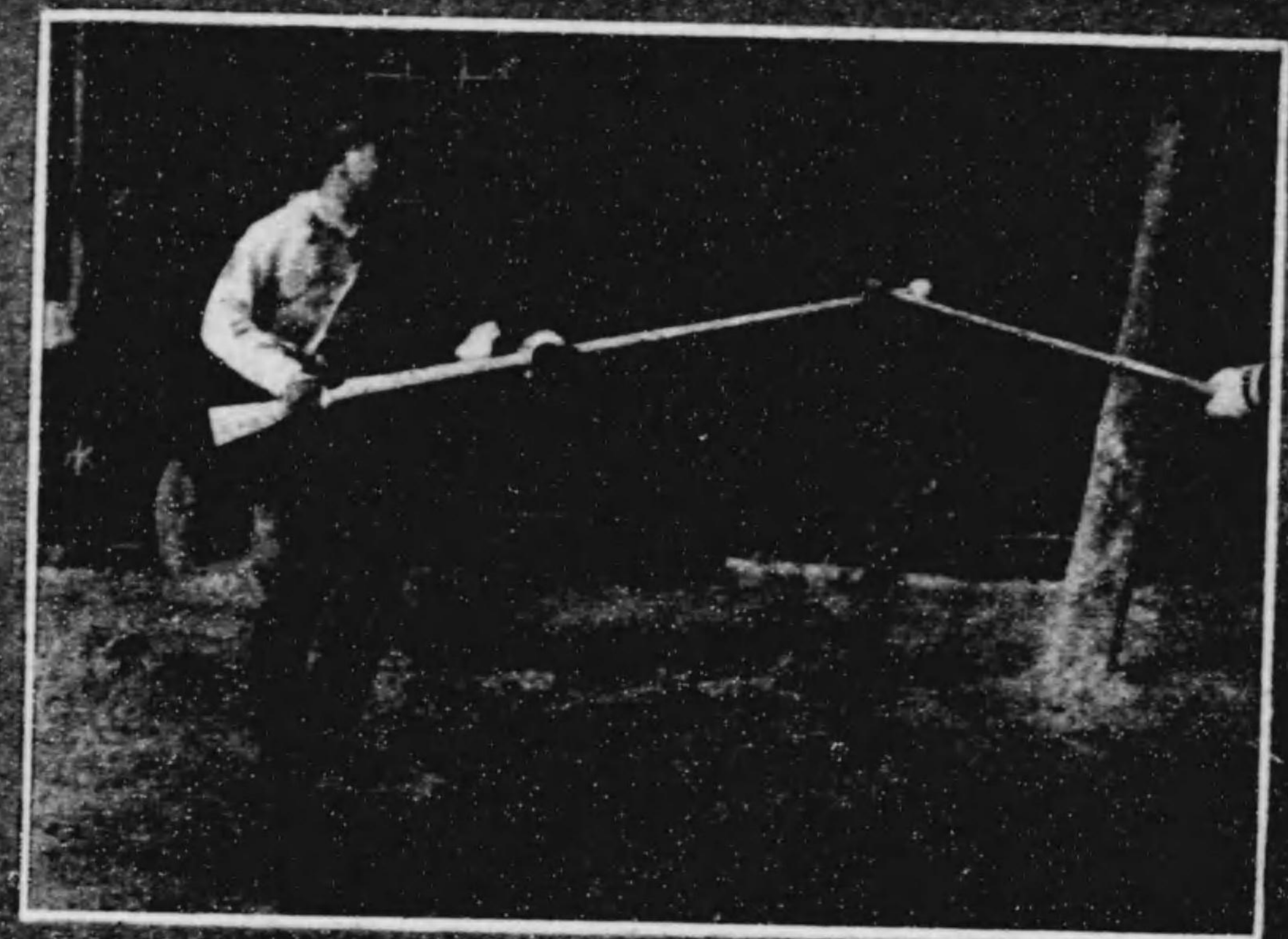
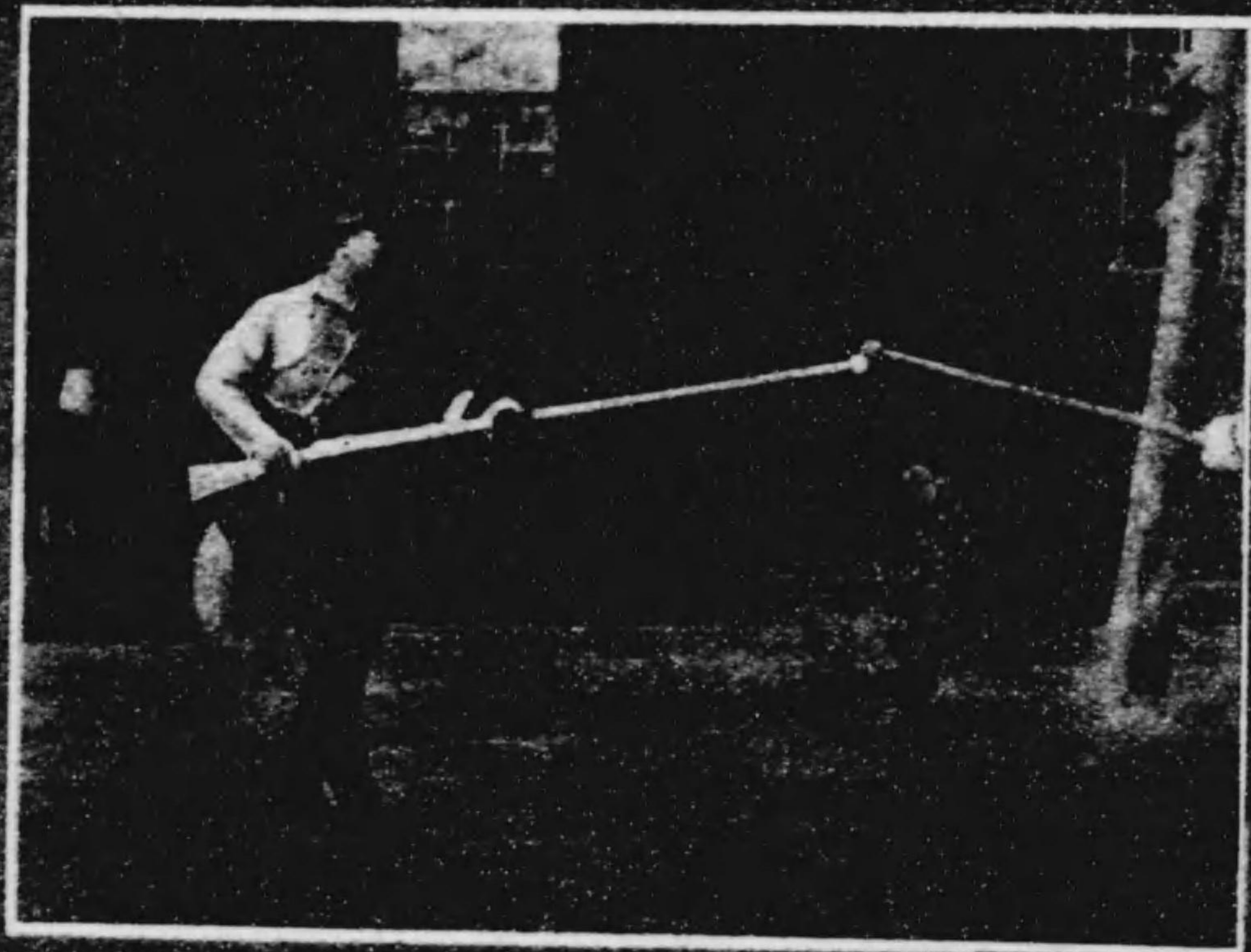
次いでさらに一步退つてもとの交叉にかへる。

突直



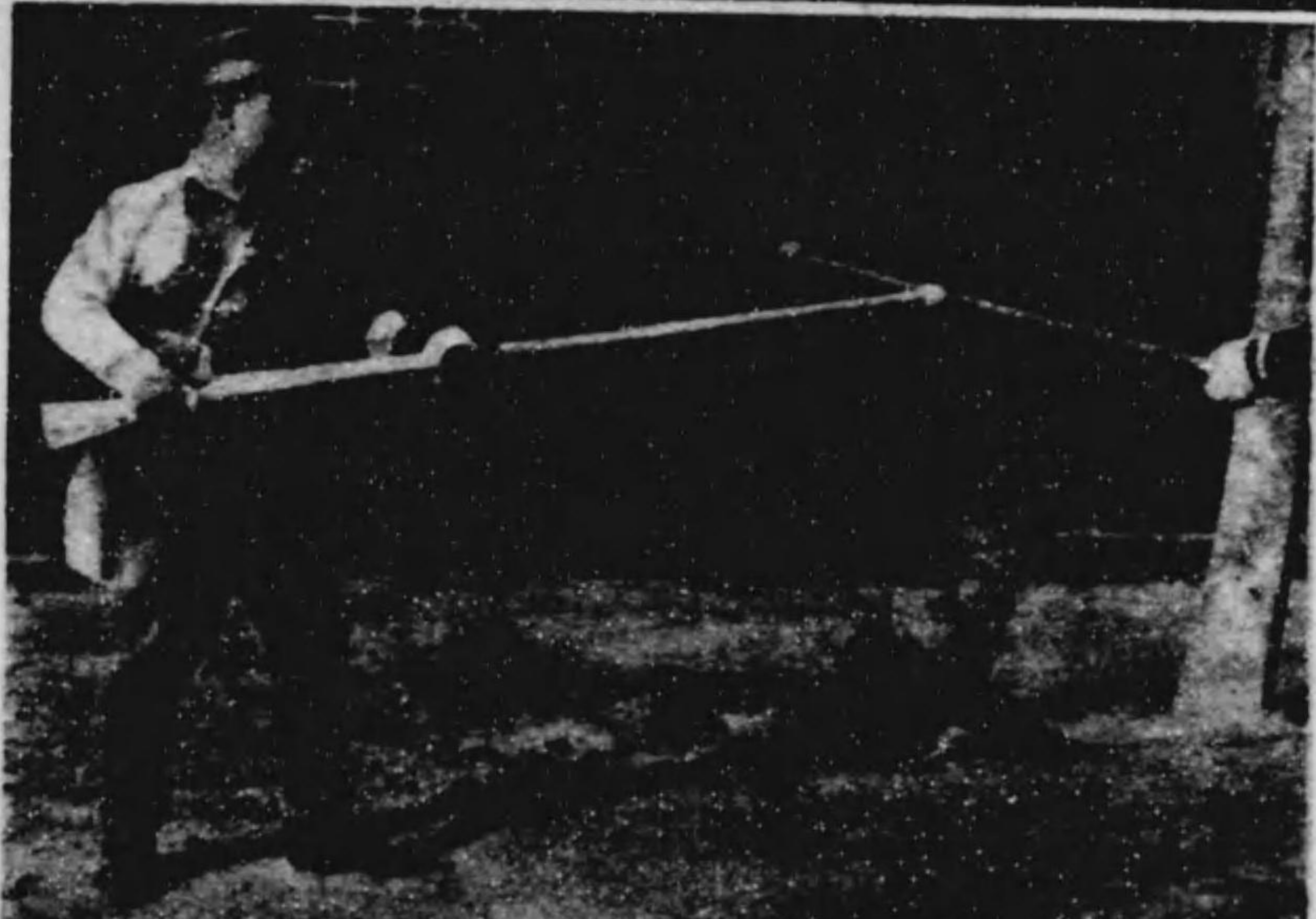
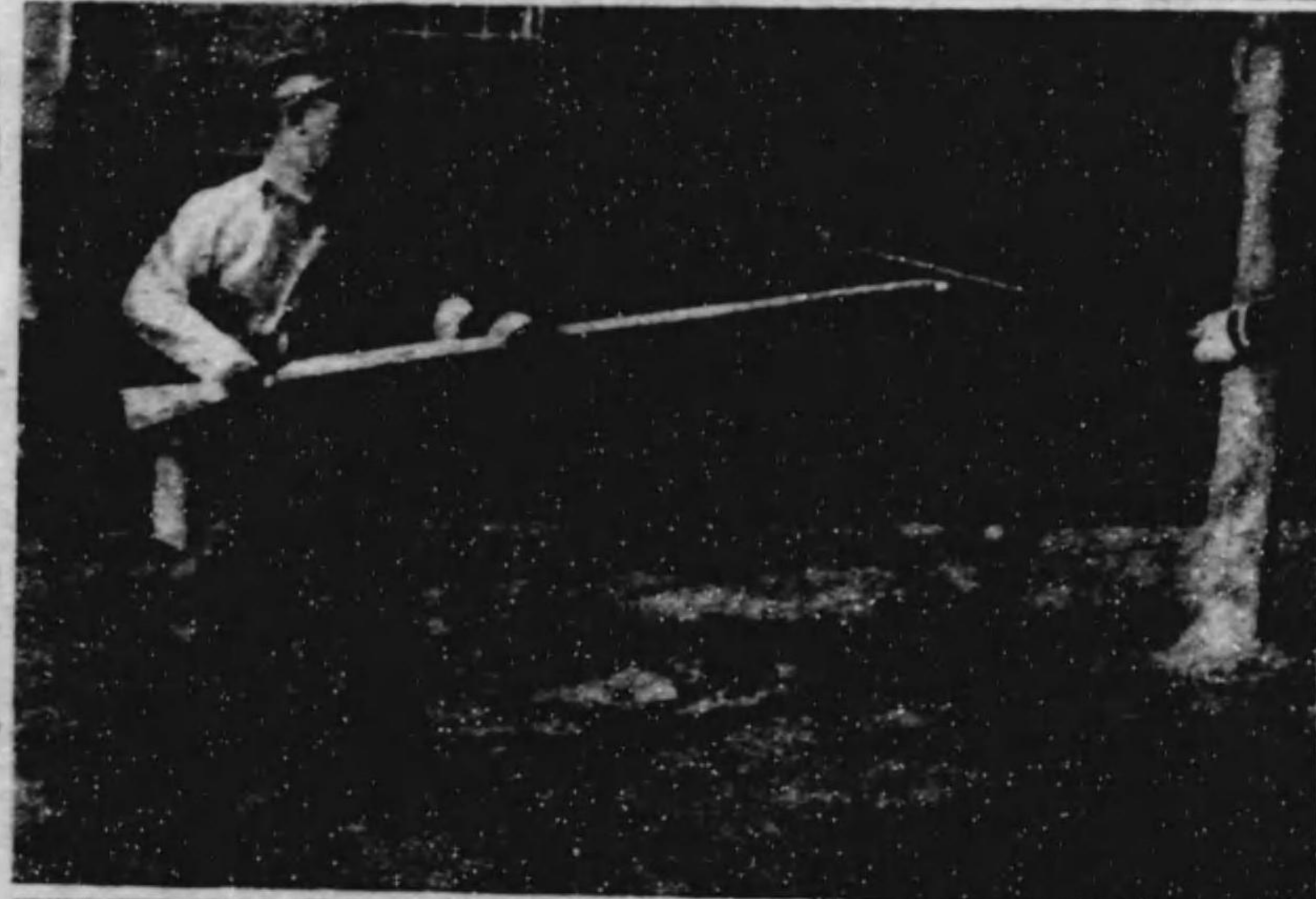
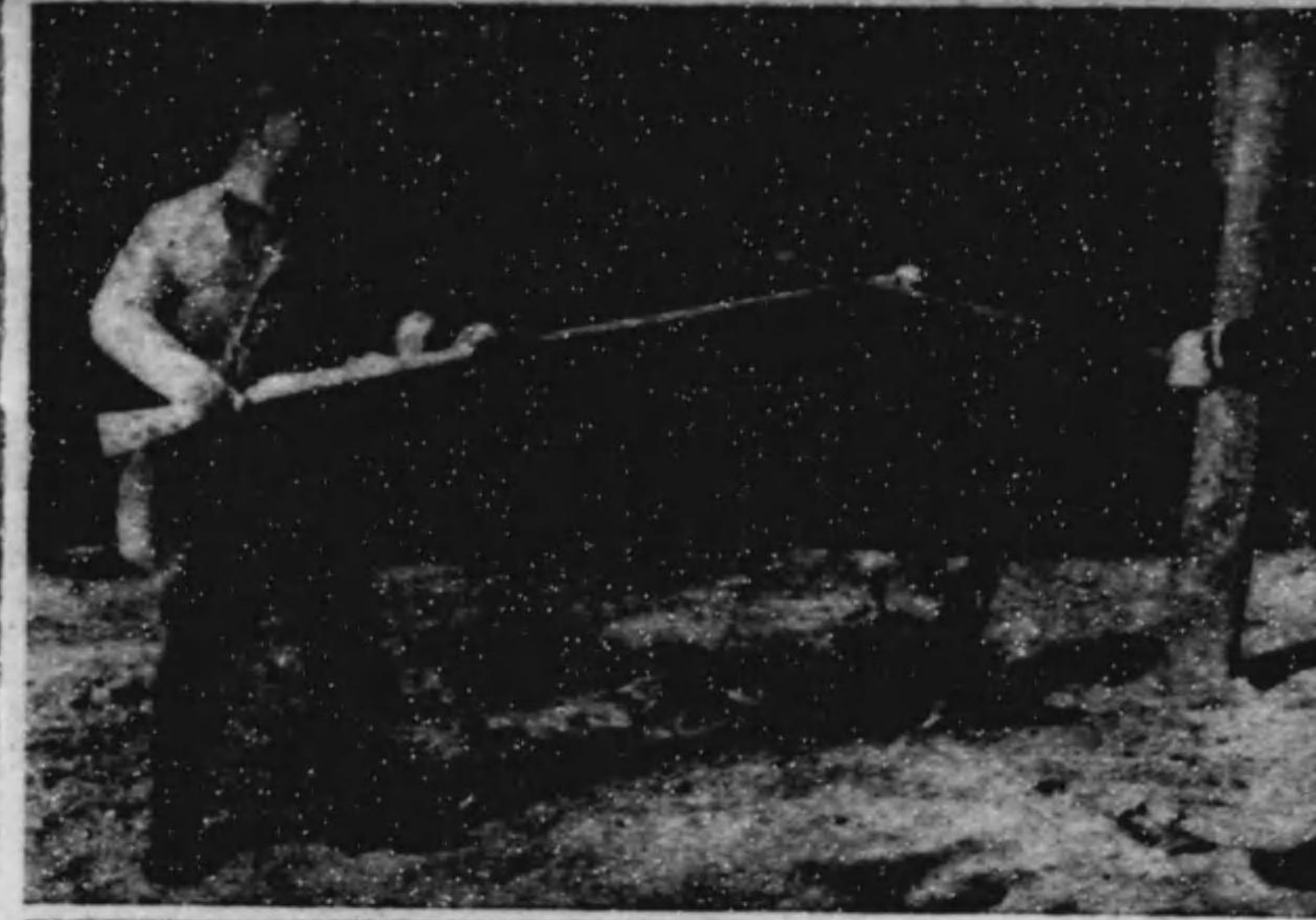
十分に踏み切つて腰を推進し、まづすぐに刺突する。

WILSON'S ISLAND
HAWAII



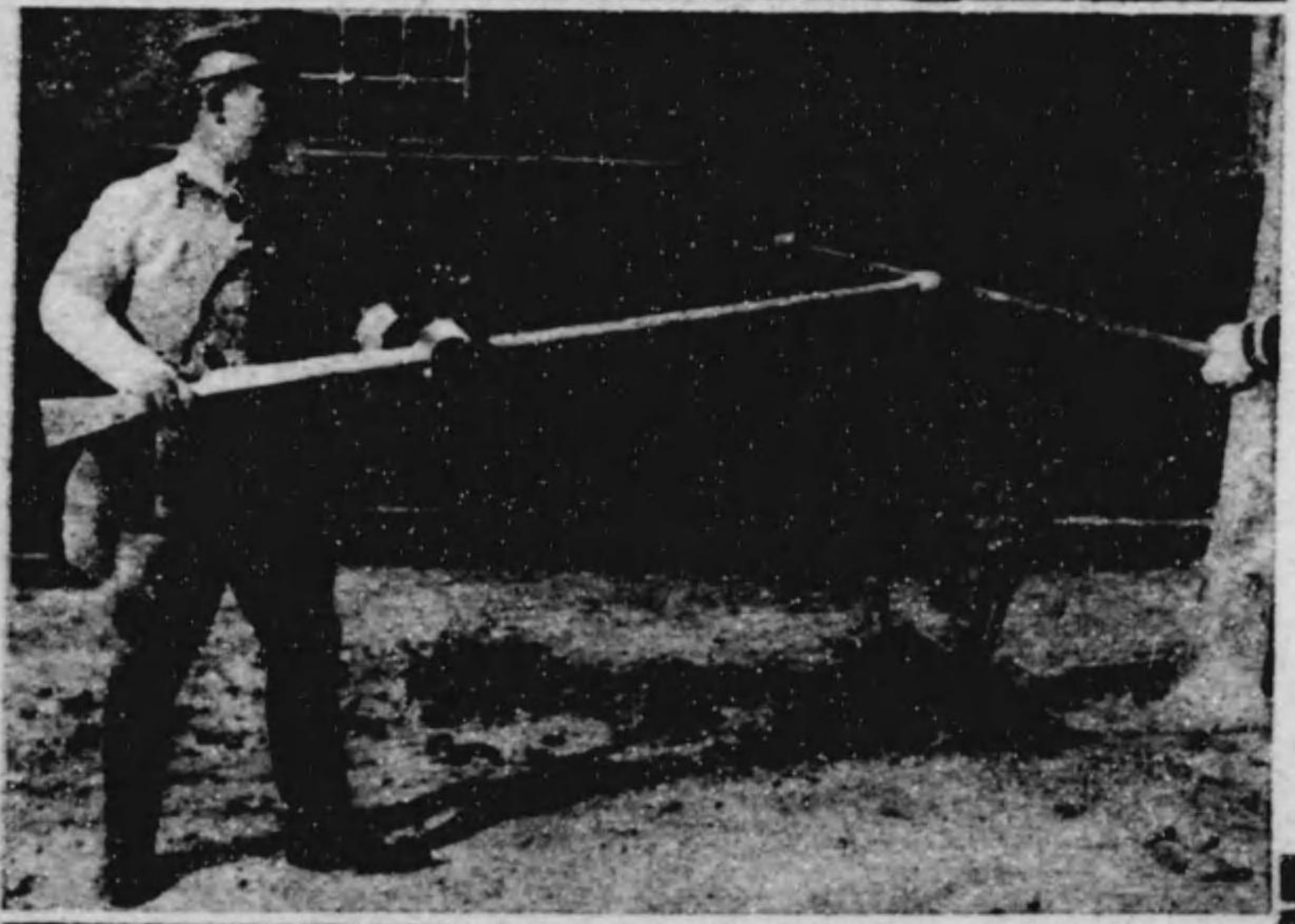
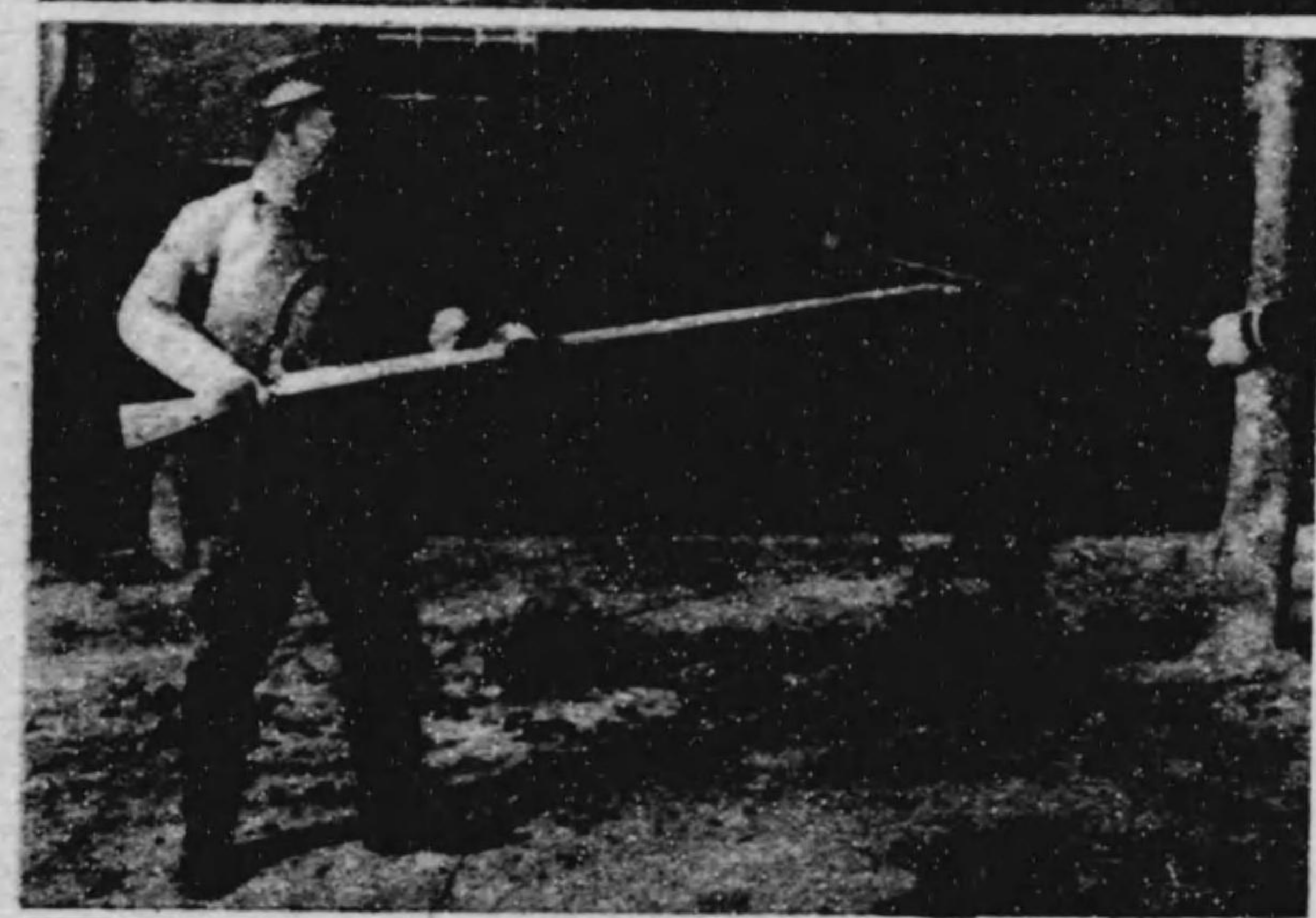
両手をもつて劍尖を下げ、劍下に近く脱して左拳の左上方からその上脛を刺突する。

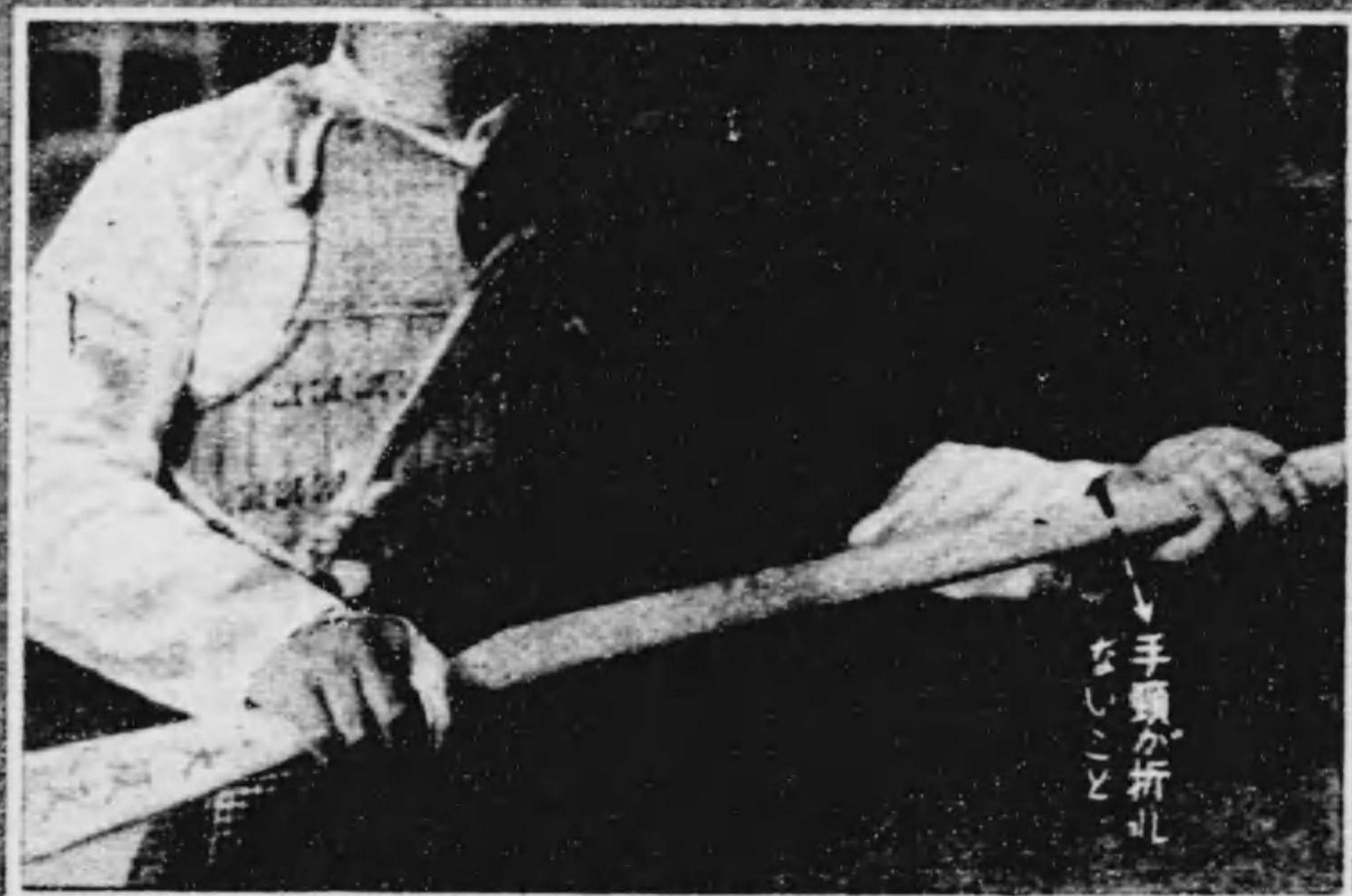
初めは其場で劍を脱す要領のみを教へる。



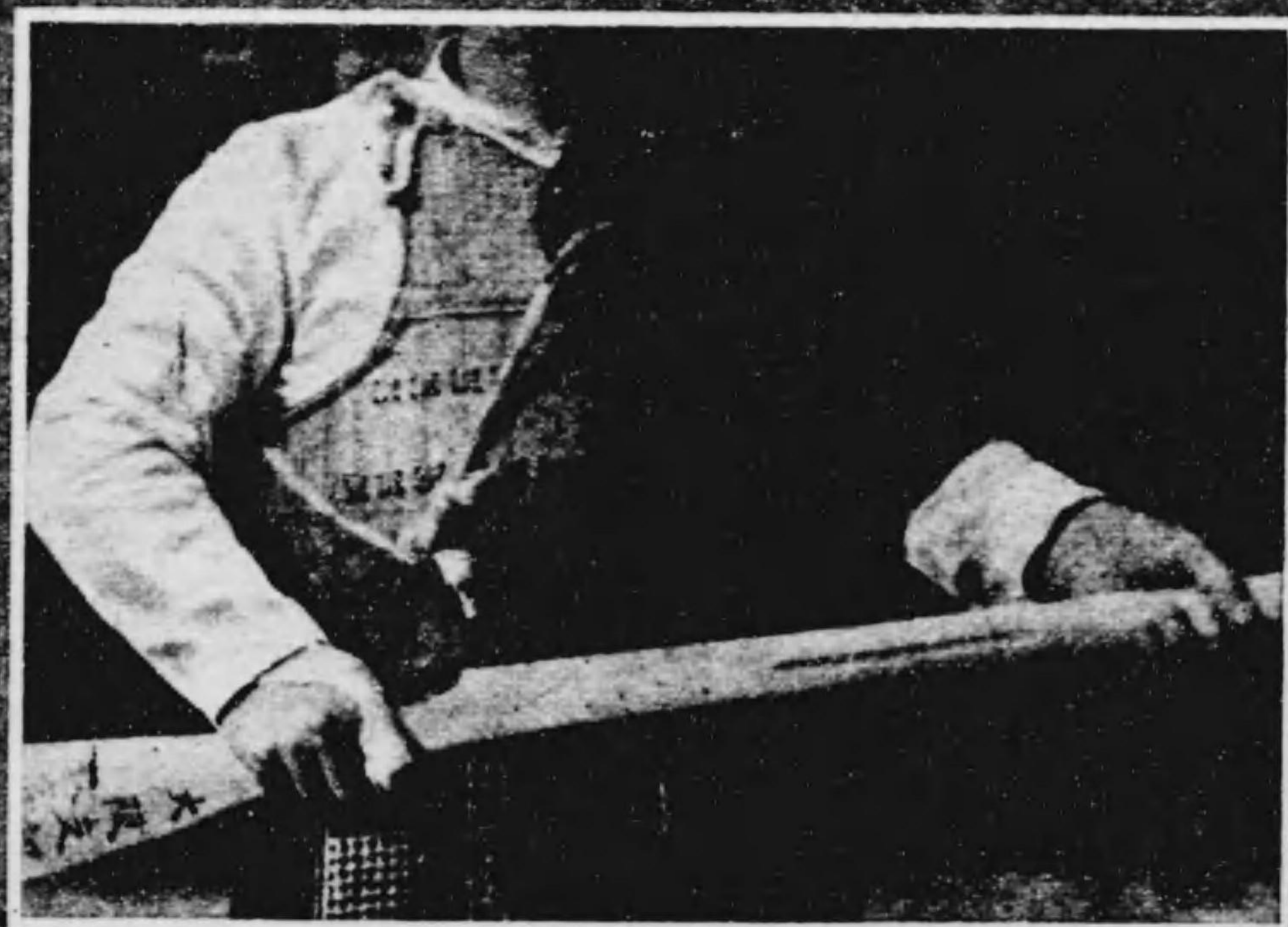
脱突の要領に準じて敵の下脛を刺突する。

(げ上き突) 突下い惡

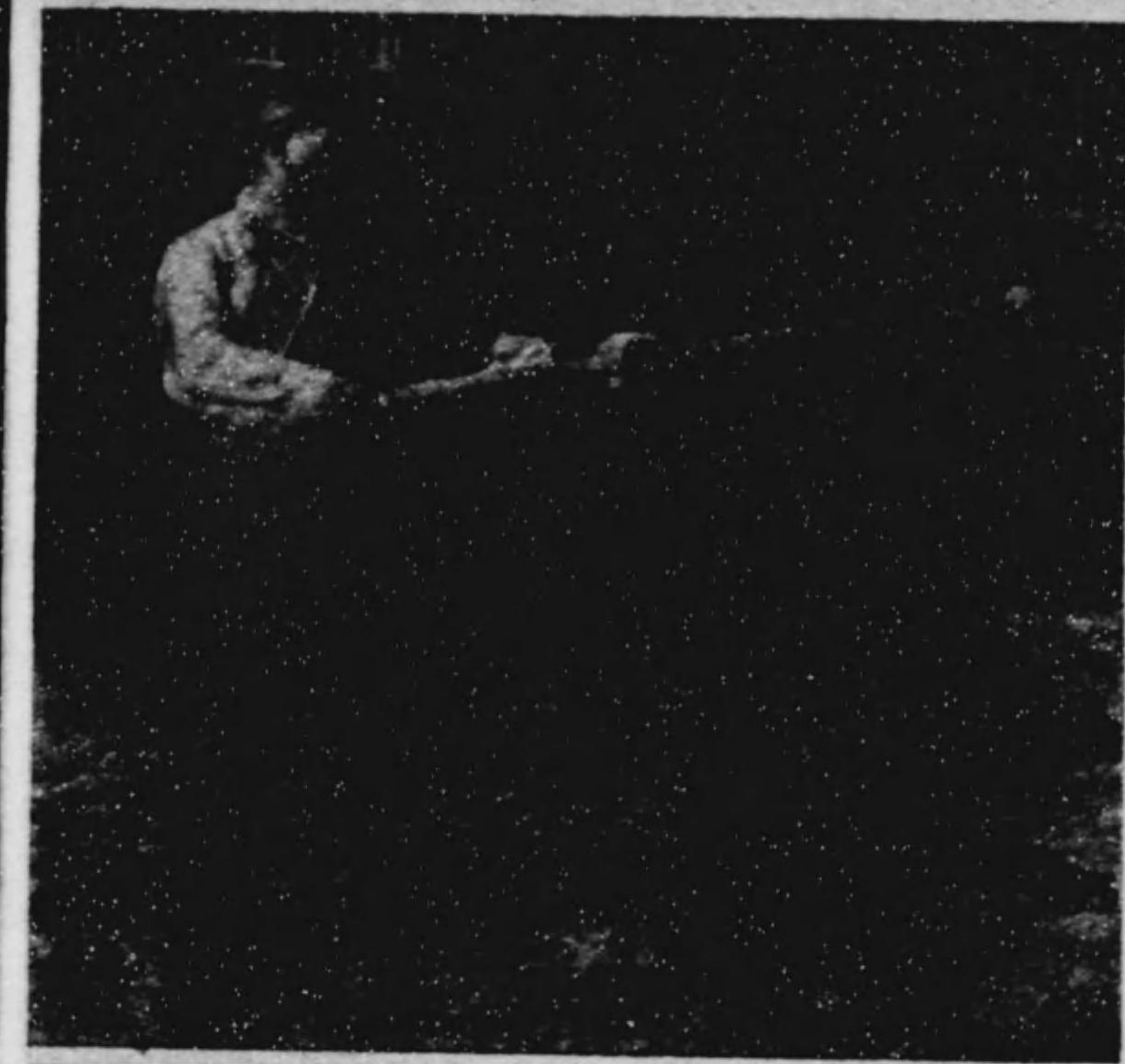




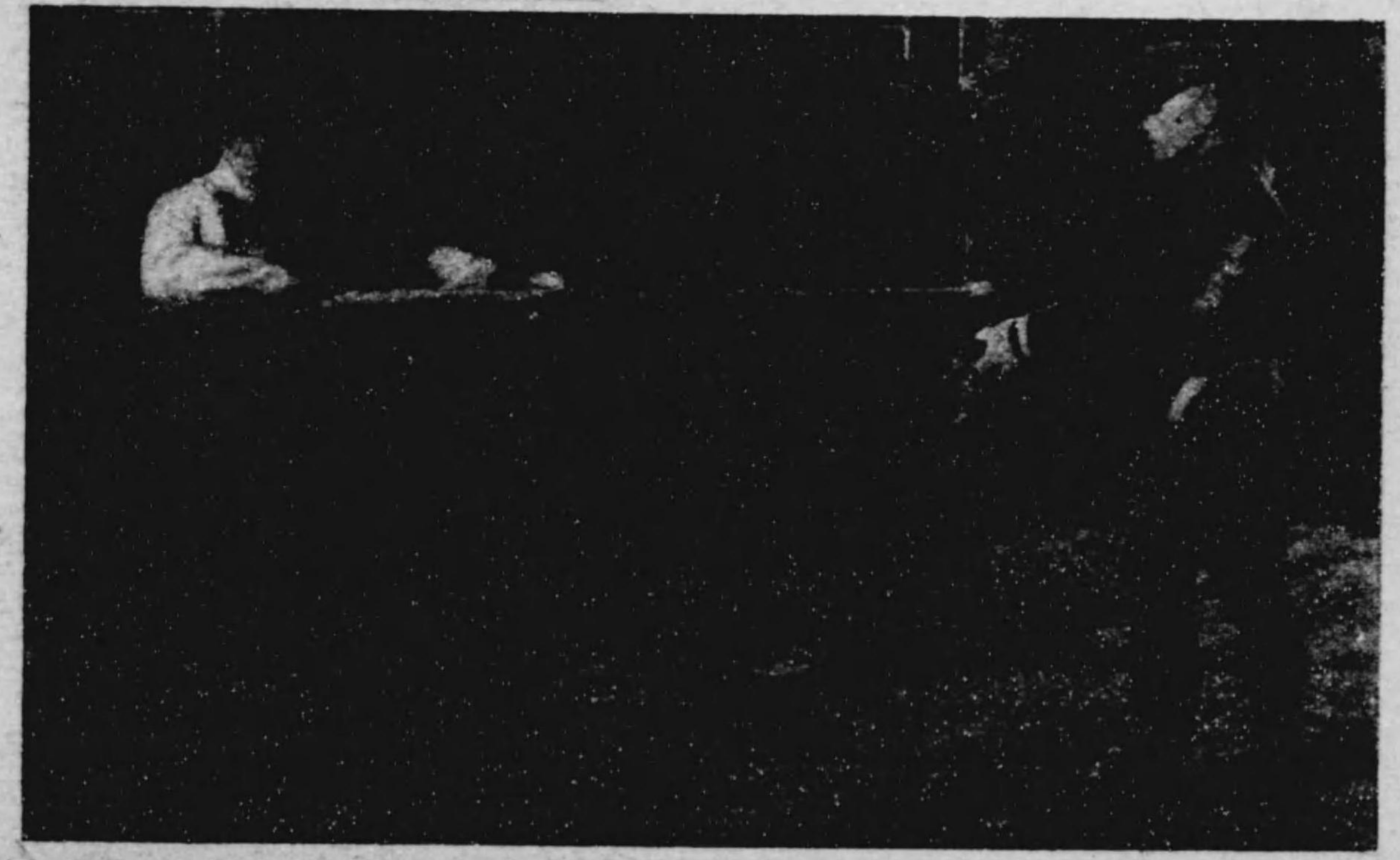
右の手と左の手
平らな面を打て
右の面を打て
左の面を打て
上の方で



け突て打右 (五 其)



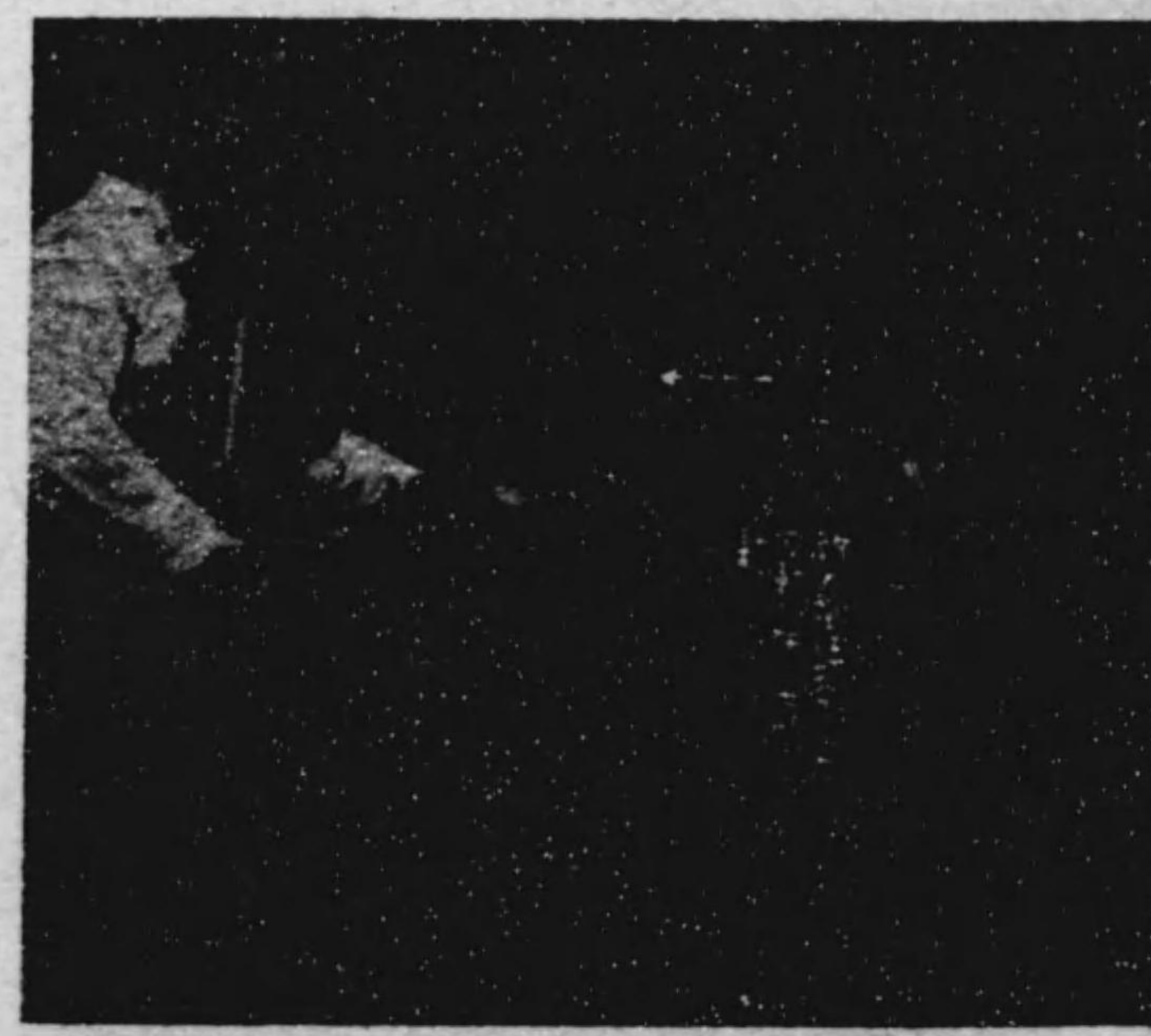
前圖の要領でなるべく敵の左拳に近い部分を打ち、劍尖を敵の刺突部にまつすぐに向け、すかさず刺突する。



突刺らか側對反のそして打右 (六 其)

←

敵の銃を打つ。



⇒

敵の手もと固きため劍尖がかへるところをすかさず刺突する。



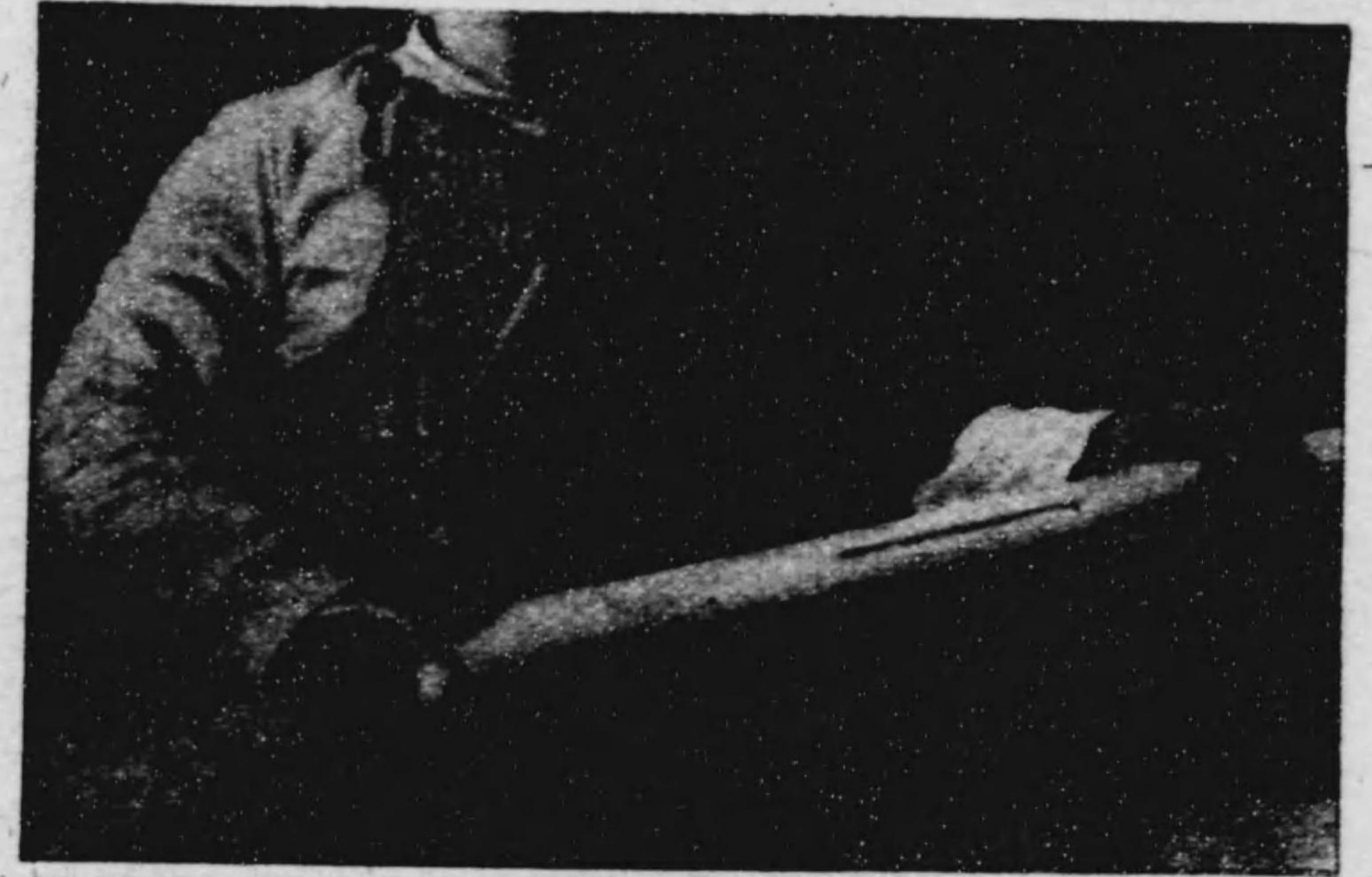
ろことるすとんた打ちよ左



↑
間合に入る。

←
打ち終つたところ。

←
劍がかへつて刺突の
用意が出来たところ。
これからすぐ刺突す
る。



銃身を上方にする。



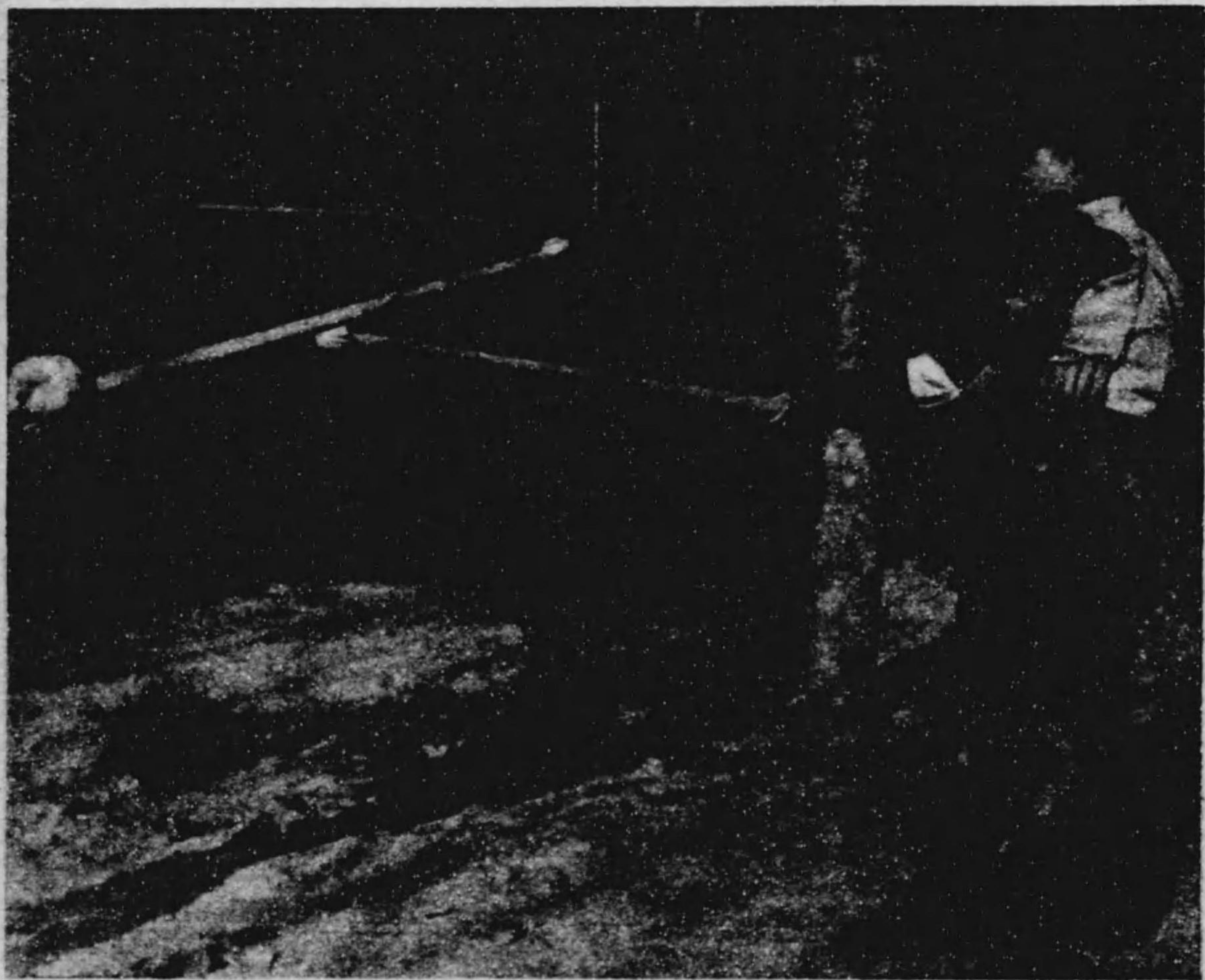
右打ての用意の
要領で両手を出
し敵の銃を左前
下方に打ち拂ふ



打撃するやすぐ
に銃をかへして
敵の刺突部にむ
ける。
この動作を一舉
動にするのが肝
心である



間合に入りつ
つ敵の劍を右
から押さへる。



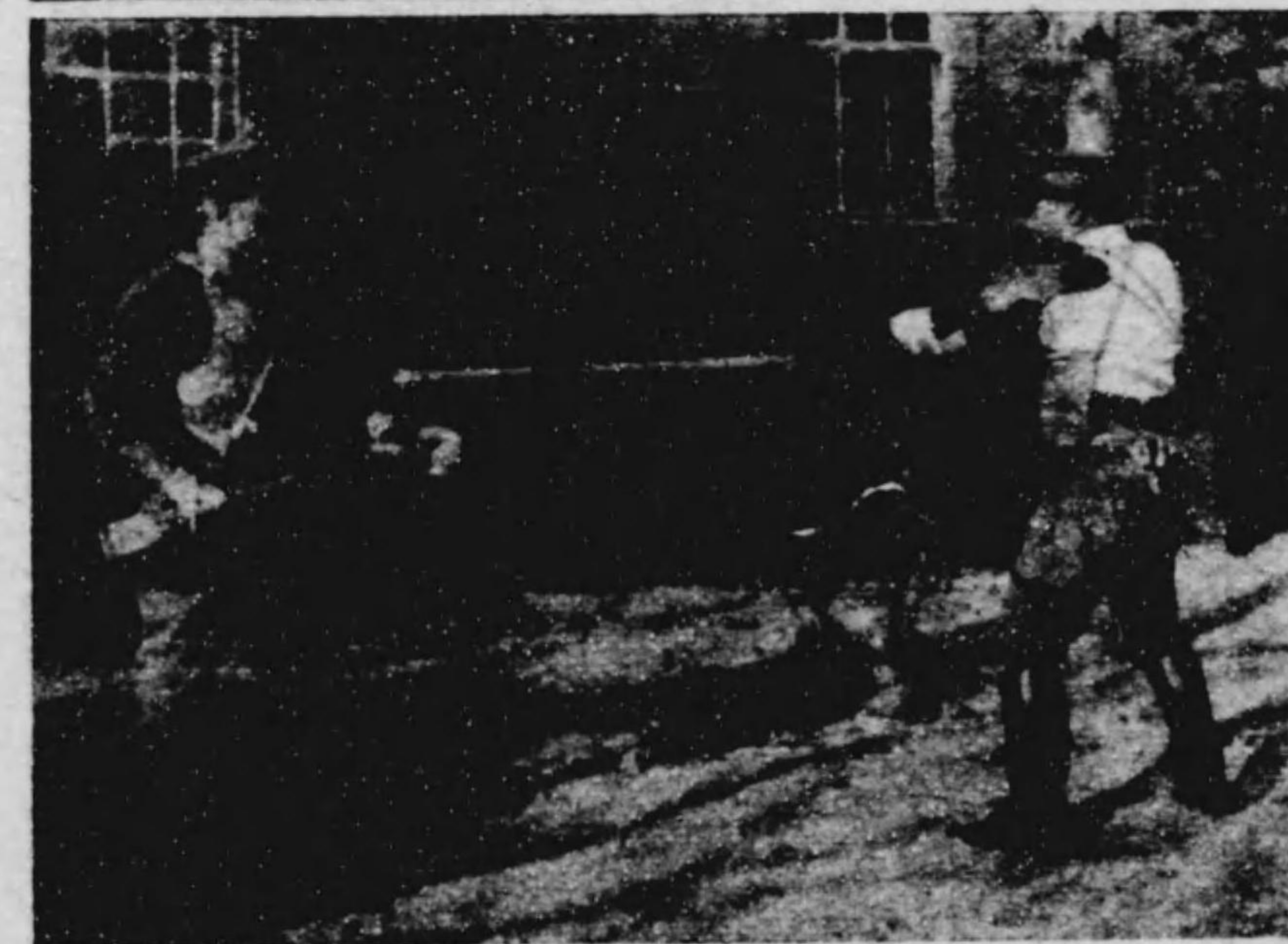
敵の手元固き
ため劍がかへ
るところを脱
突の要領です
ぐに刺突する。



左を打つや敵の
手もとが固きた
め銃がかへる。



そのかへるとこ
ろをすかさず
ぐに刺突する。



間合に入りつ
つ敵の劍を左
から押さへる

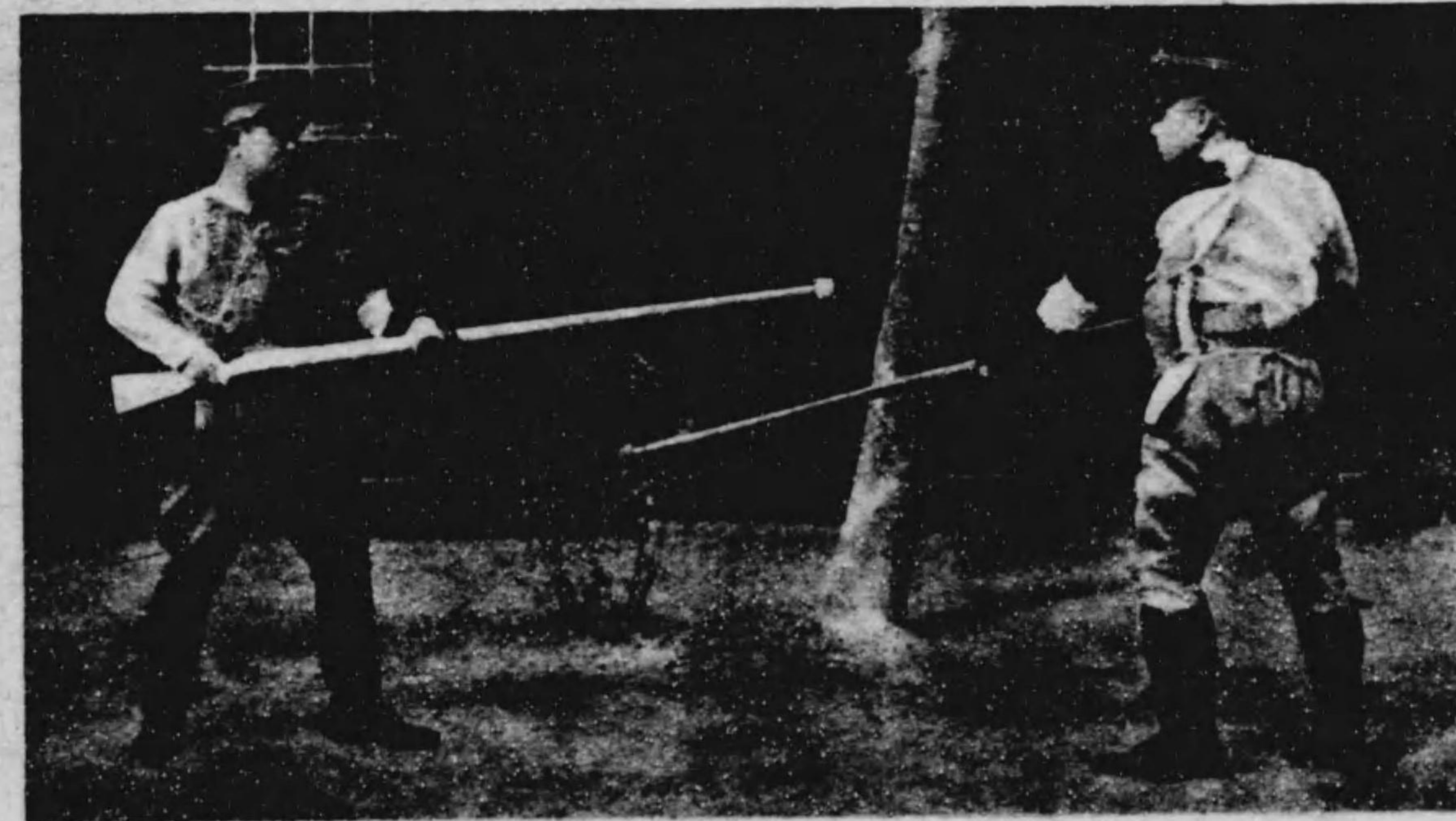
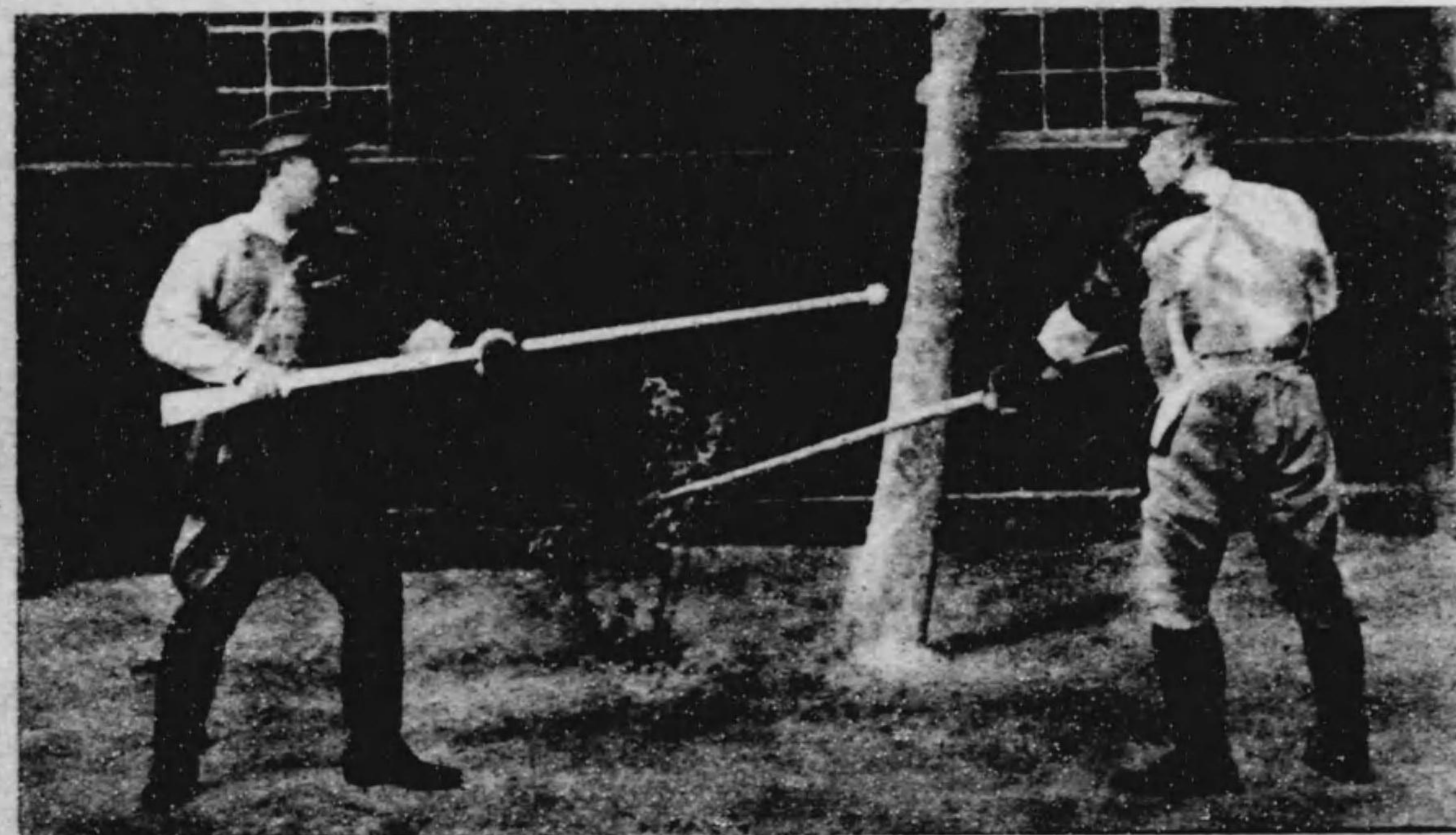
敵の應じて來る
ところをすかさ
ず刺突する。



氣勢を充實し、間合に
入りつつ劍を下げると
膽力のないものは精神
動搖し、下を防がうと
して劍を下げる。そこ
をすかさず刺突する。

これは往々初心者に用
ひて成功するが、豪膽
なものにはわが劍を下
げた瞬間に刺突される
惧れがある。

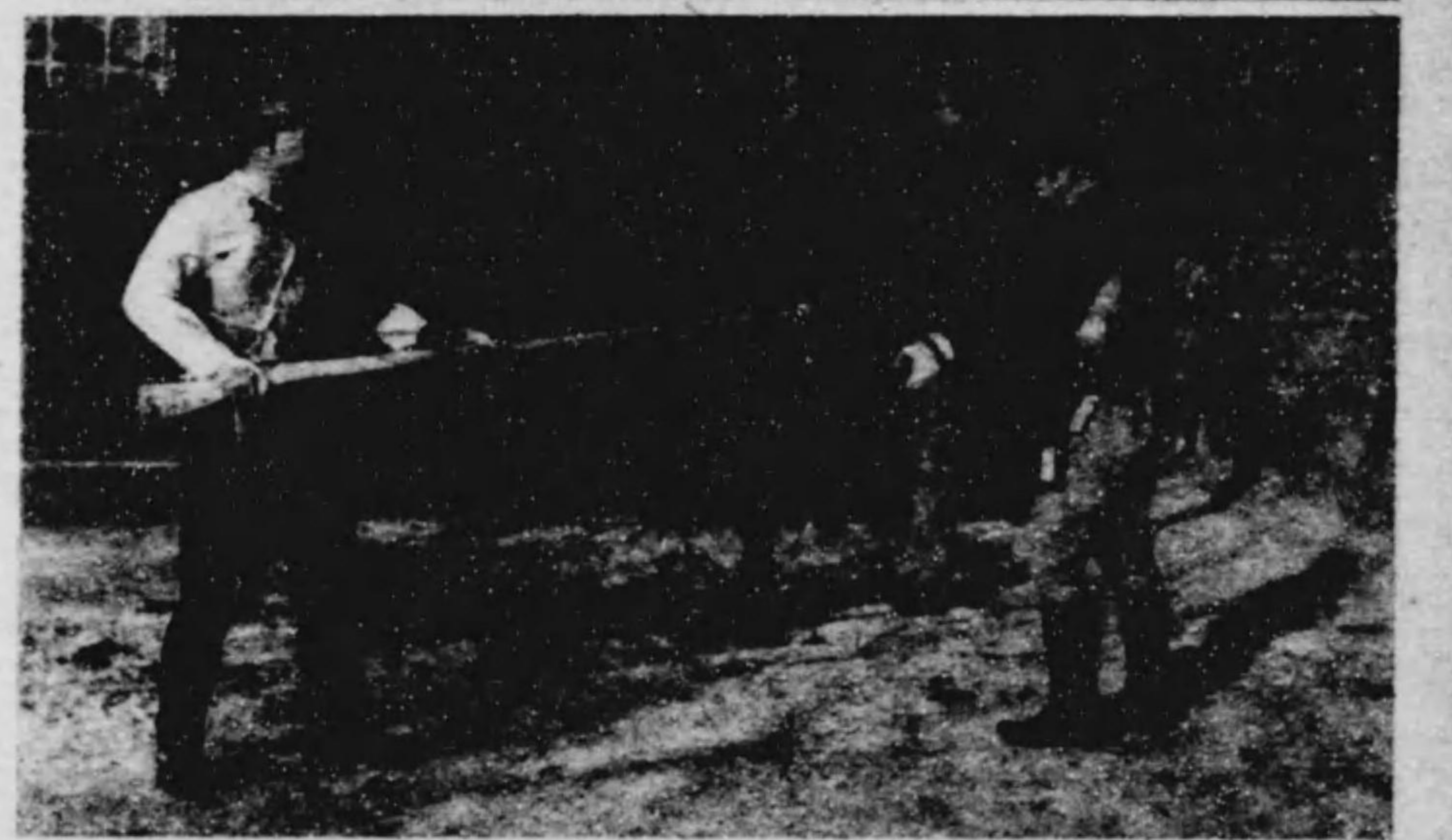
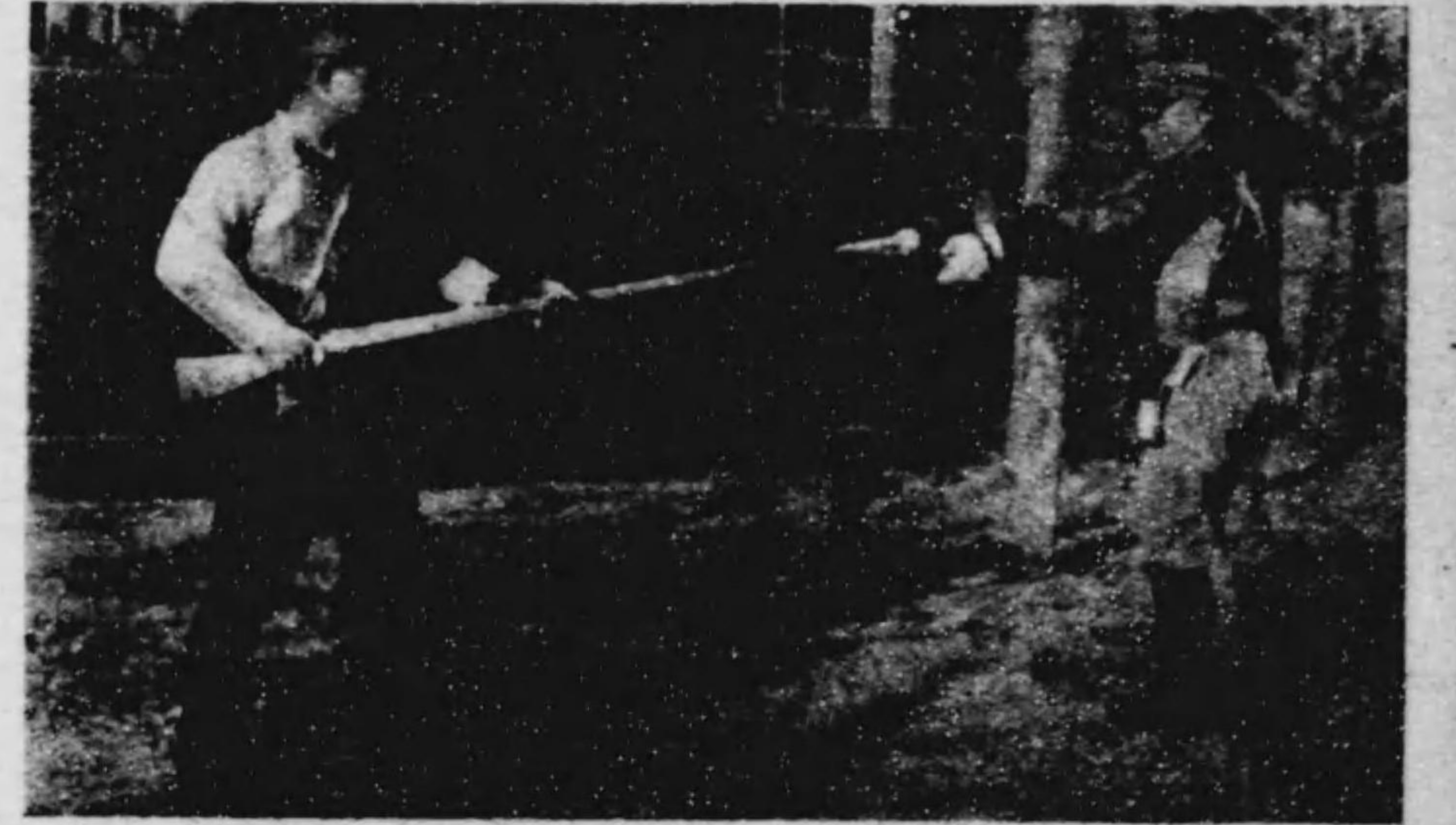
突刺除排の左 (四十其)



其場で剣を出してゐる。

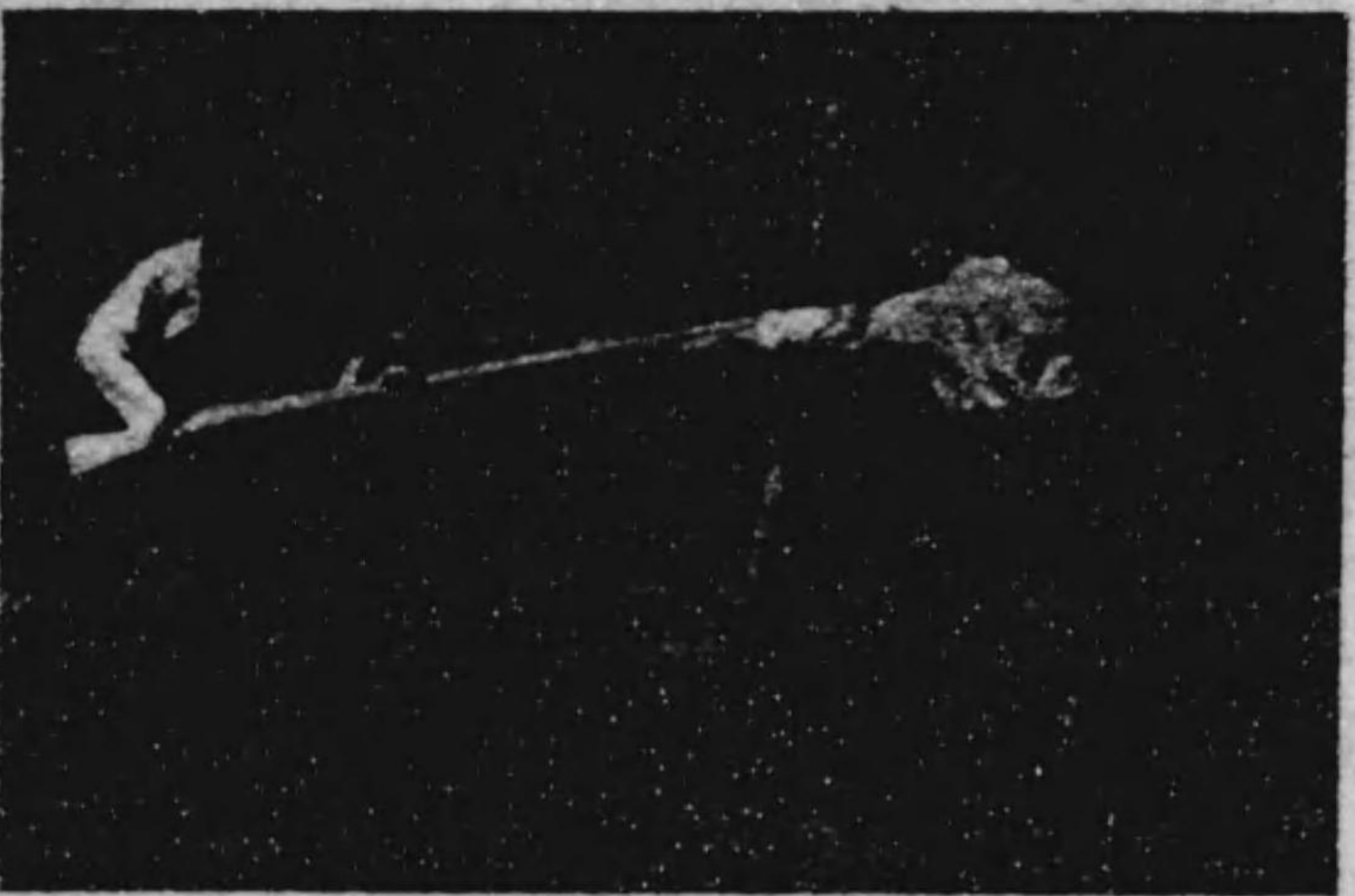
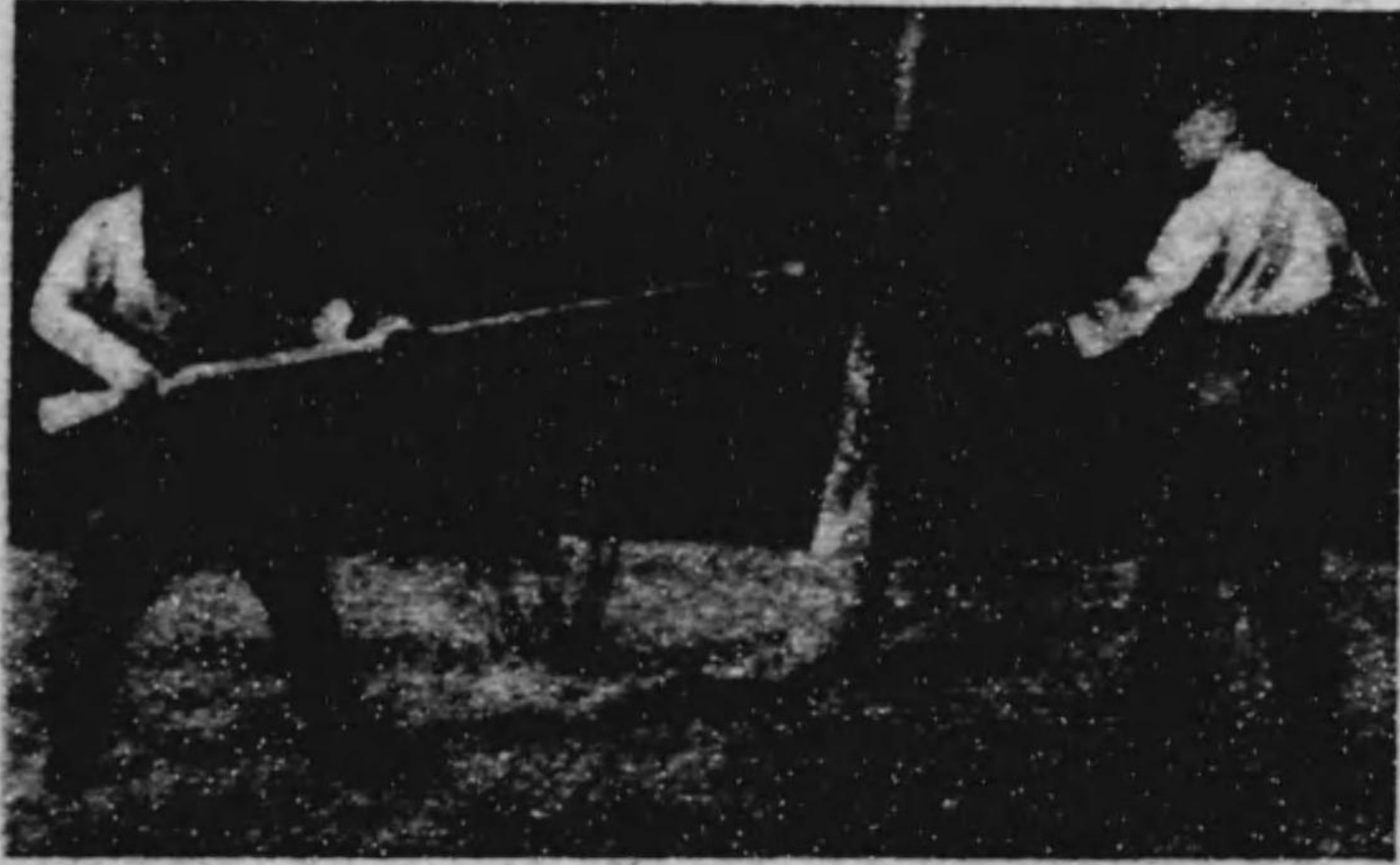
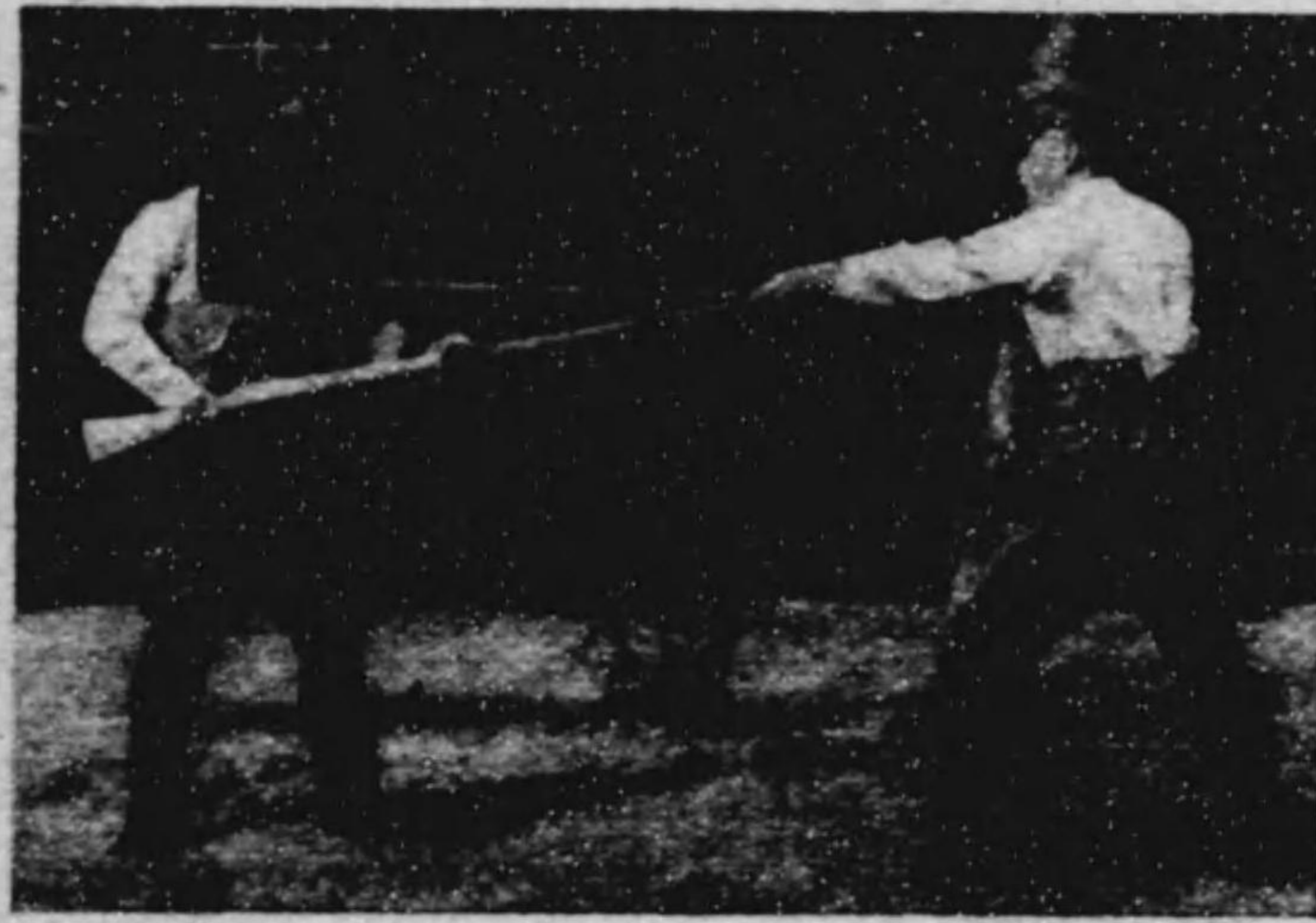
まづ其場で訓練する。要領は「左打て突け」と同じ。

突刺除排の右 (三十其)



敵の刺突して来るのを「右打て突け」の要領で排除刺突する。

第一教習の指要

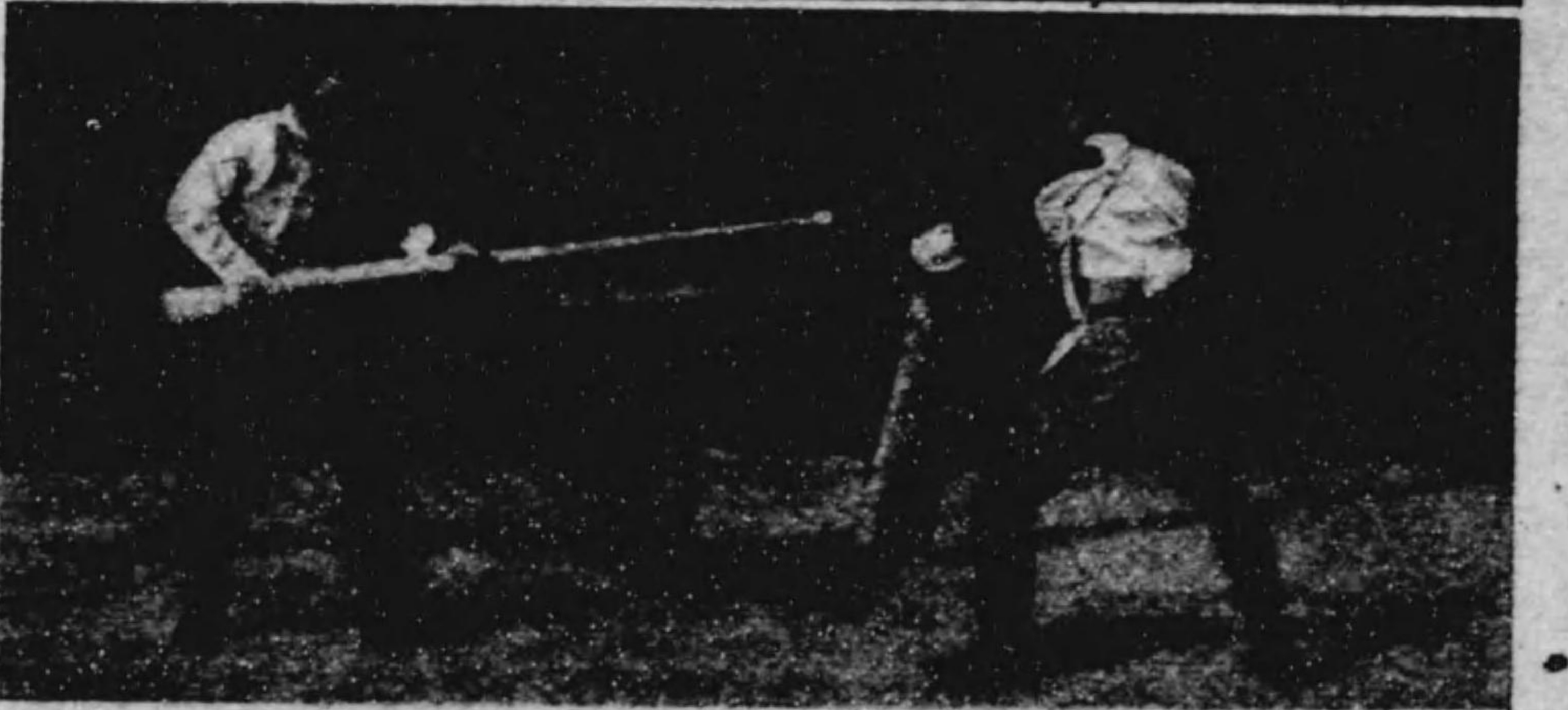
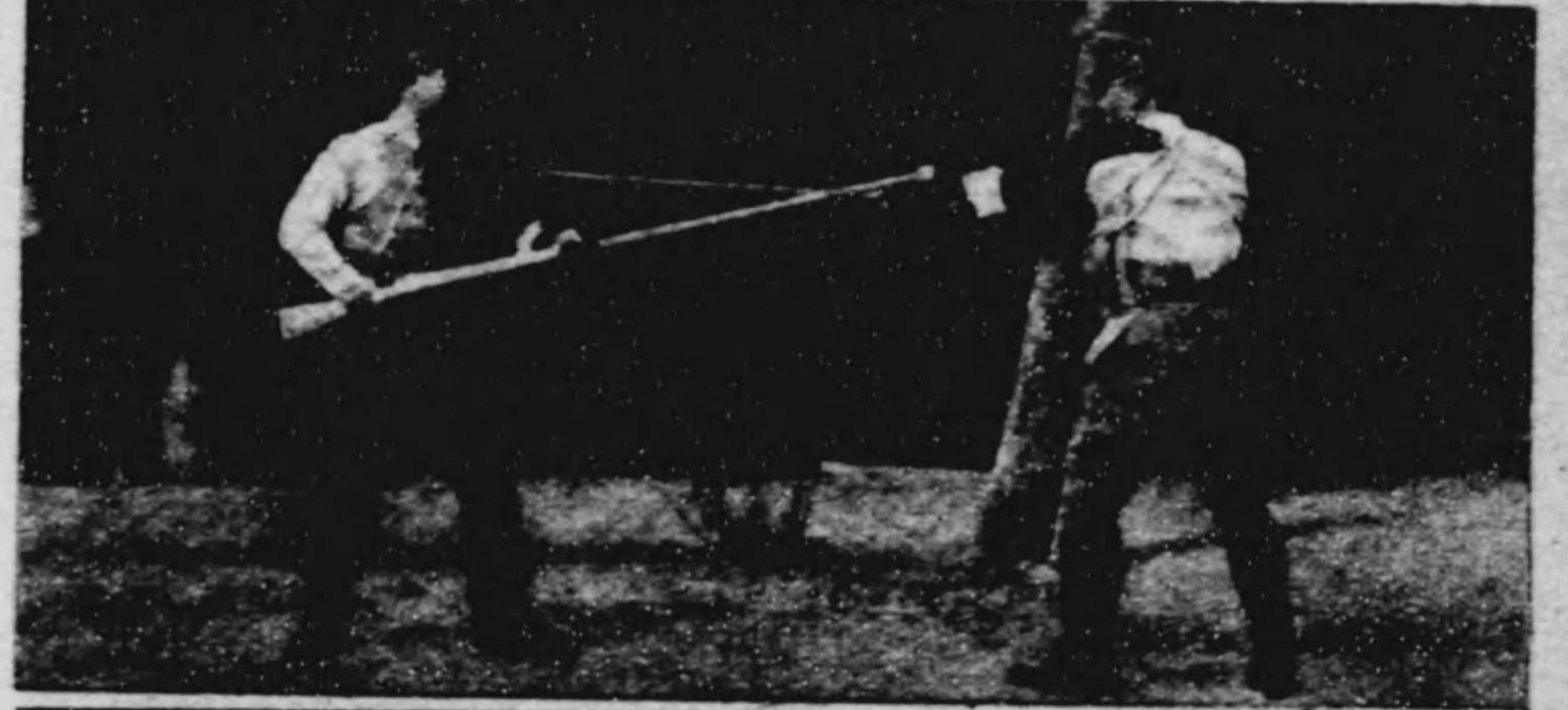
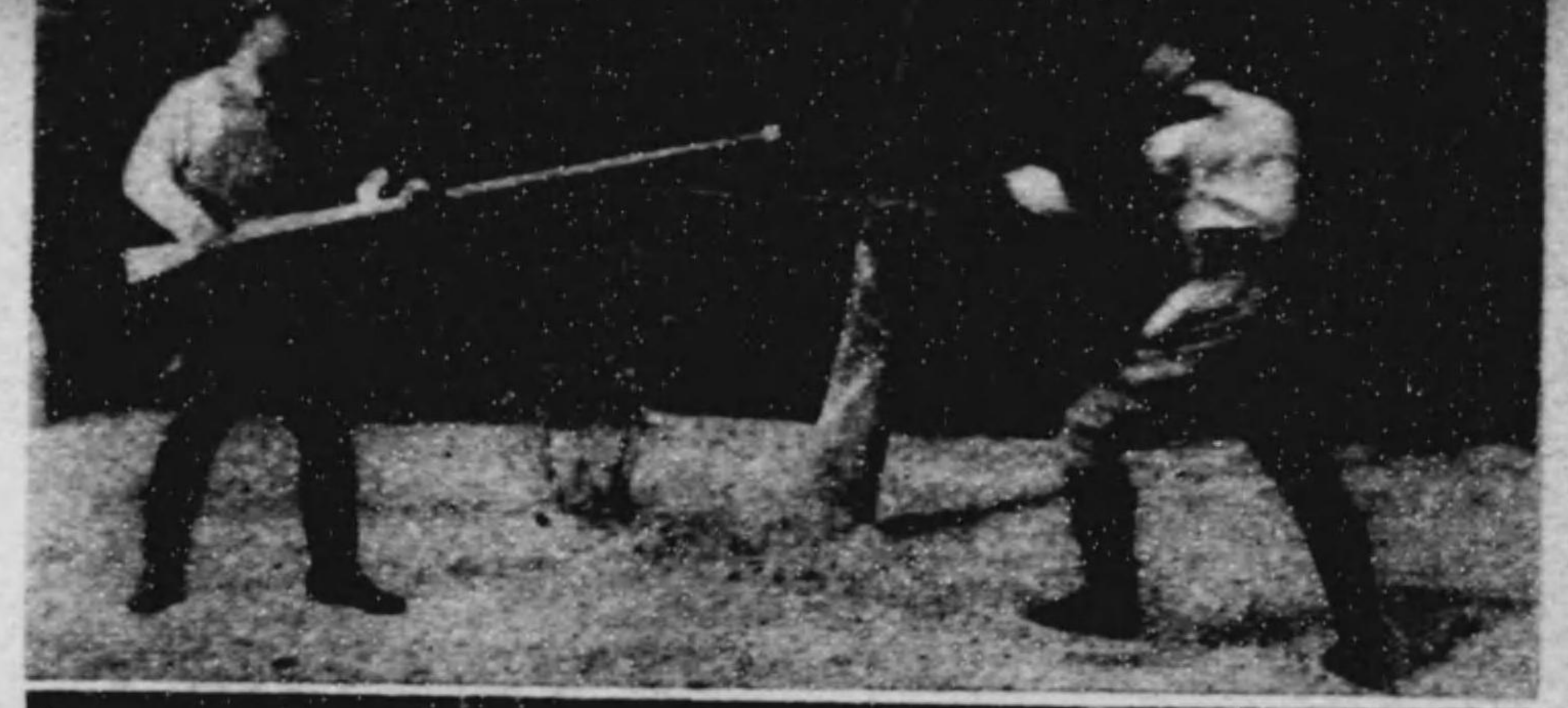


教官は初めと同じ
間合に入る。
教官が手もとをゆ
るめて表胴をあけ
る気分を見せると、
習技者はすかさず
刺突する。

次いで教官は一步
退がりつつ習技者
の剣を右へ押さへ
て表胴をあける氣
分を見せる。

習技者これを感じ
するやすかさず剣
を脱して刺突する。

其五十の左排除刺突
刺突し來る

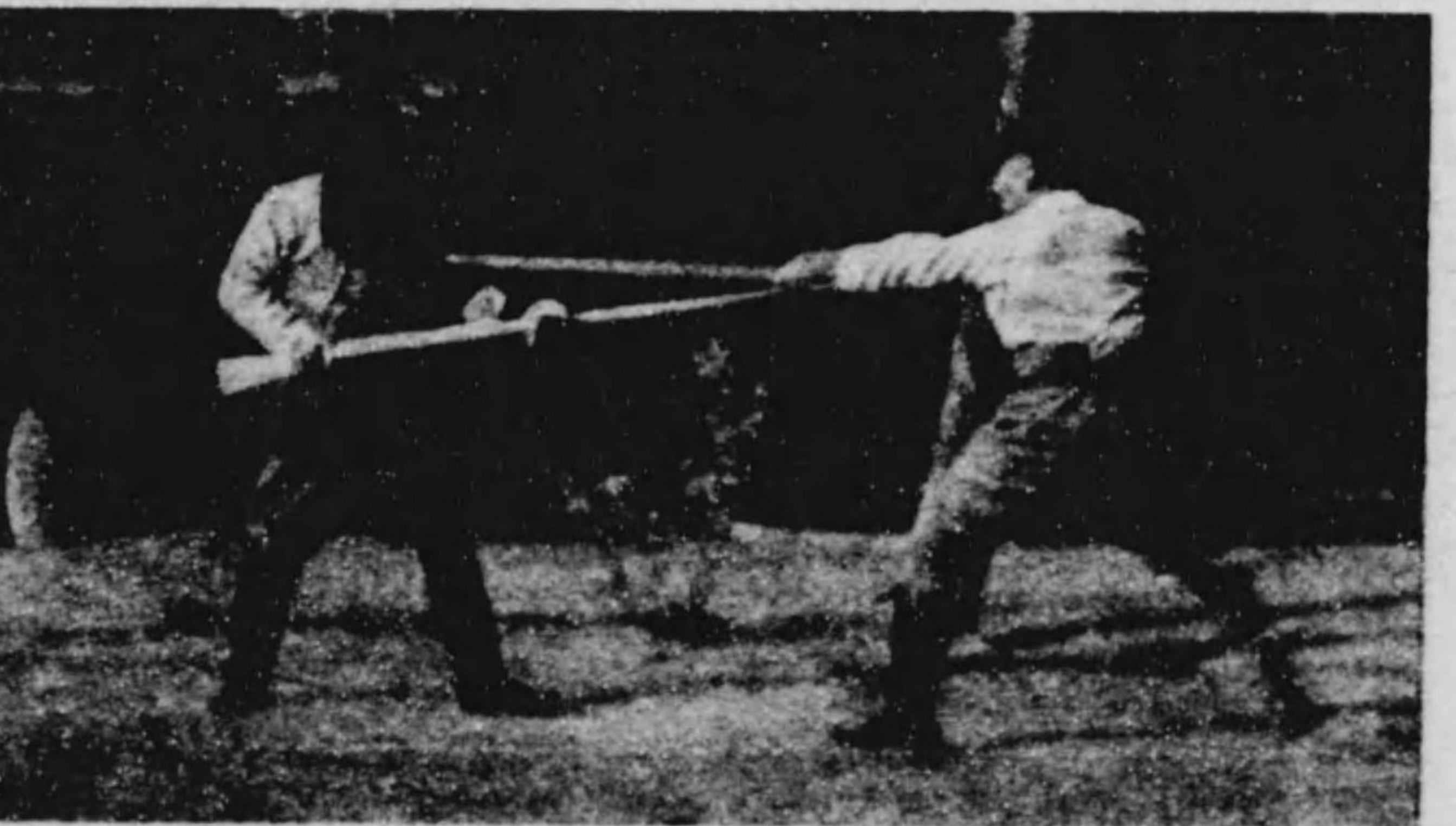
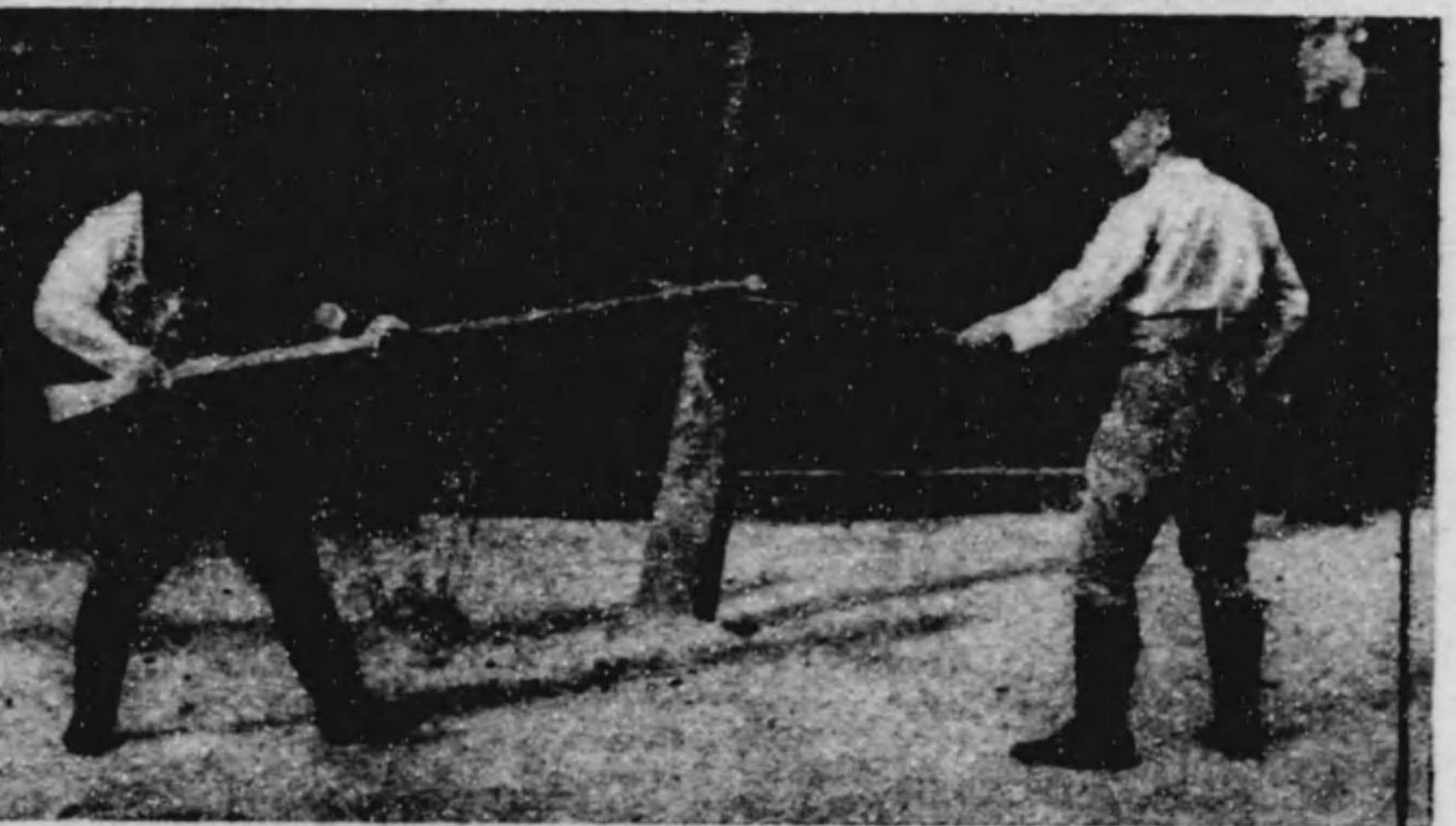
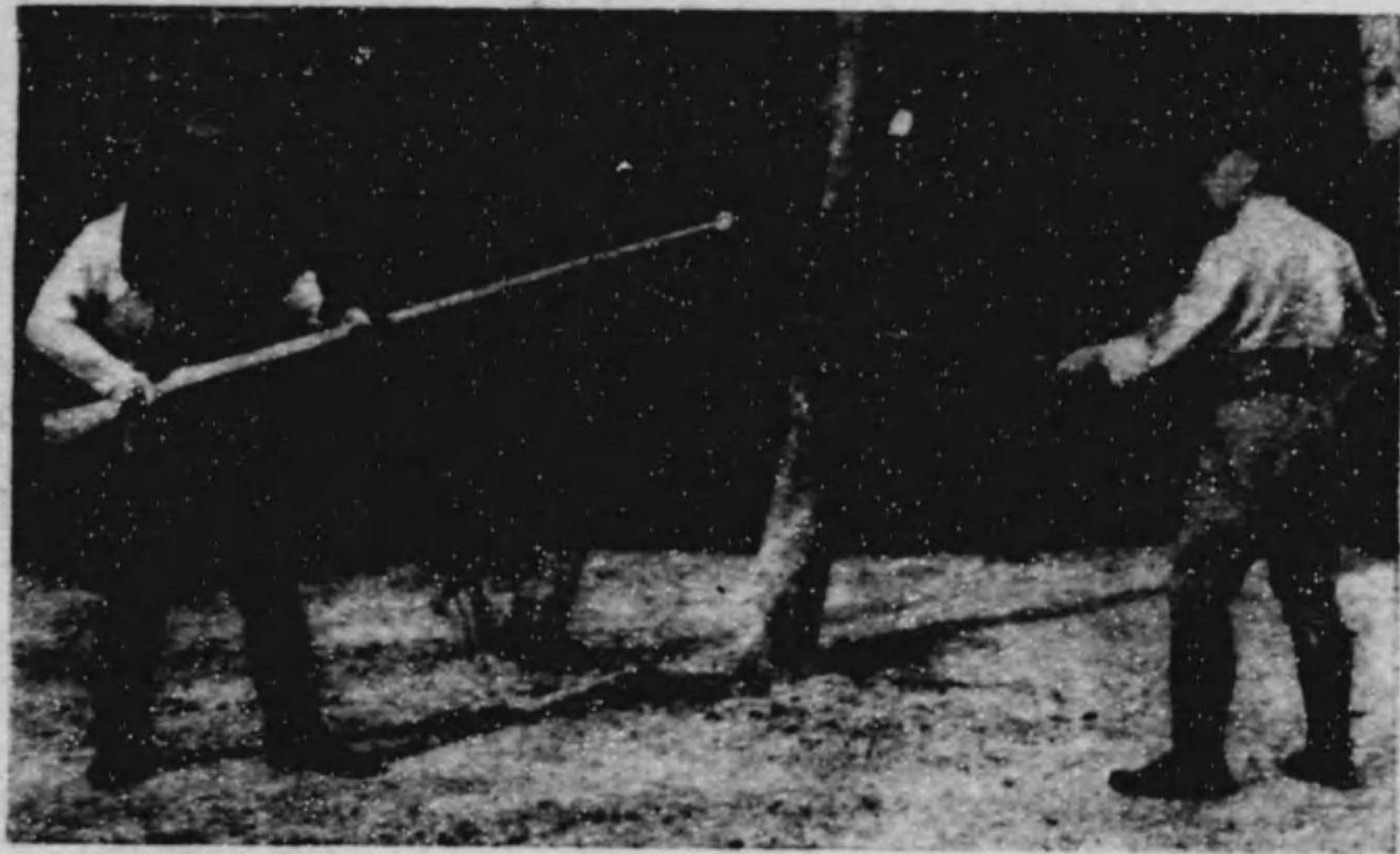


敵刺突しきたる。

まさに刺突さ
れんとす。

間髪を入れず
に打ち拂ふ。

すぐに剣をか
へして刺突す
るところ。



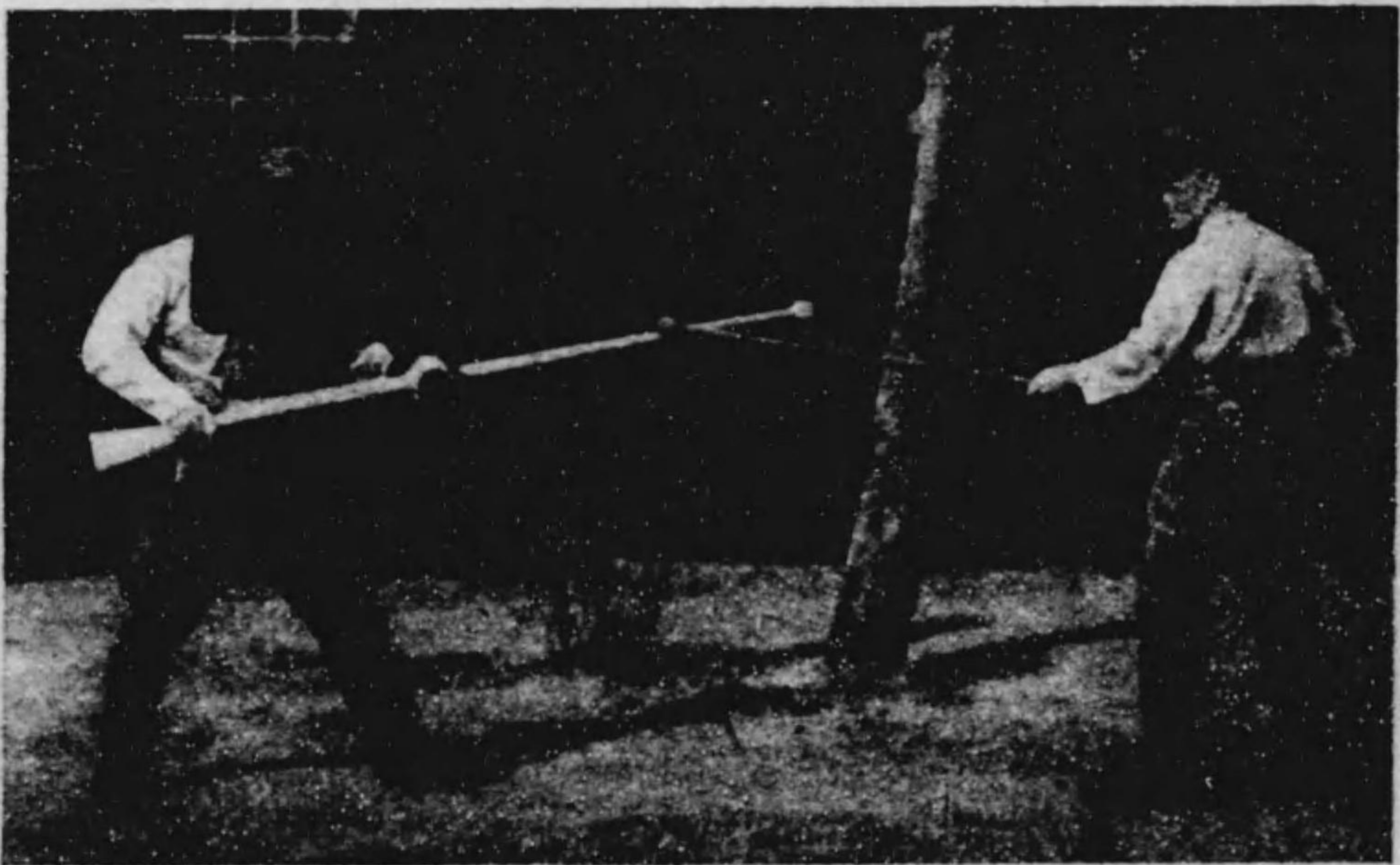
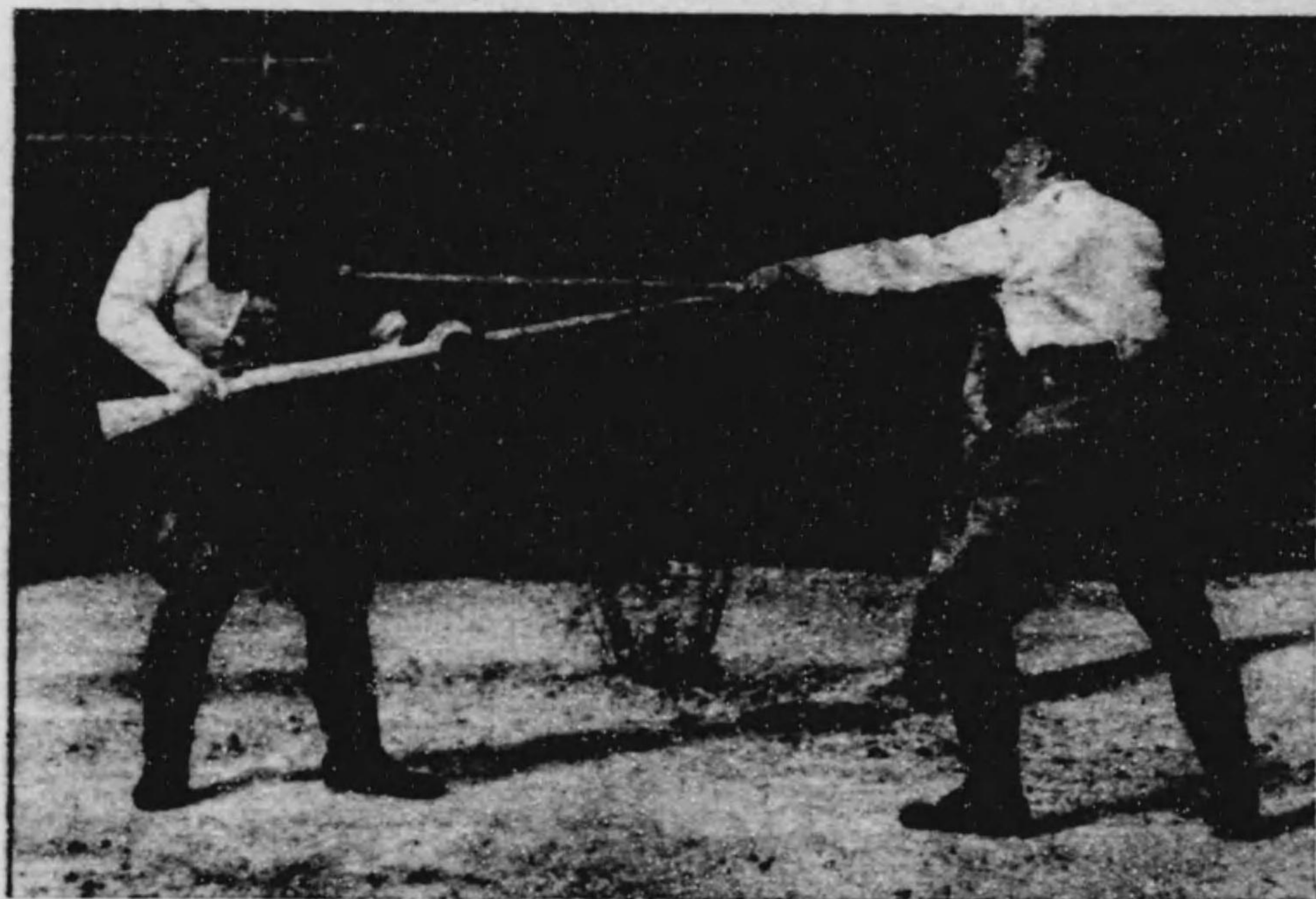
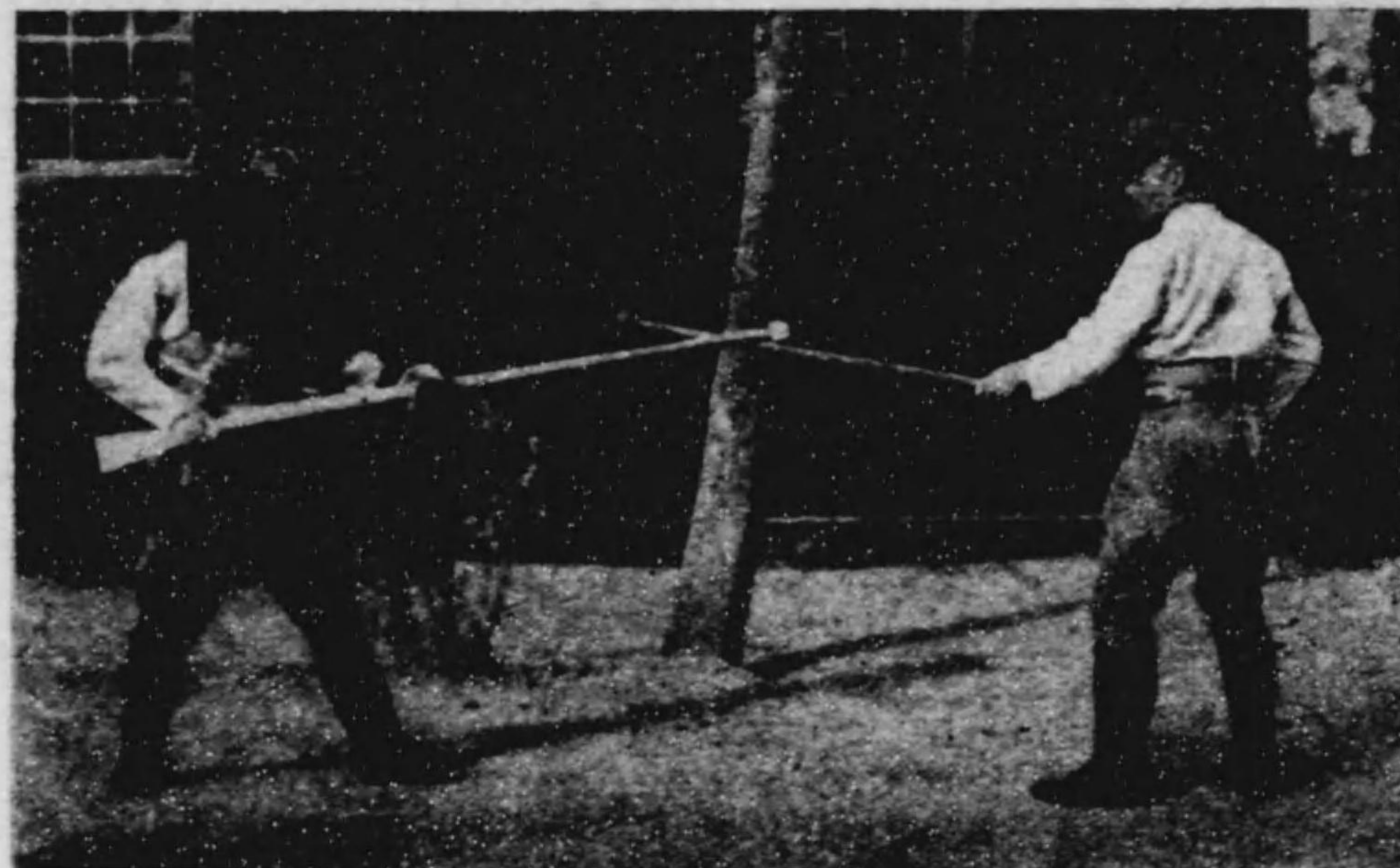
下胴をあける気分
を見せると、

すかさず下突する。

次いで剣を左に押
さへながら一步退
がる。

すかさず上胴(表胴)
を刺突する。

【註】以下これを
適宜に反復する。

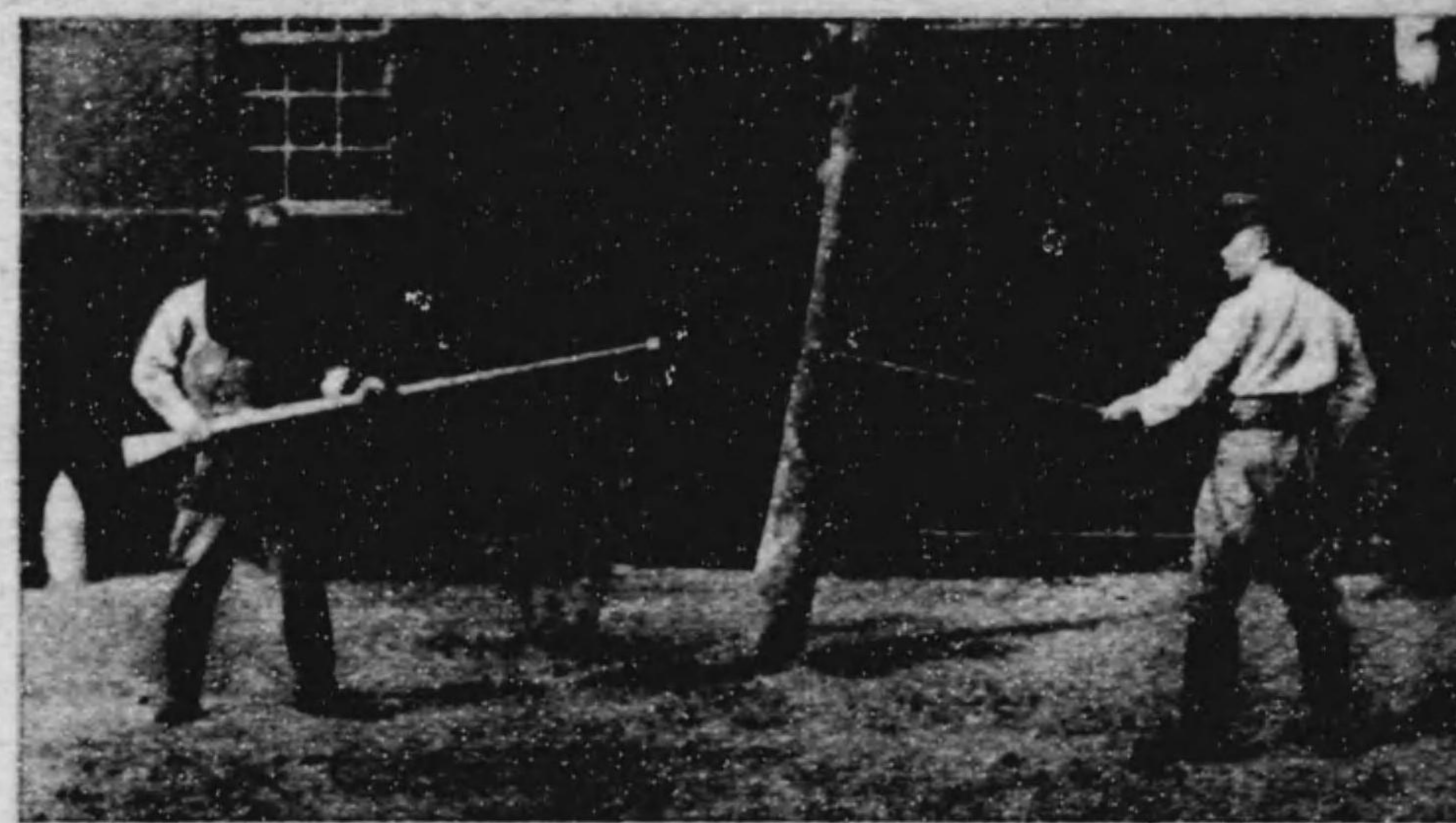


次いで教官は一步
退がりつつ習技者
の剣を左に押さへ
て表胴をあける気
分を見せる。

すかさず剣を脱
して刺突する。

次いで一步退がりつ
つ剣を上方に押へる
やうに……

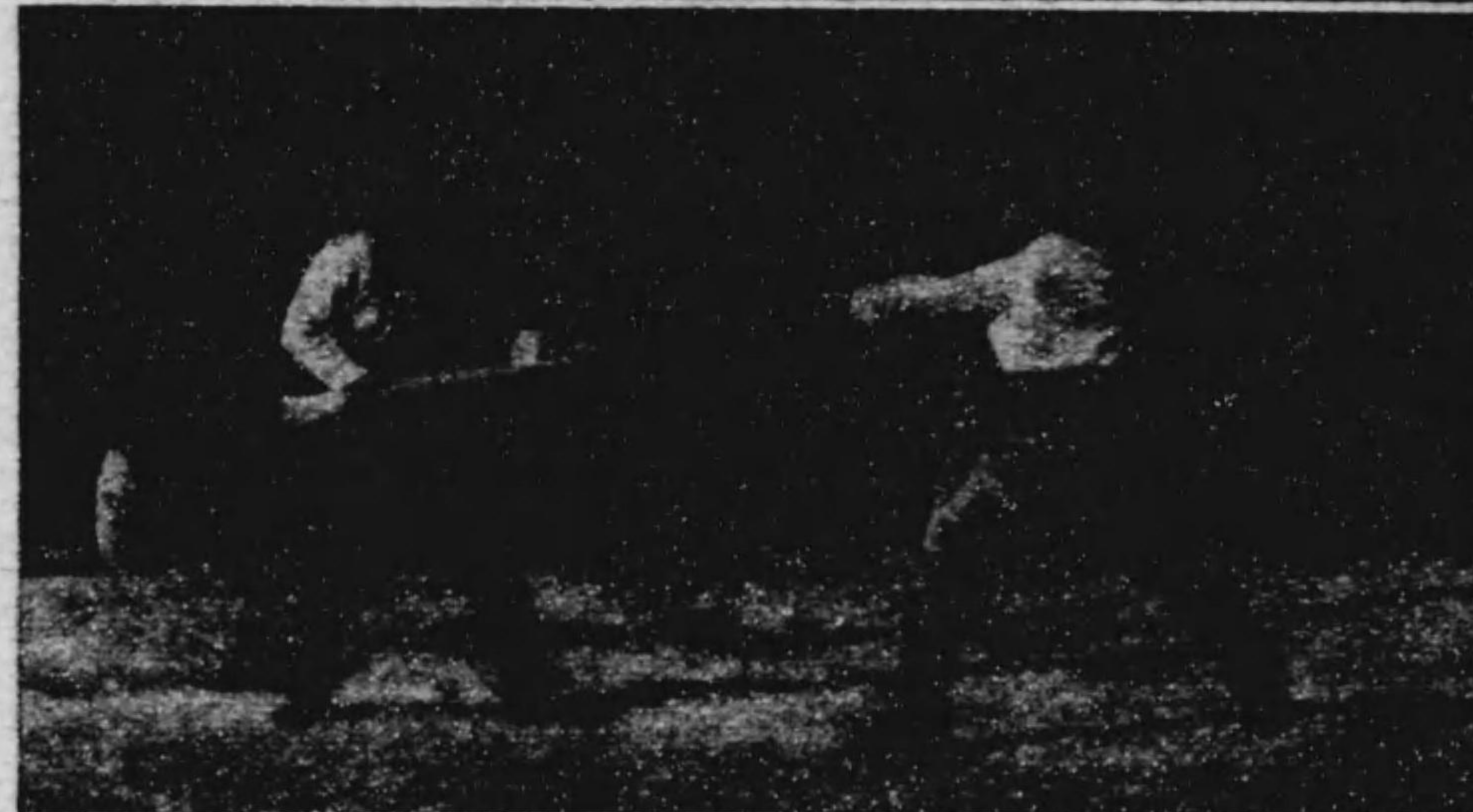




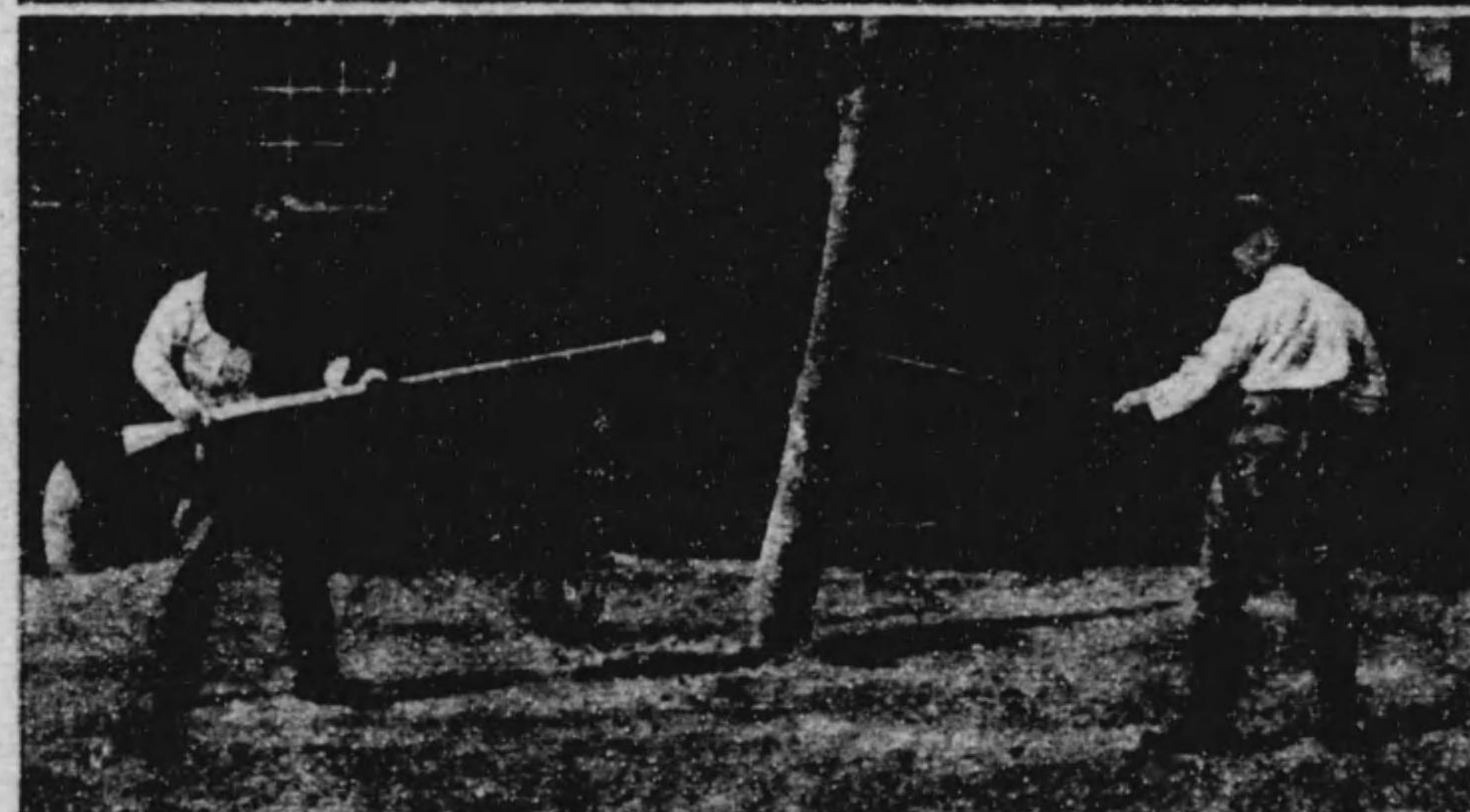
間合外に立つ。
劍尖は約十纏位
離す。



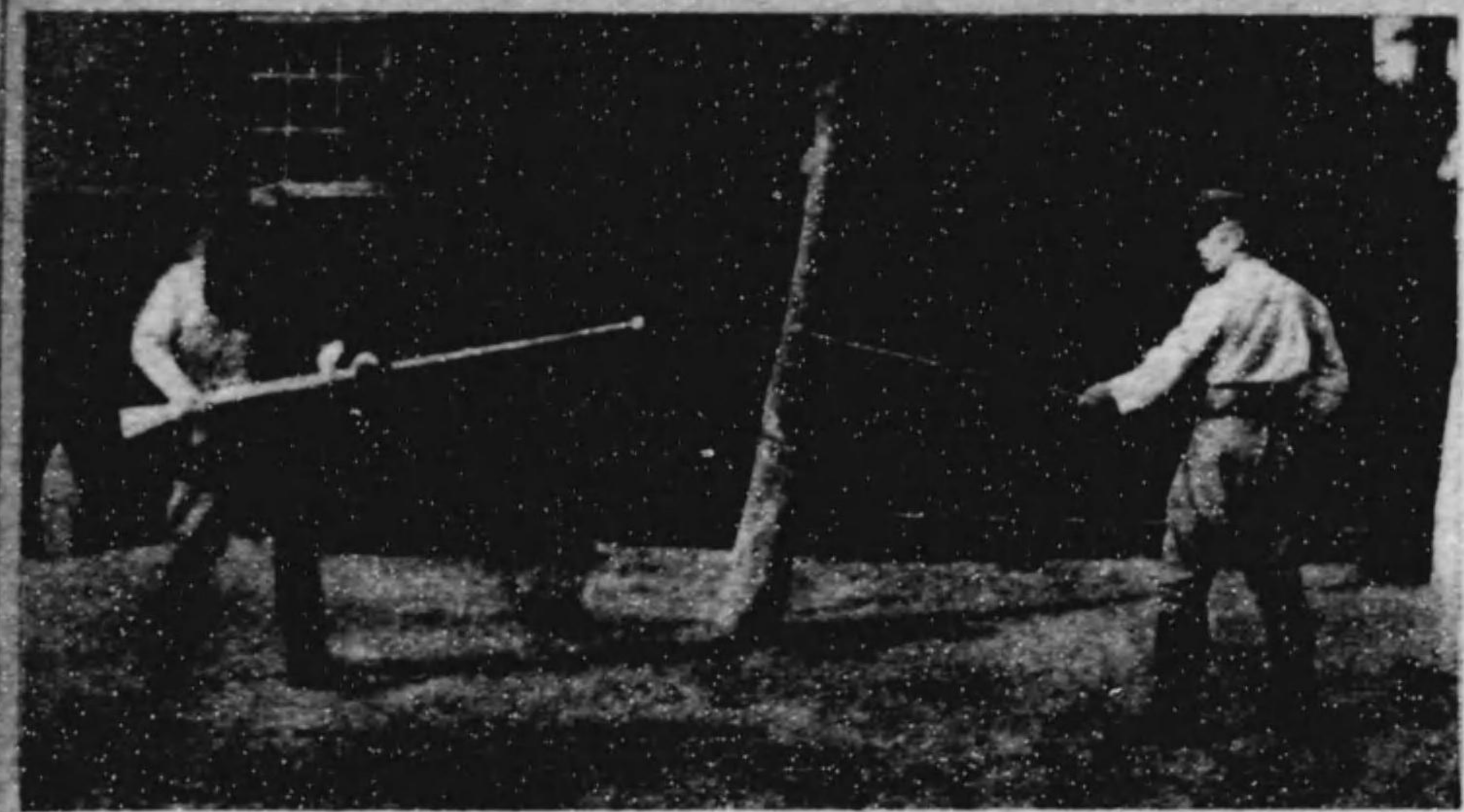
習技者間合に入
らんとするとき
表胴をあける。



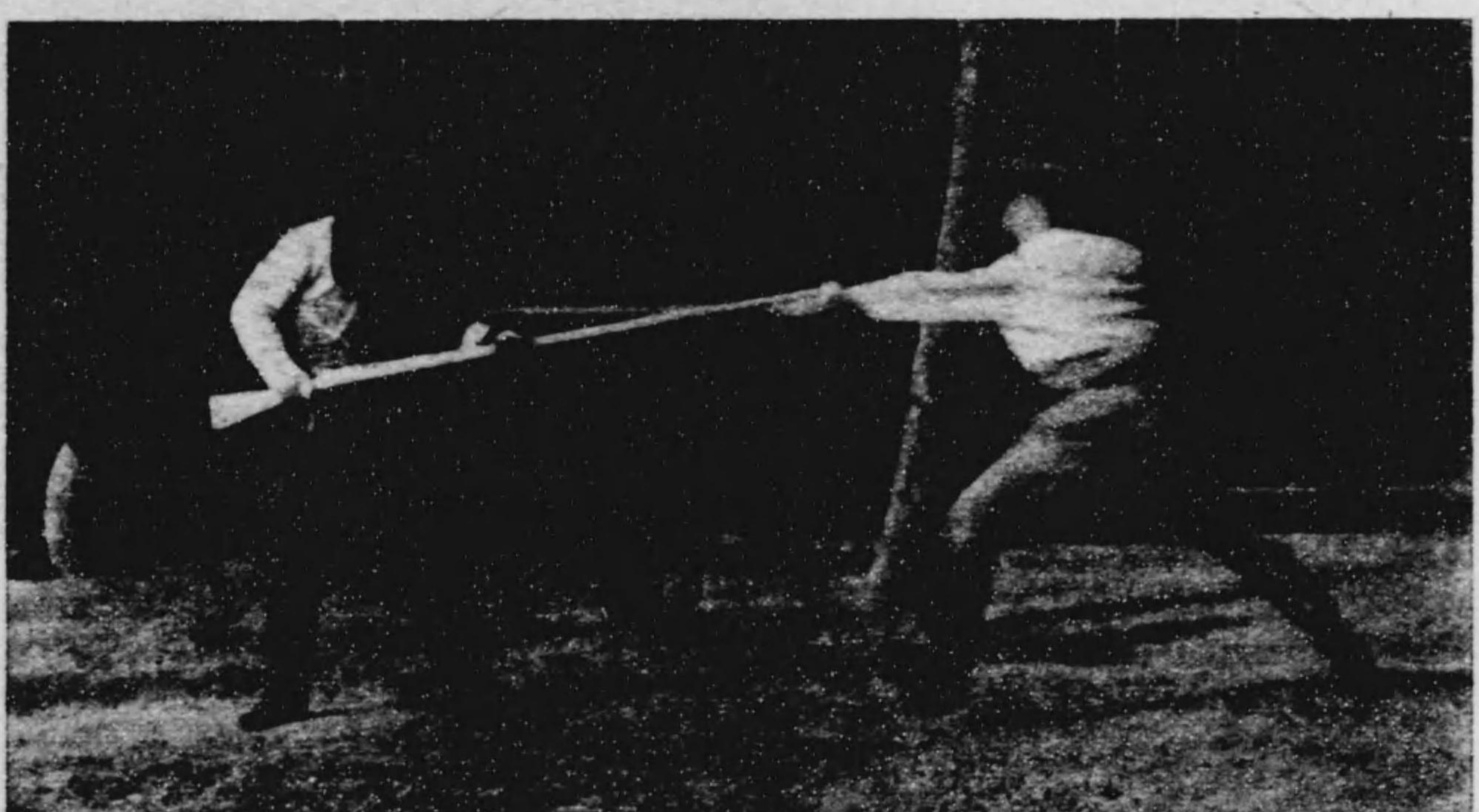
表胴の隙を見るや、
すかさず刺突する。



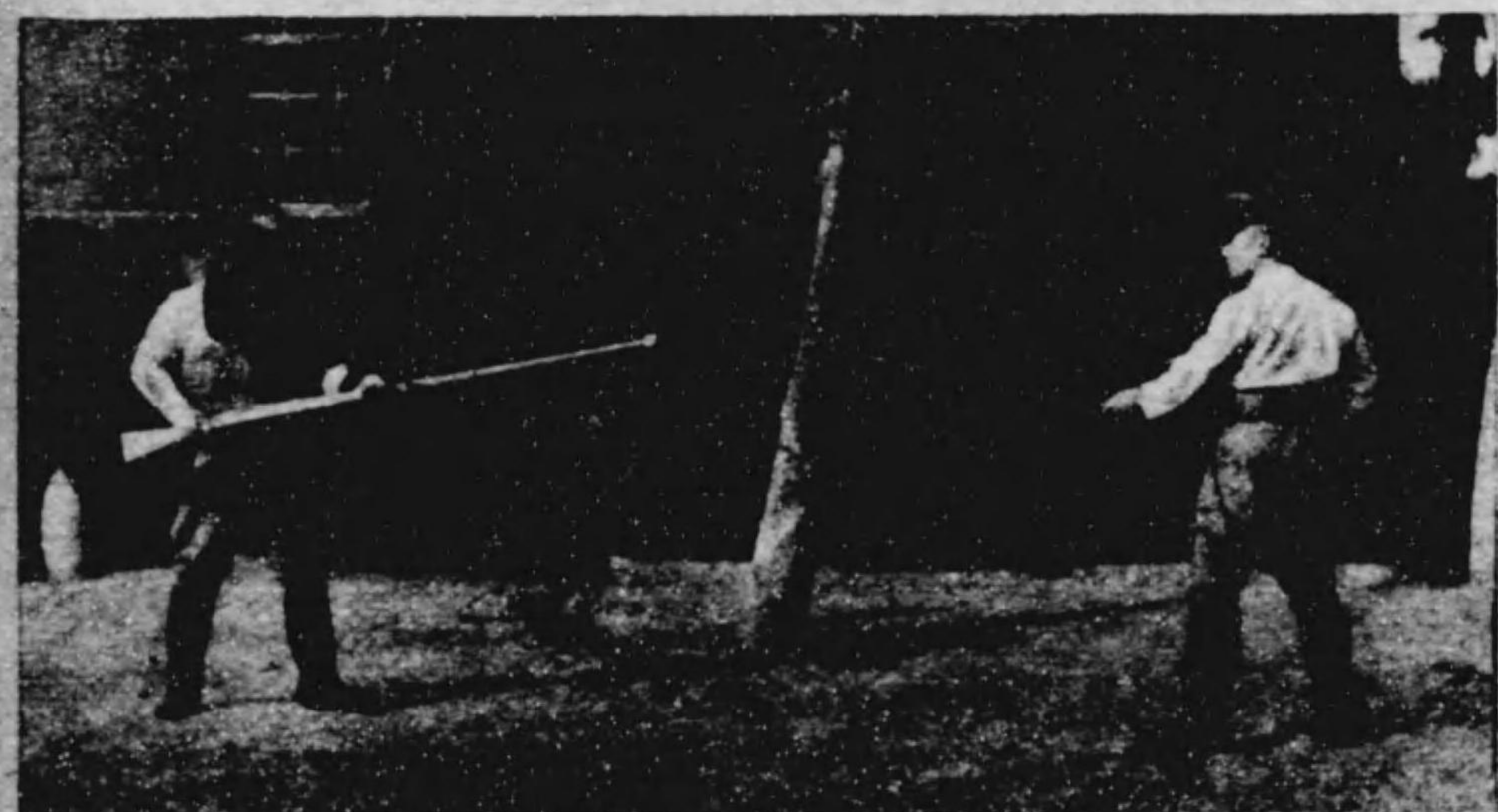
習技者は引抜く
と同時にもとの
位置に退がる。



間合外より間合
に入らんとする
とき、裏胴をあ
けるとすかさず
刺突する。



刺突するや、
すぐに引抜き



もとの位置に
かへる。





姿勢いし正

方ち持いし正



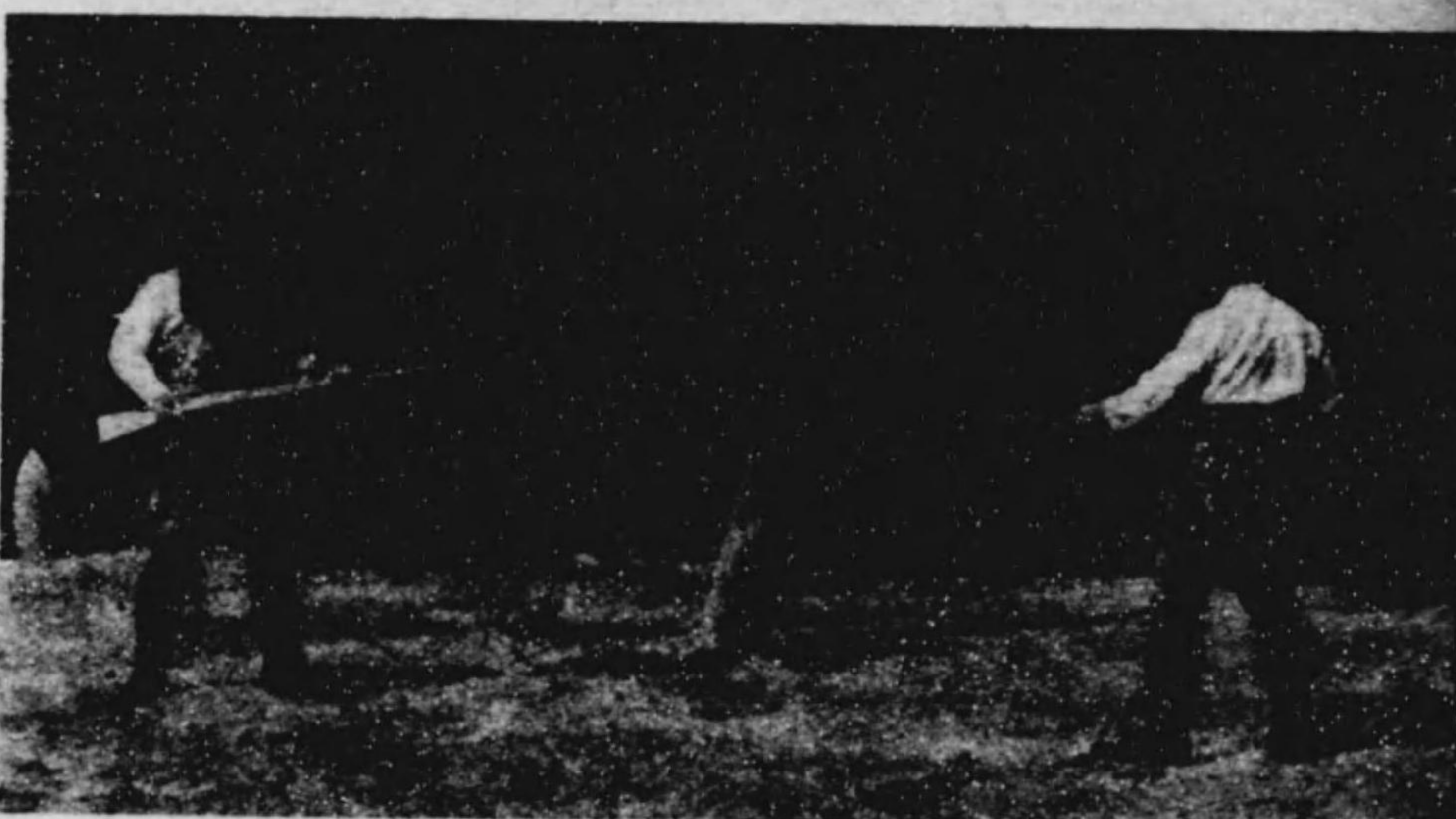
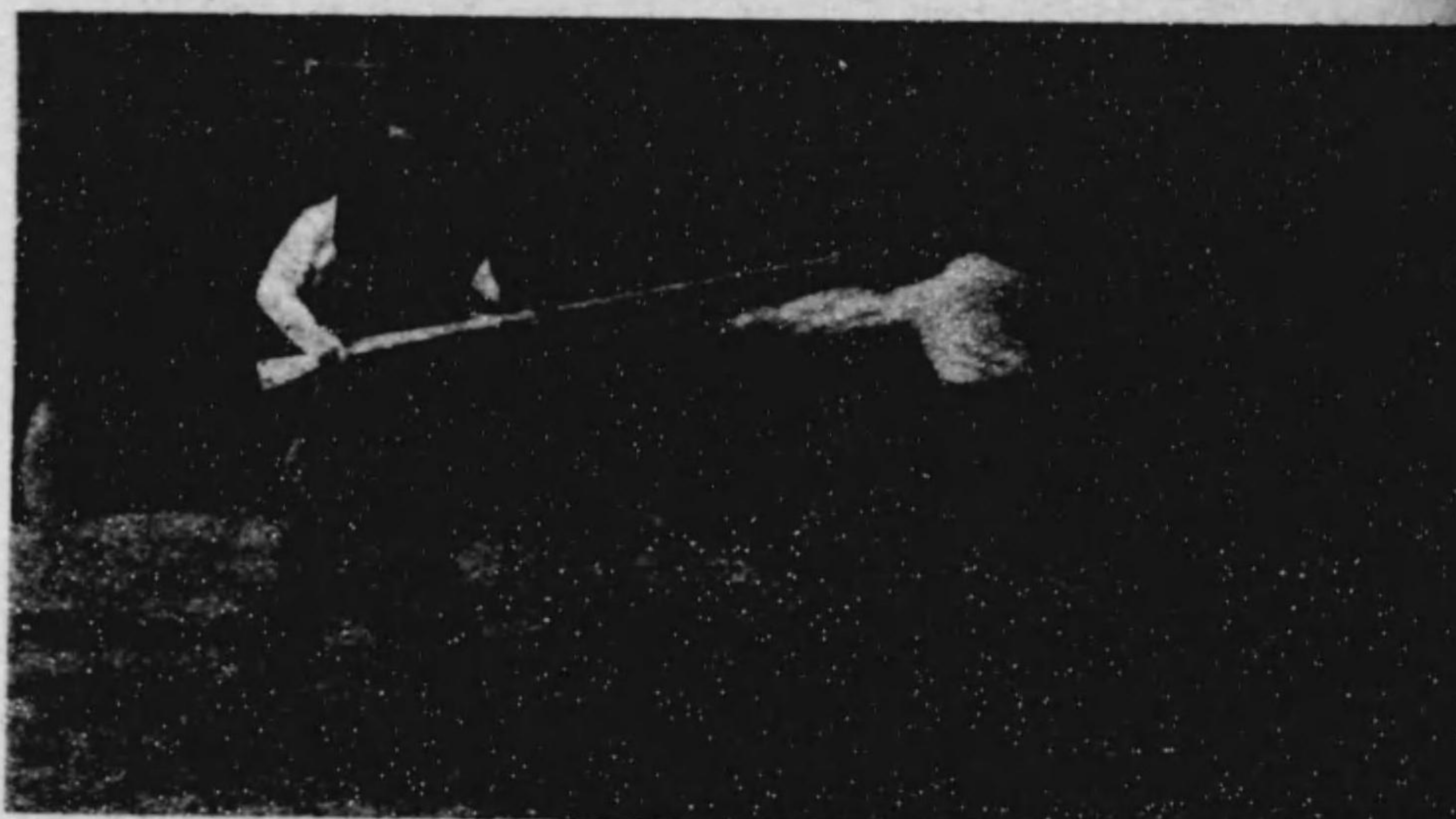
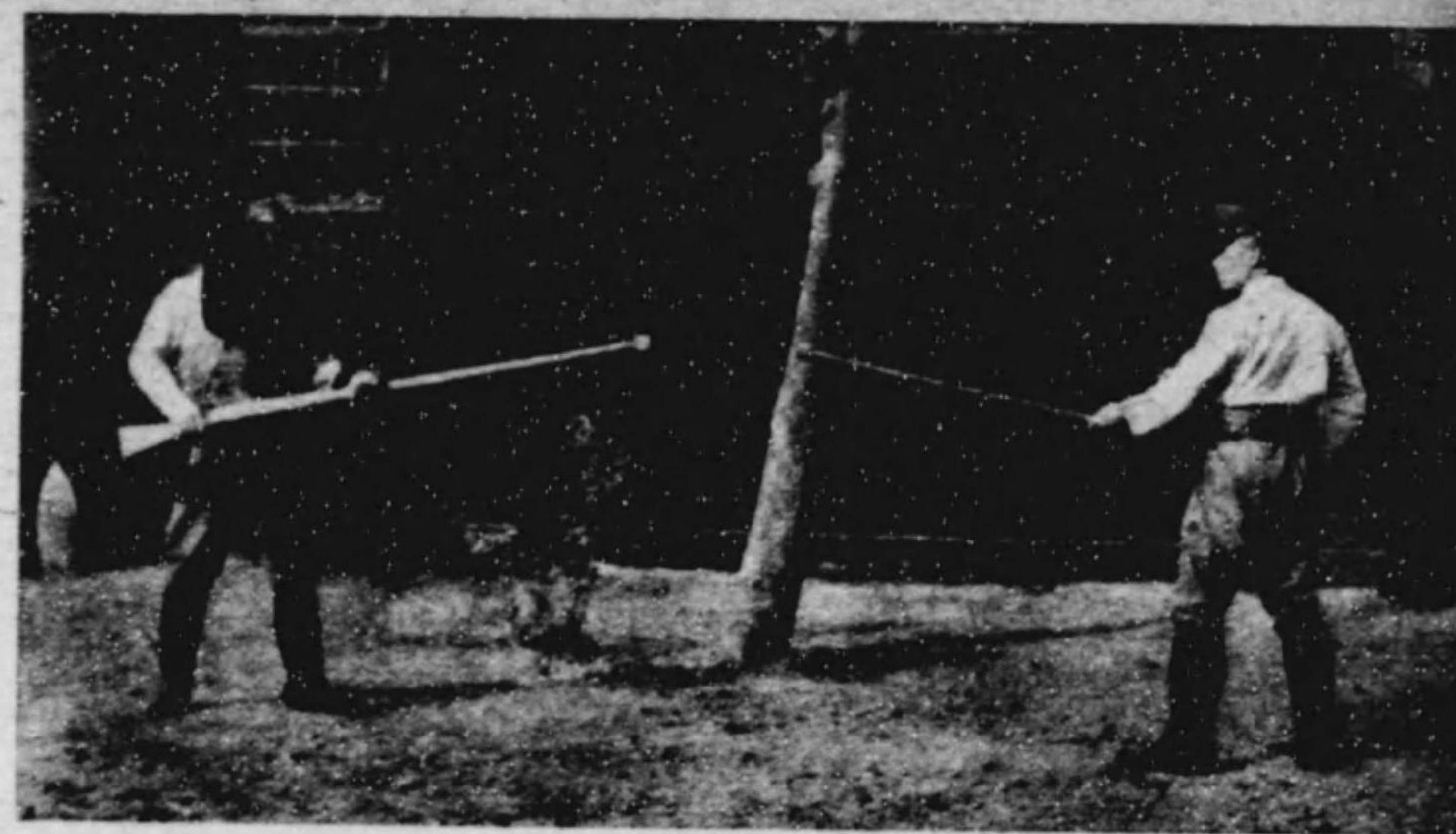
手左、に部起突は手右
るゐてつ握らか方上は

方ち持い悪

手左し接に鐵心用は手右
るゐてつ握らか方下は



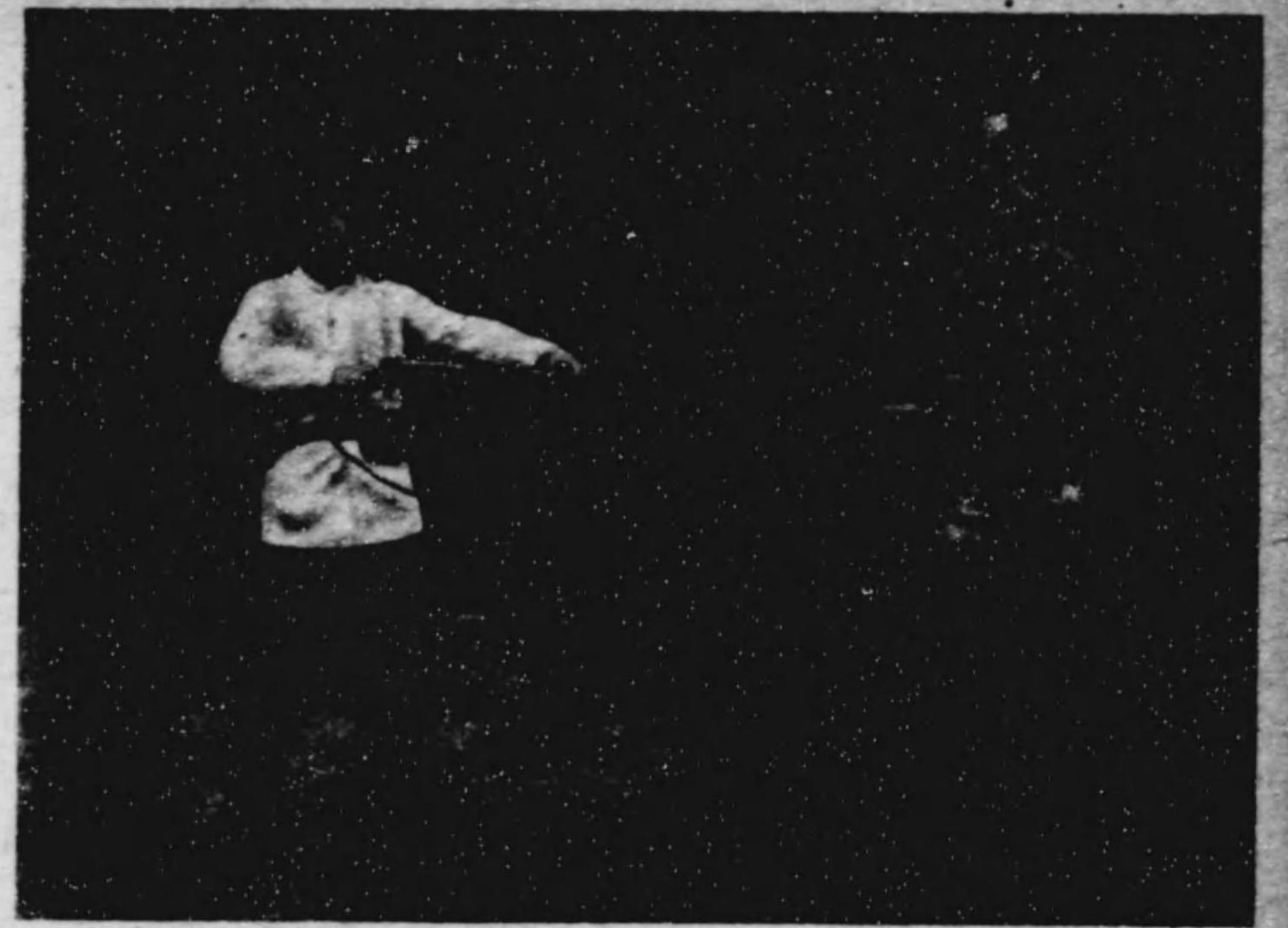
前述の要領で下
を刺突する。



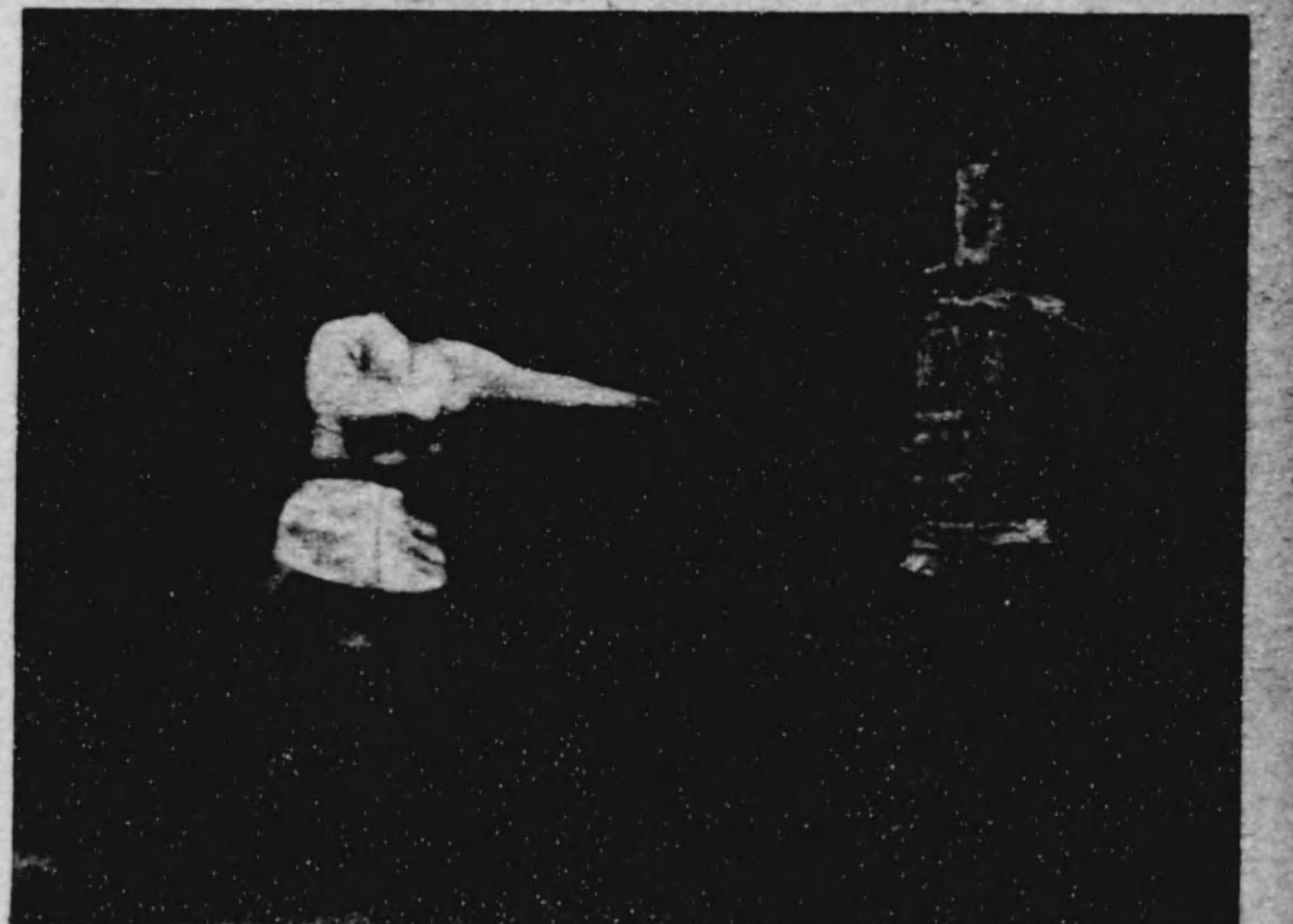
突刺標假の銃眞

突刺場其

間合をとる。劍尖
は一、二寸入る程
度を可とする。



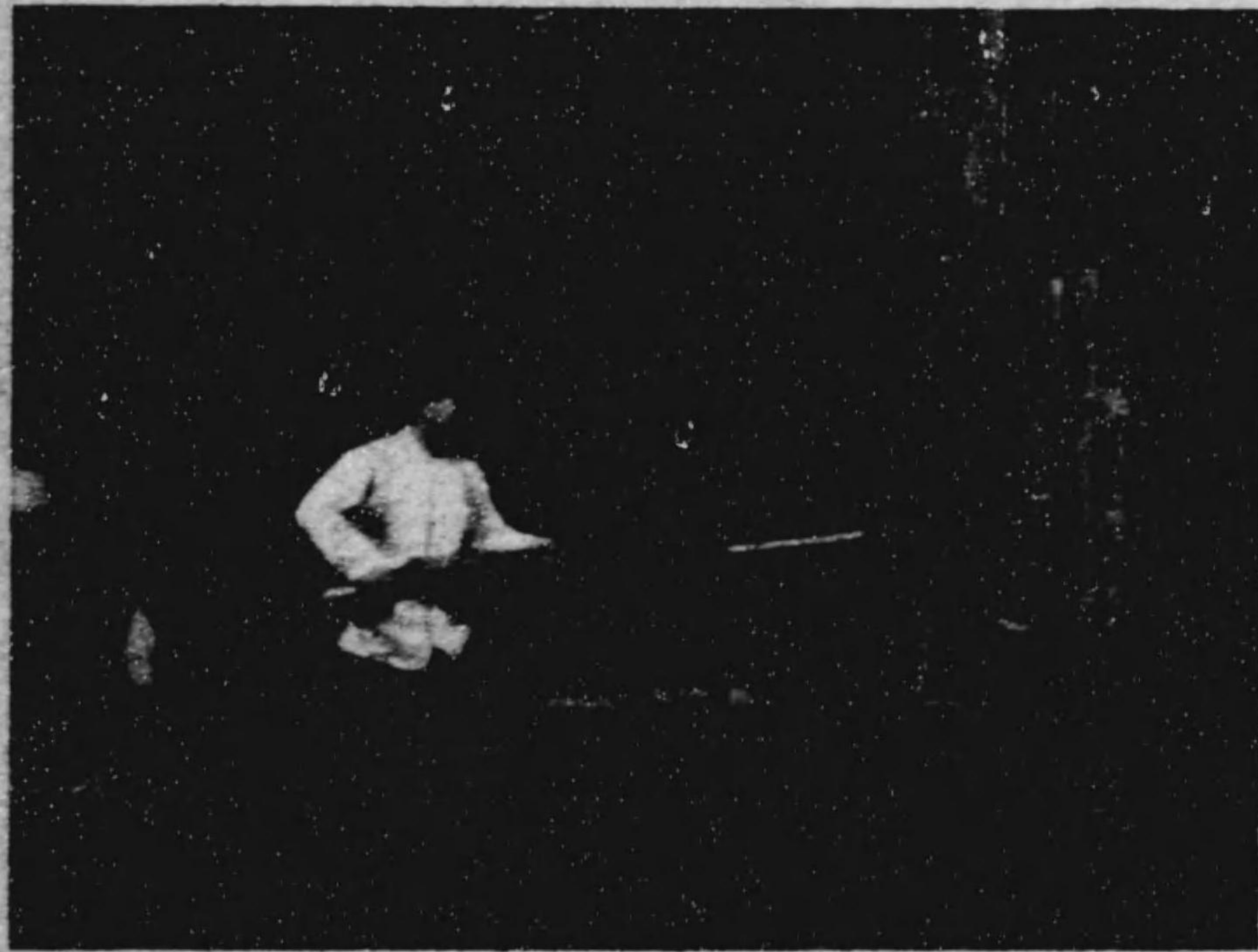
構へ銃



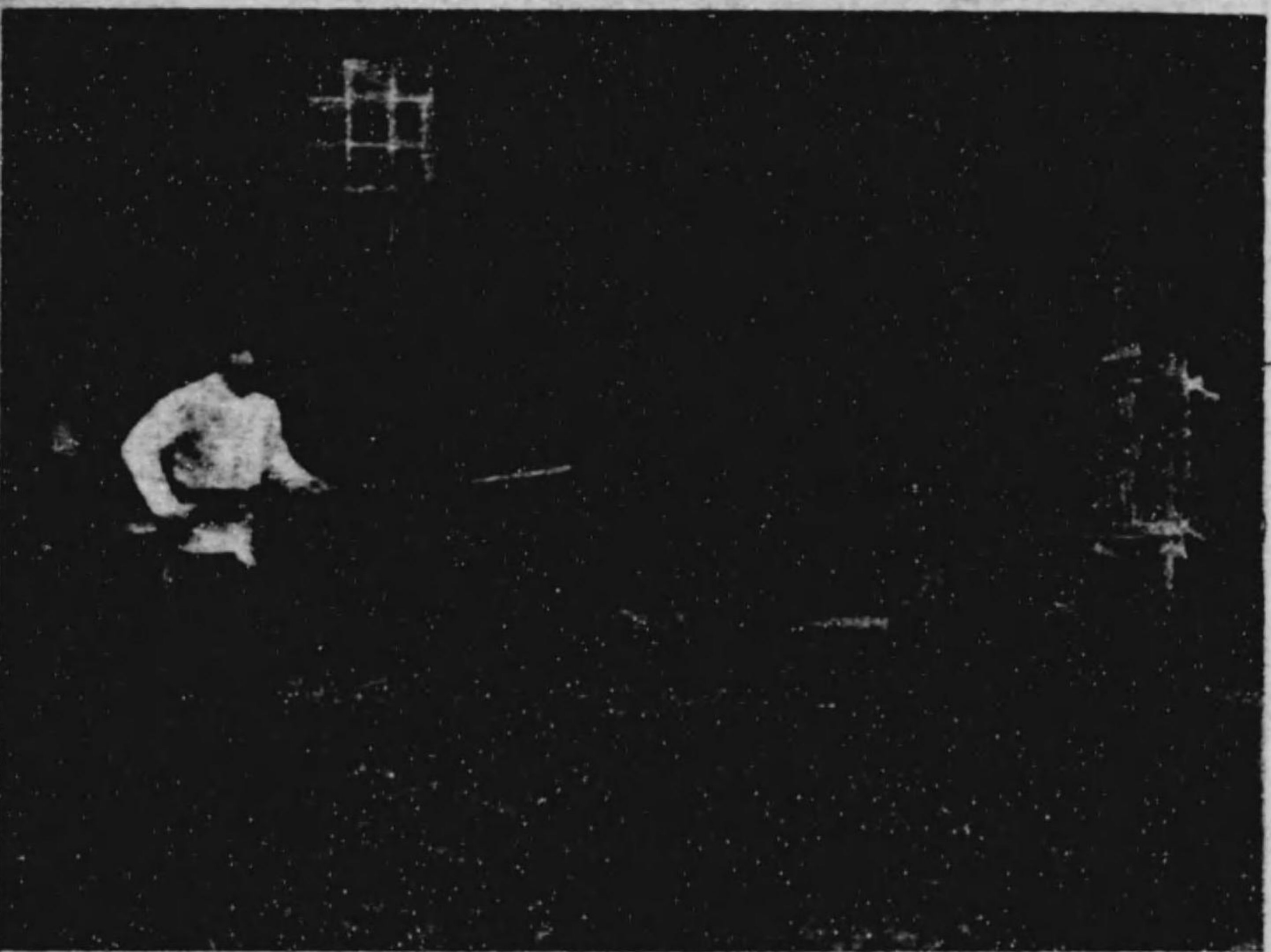
其場で刺突する。
最初は刺突量を要
求しない。

突 刺 入 突

正規の刺突。



六歩附近より速歩
(駐歩)にて刺突。



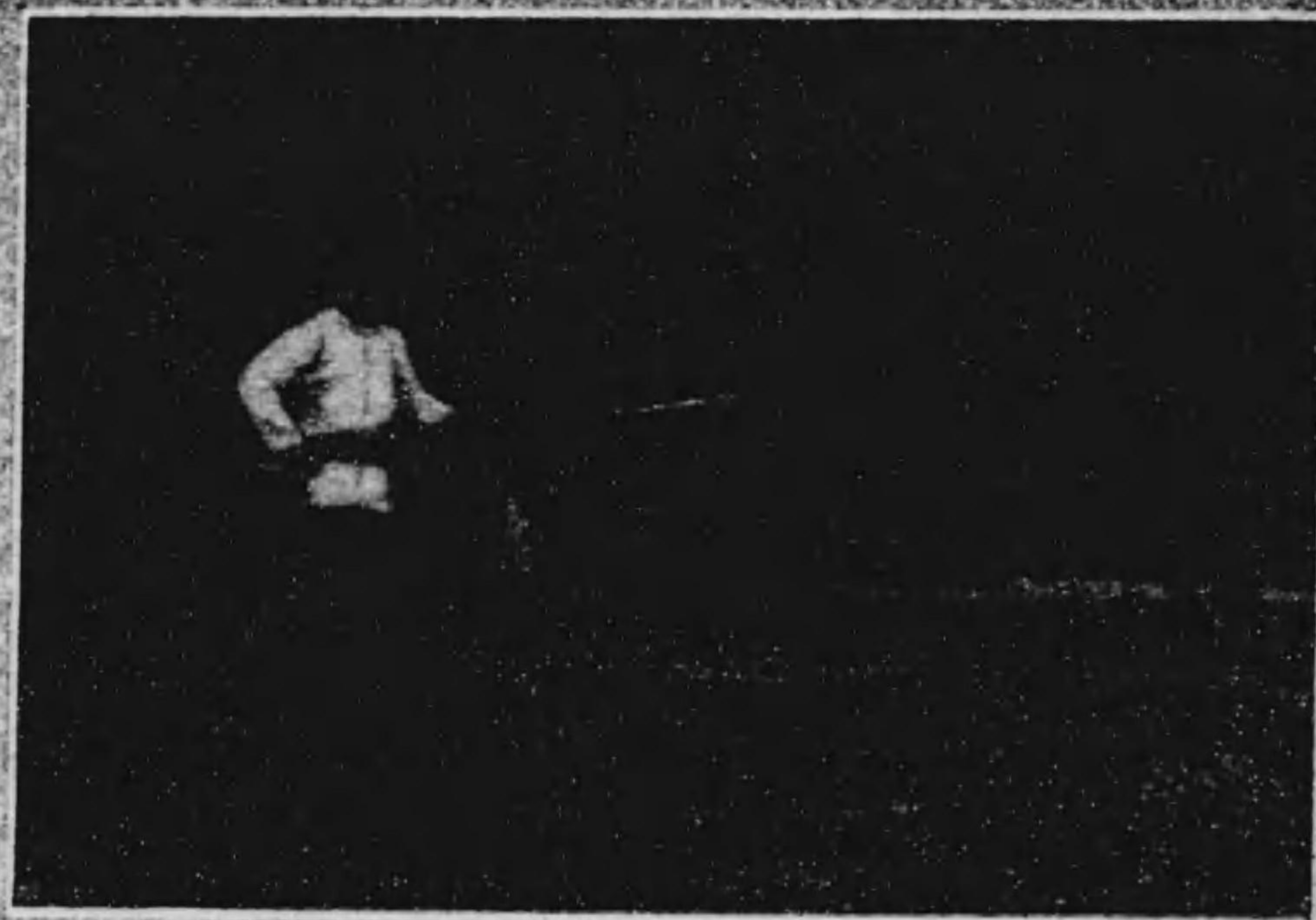
十米のところから
突入刺突。
漸次に歩度を増加
するやうにする。

第一圖
劍尖を敵につけ、
左手をもつて下帯
の下を握る。



第二圖

劍尖を動揺させ
ないこと。

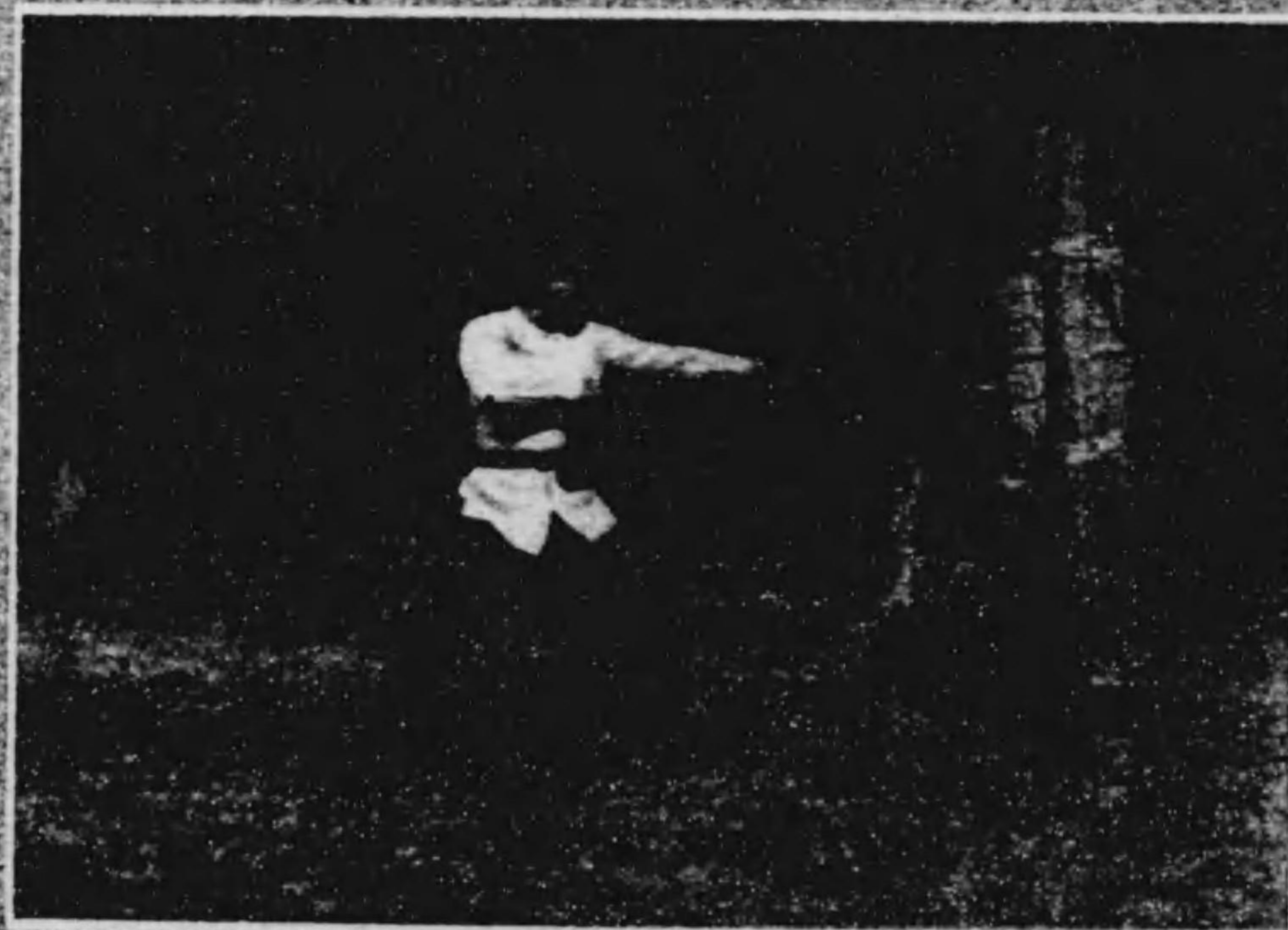


肩を引たところ
持て重心を下げる事が出来る。



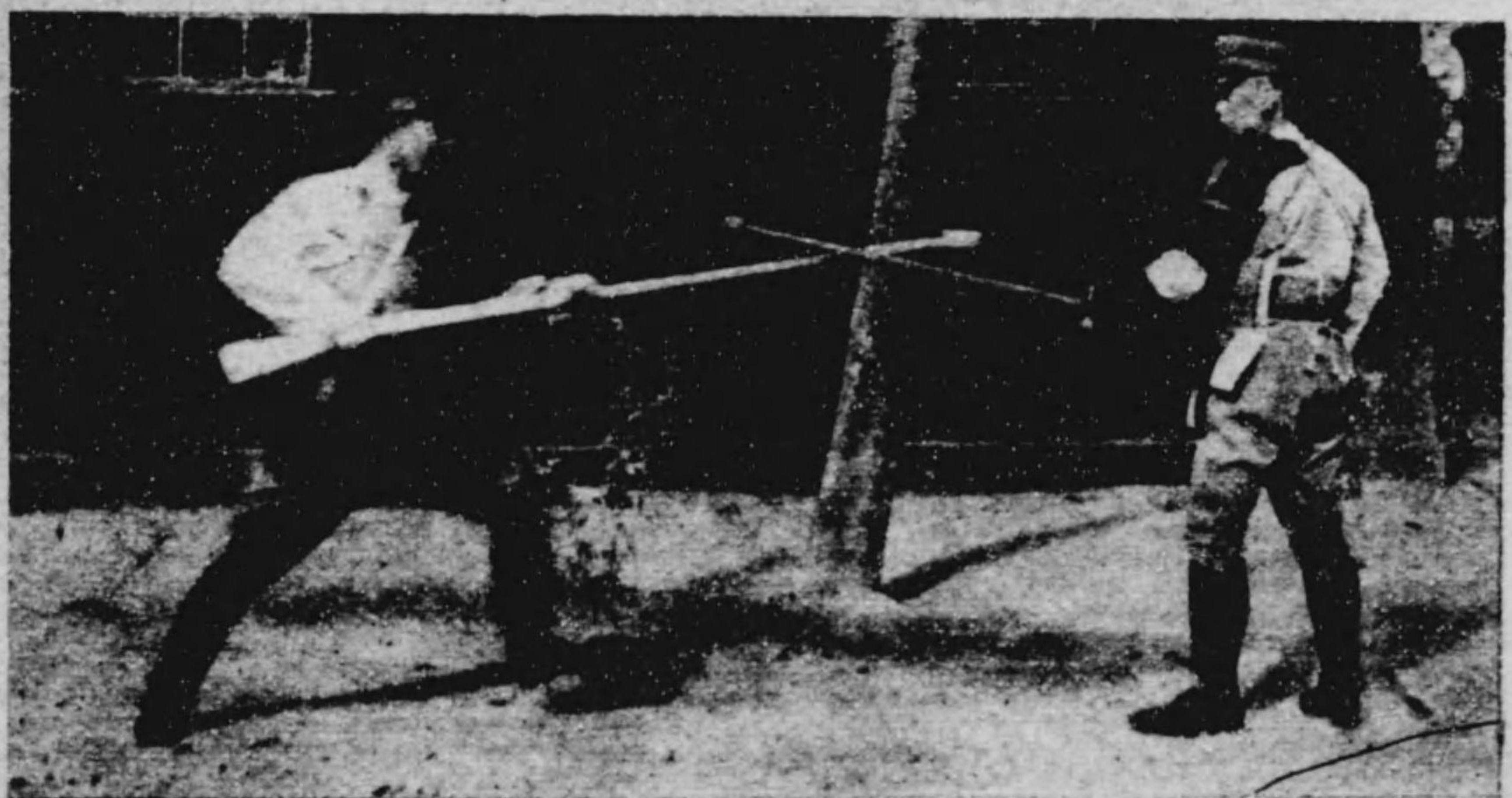
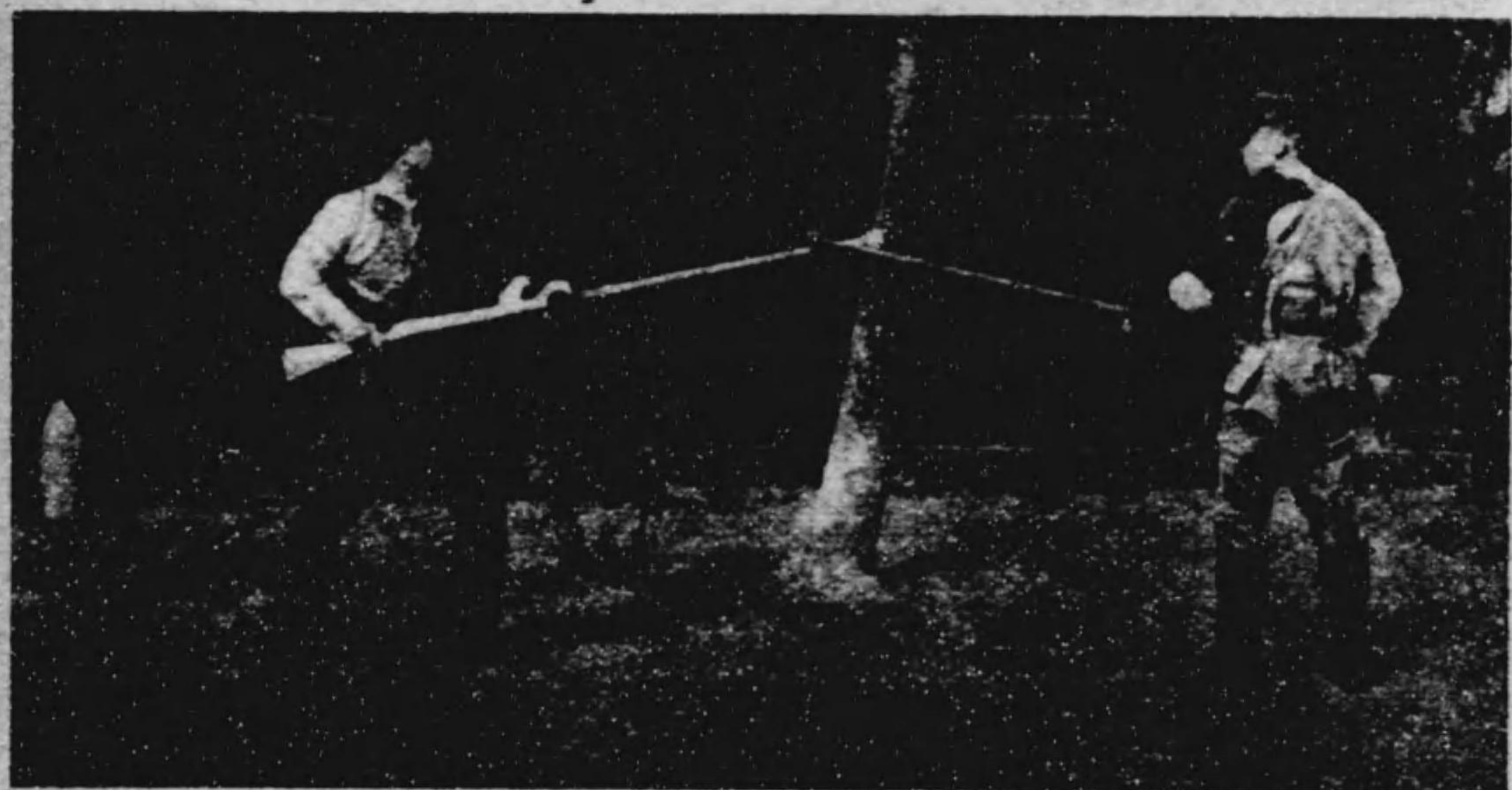
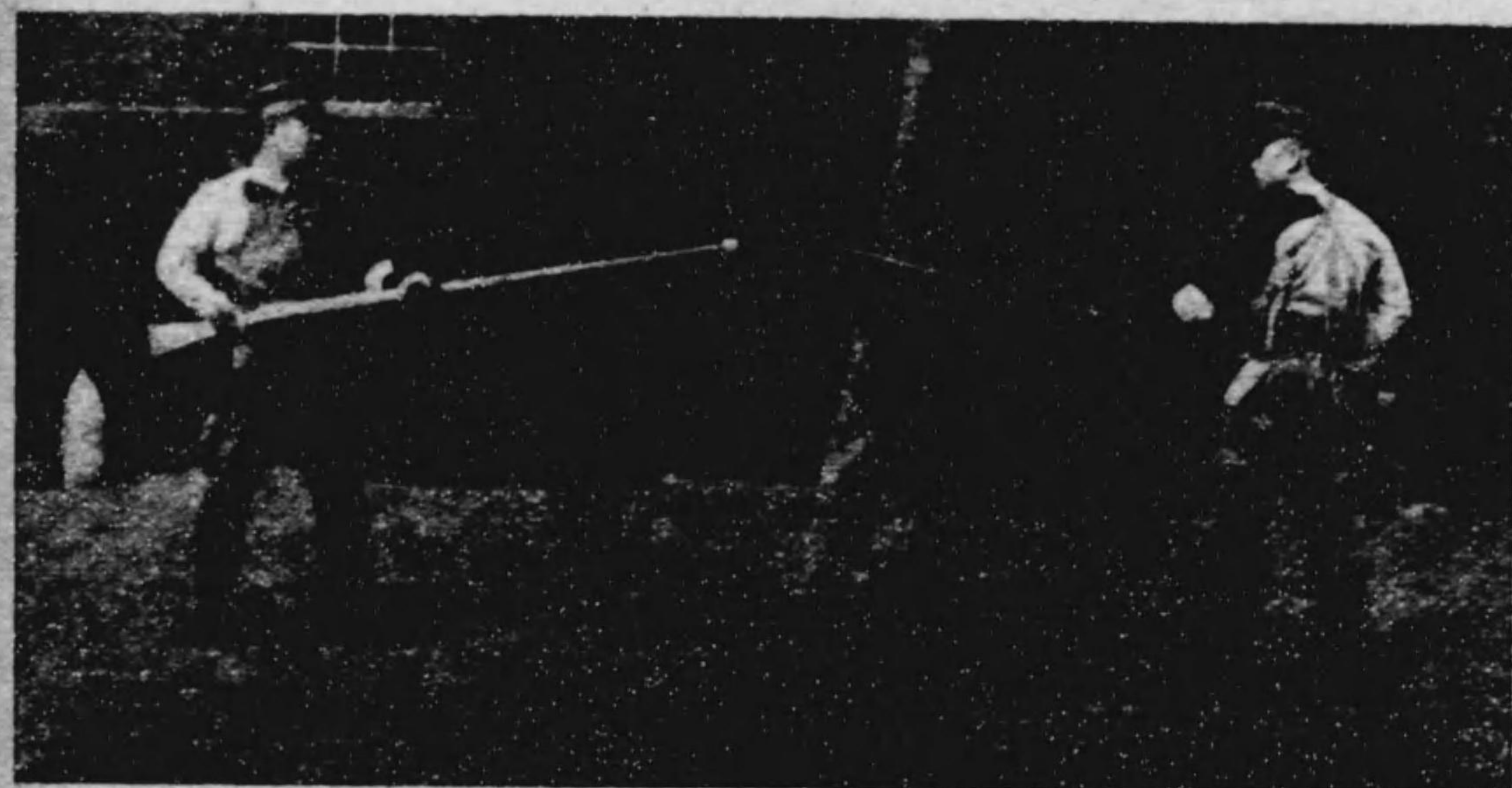
引抜き動作

僅かに退がりつつ
まっすぐに引抜か
んとするとよろ。



突刺るす對に敵賣

突刺の通普

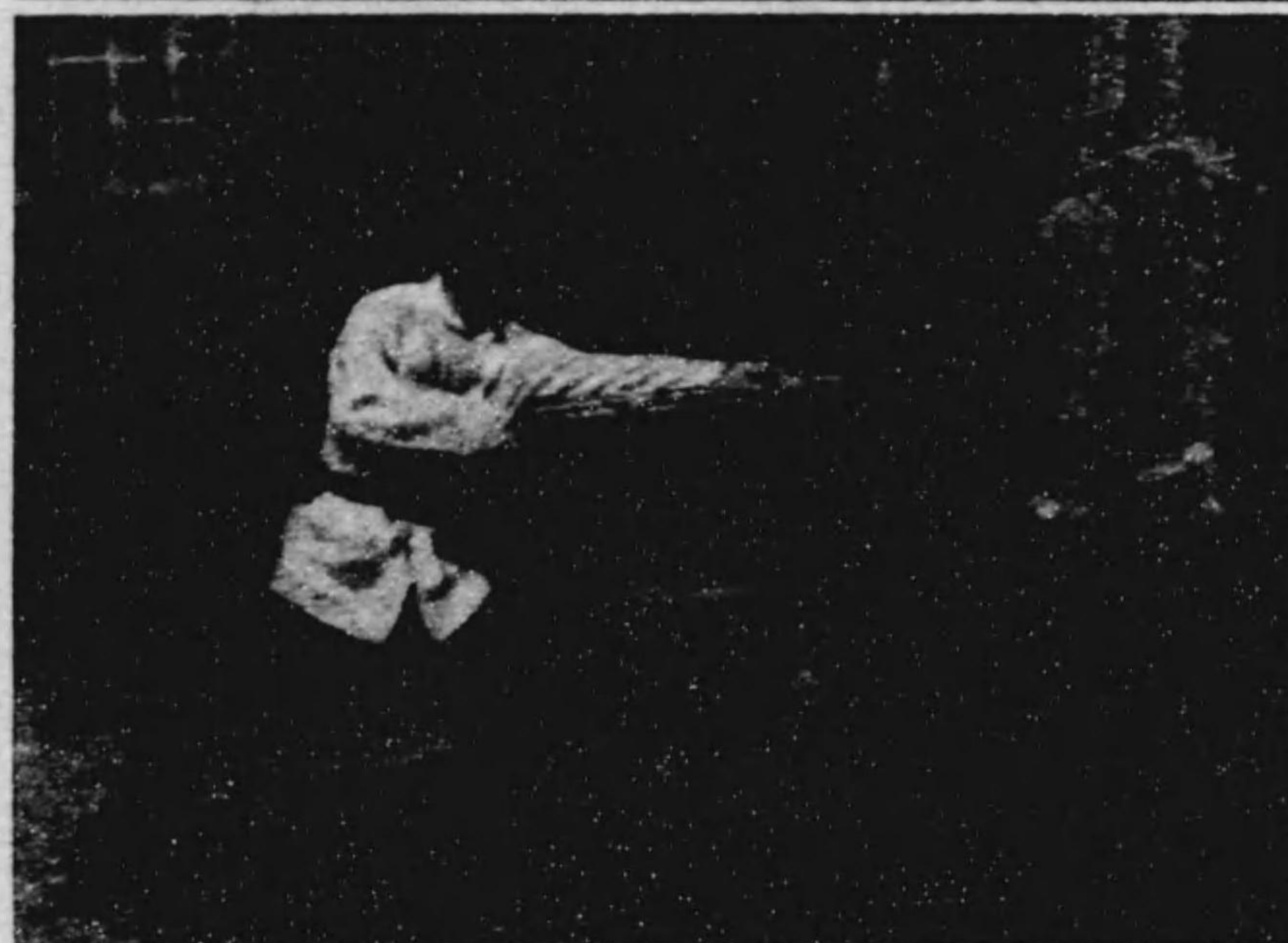


交叉の外から先づ普通の「前へ」の要領で間合をつめ、直ちに十分踏み切つて刺突するところ。

方き突い惡



間合が近すぎ
體當り式とな
る。

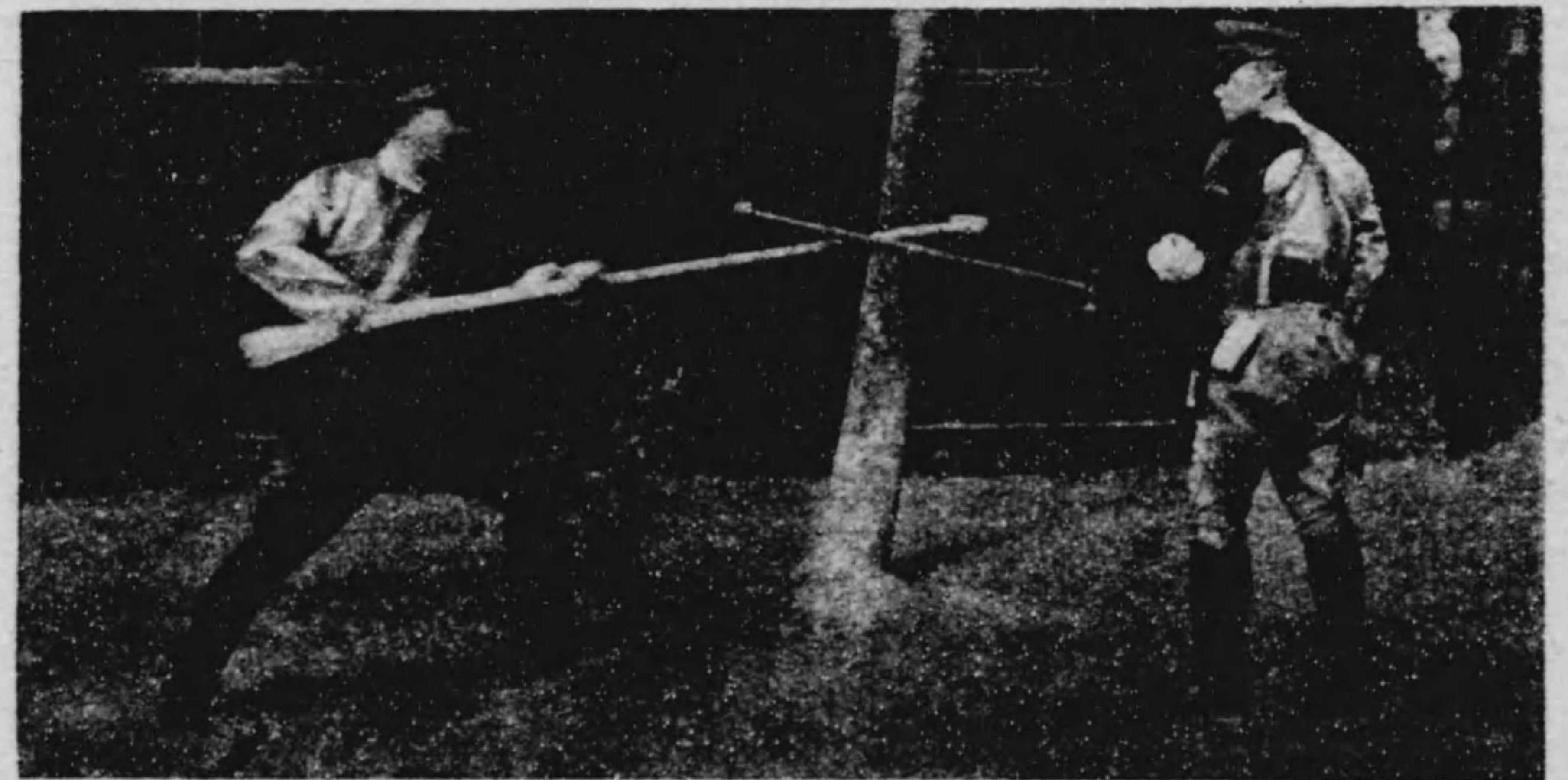
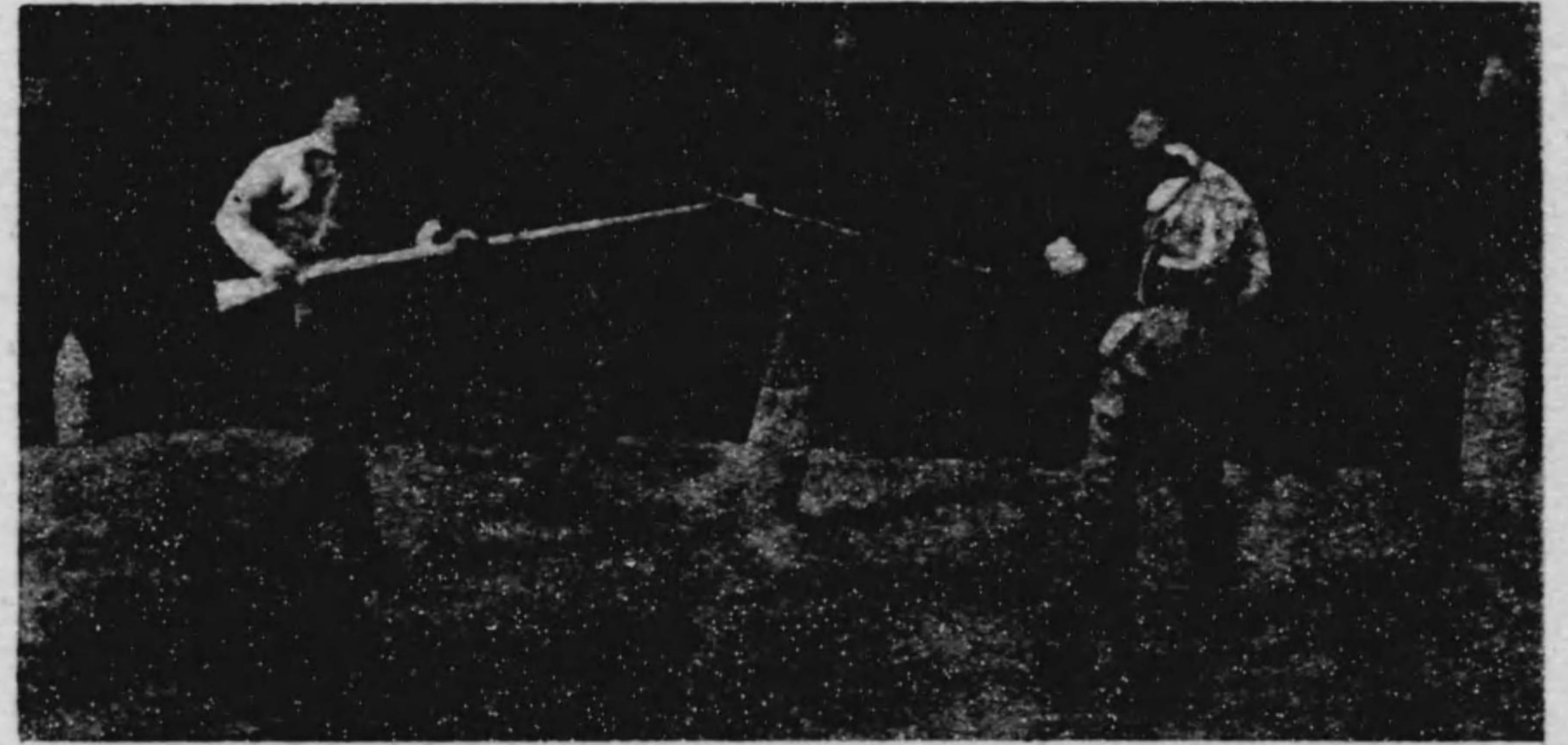
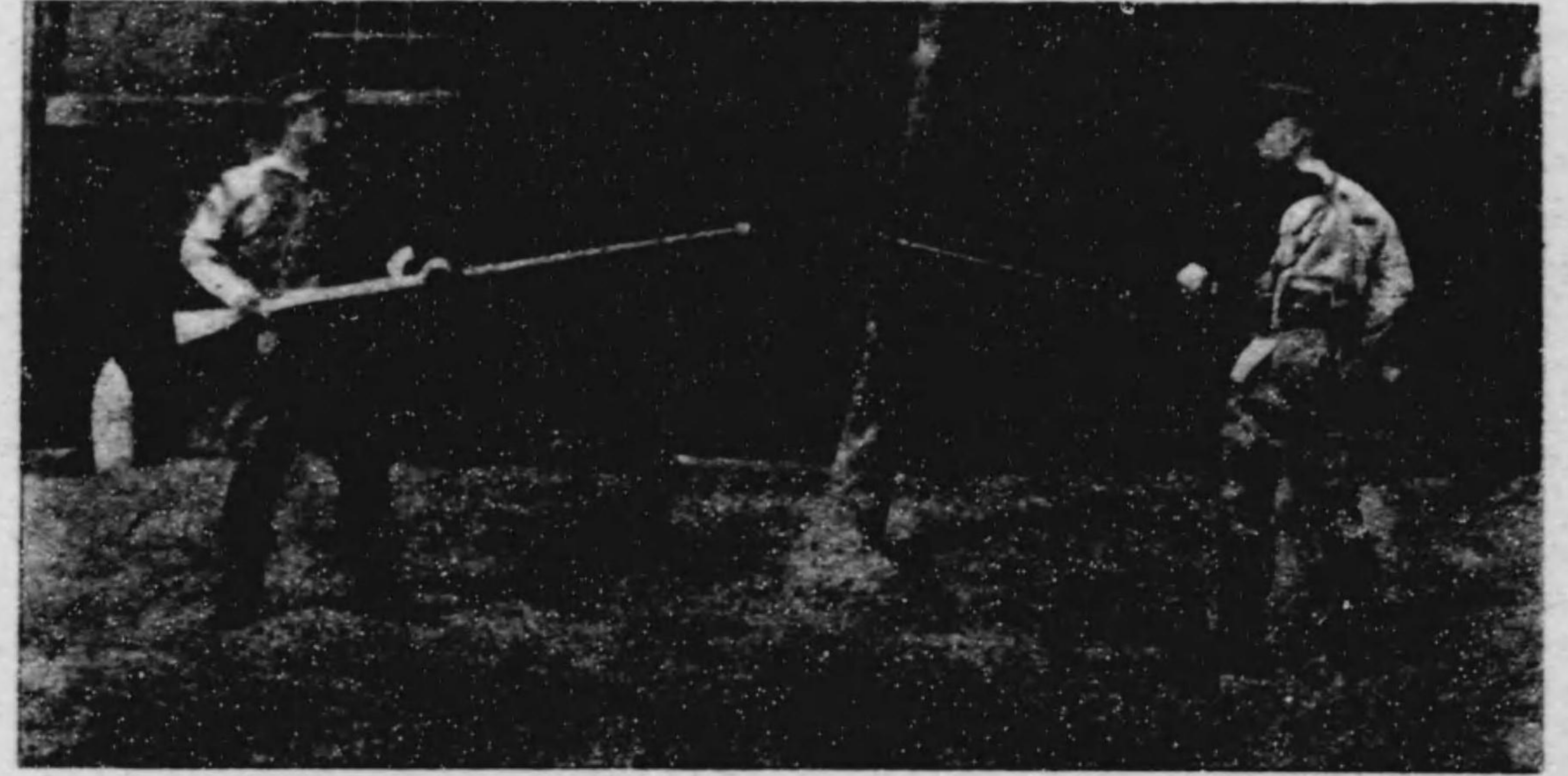


突き上げ。上體
が前にかかり、
右足が後に残つ
てゐる。



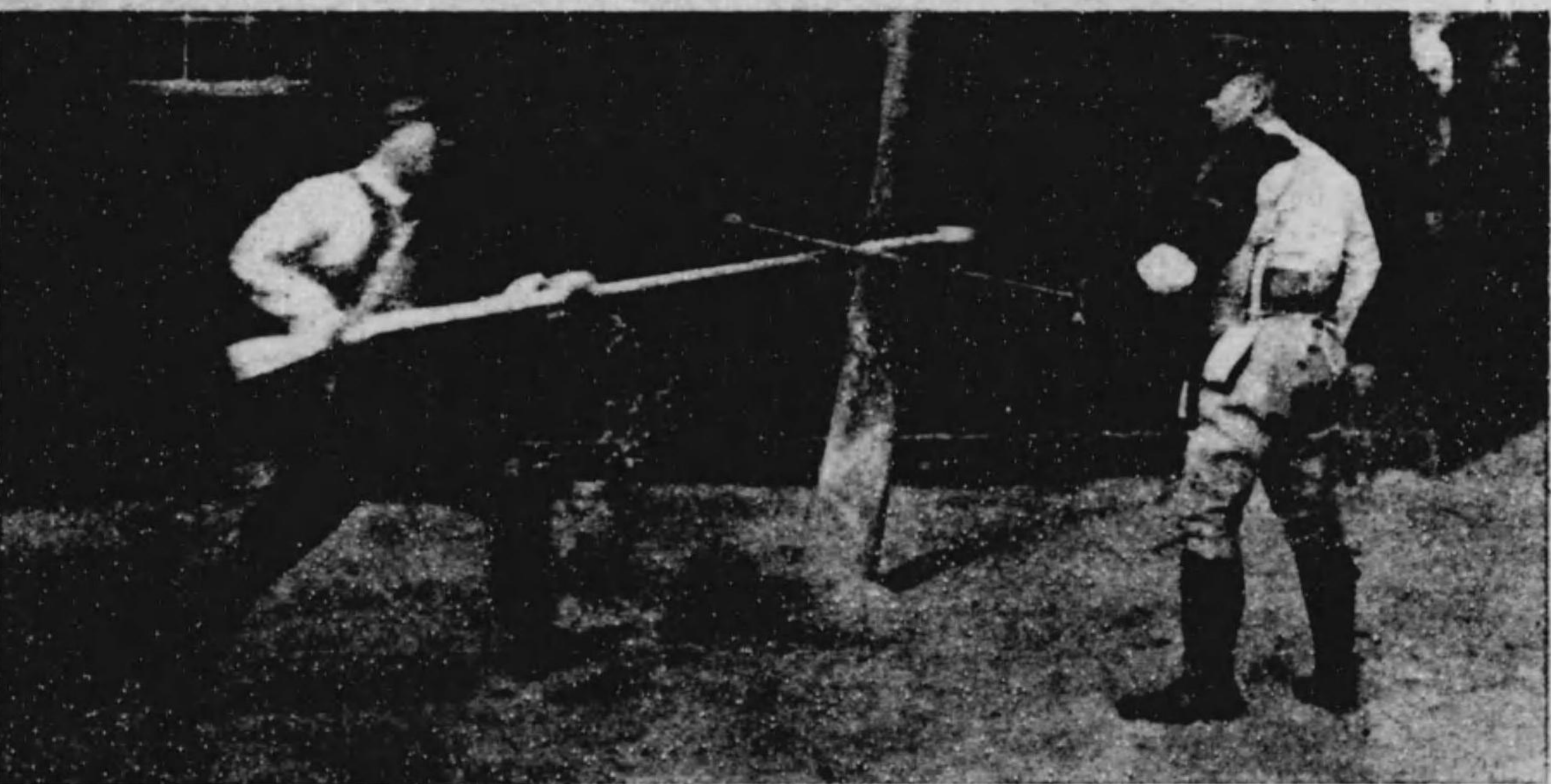
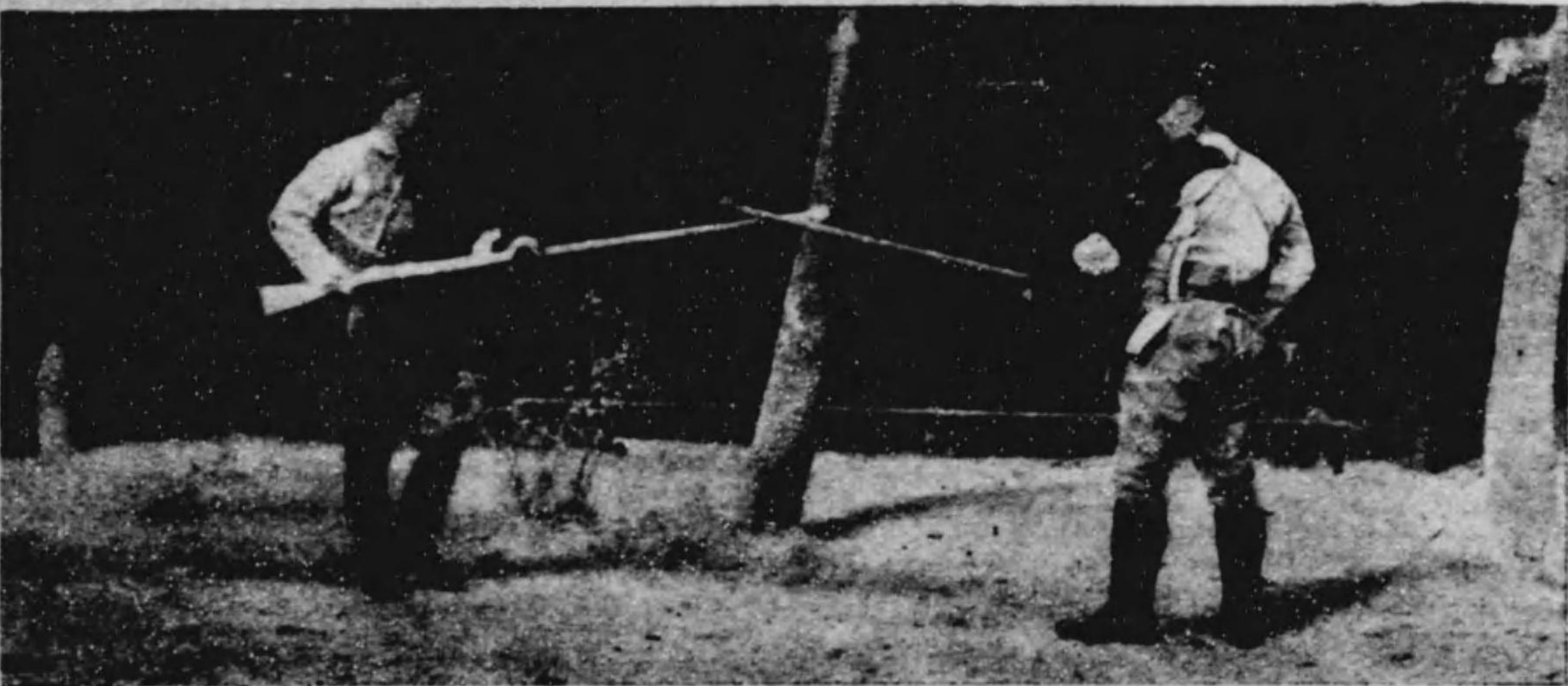
右臂が離れ、銃
が安定せず、左
手に力が入り、
劍が屈り易い。

歩 速



右足を左足の前に出して間合
をつめ直ちに刺突するところ。

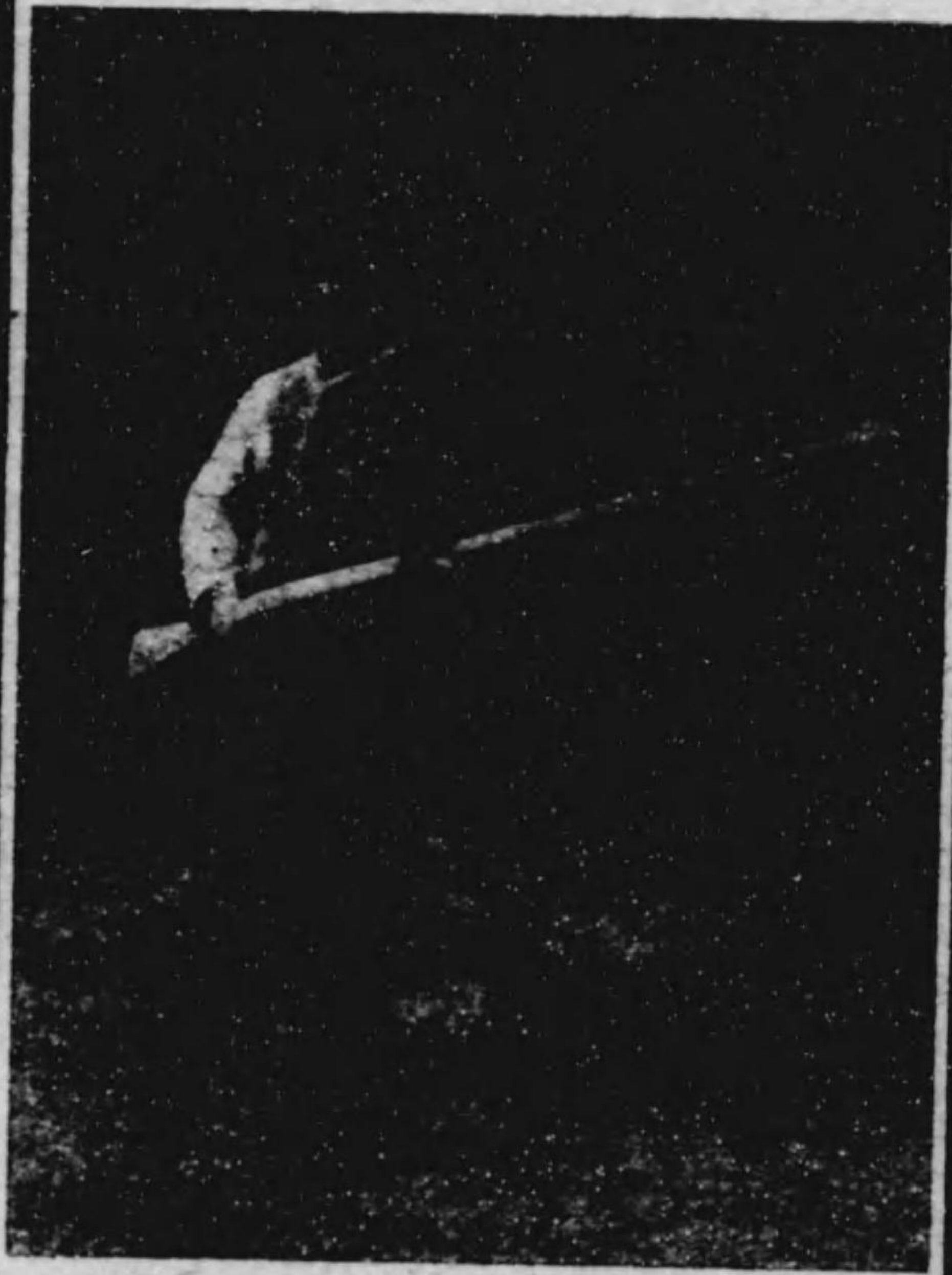
歩 駈



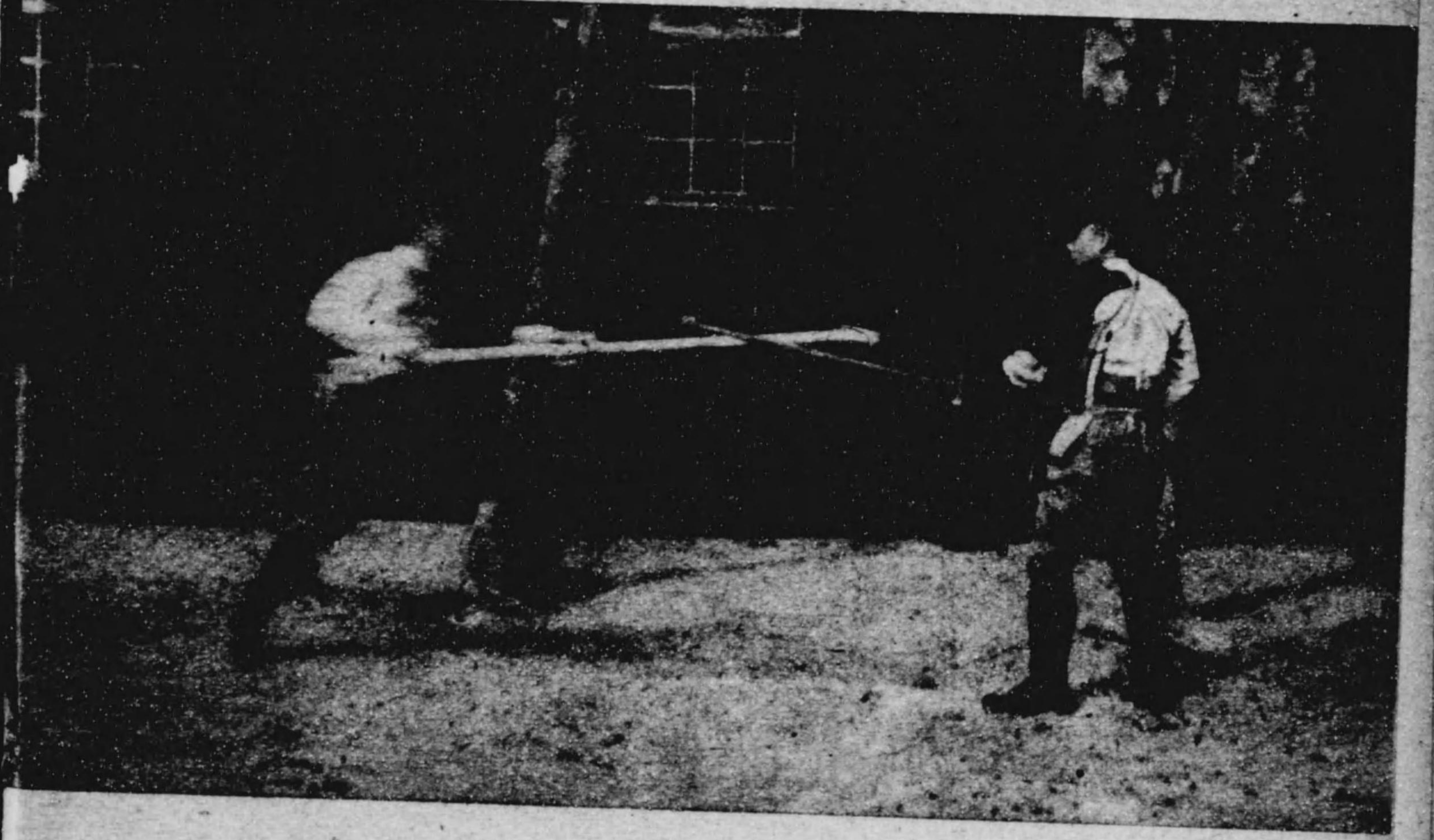
少しく速度を早めて駈歩の要領
で間合に入り、刺突するところ。

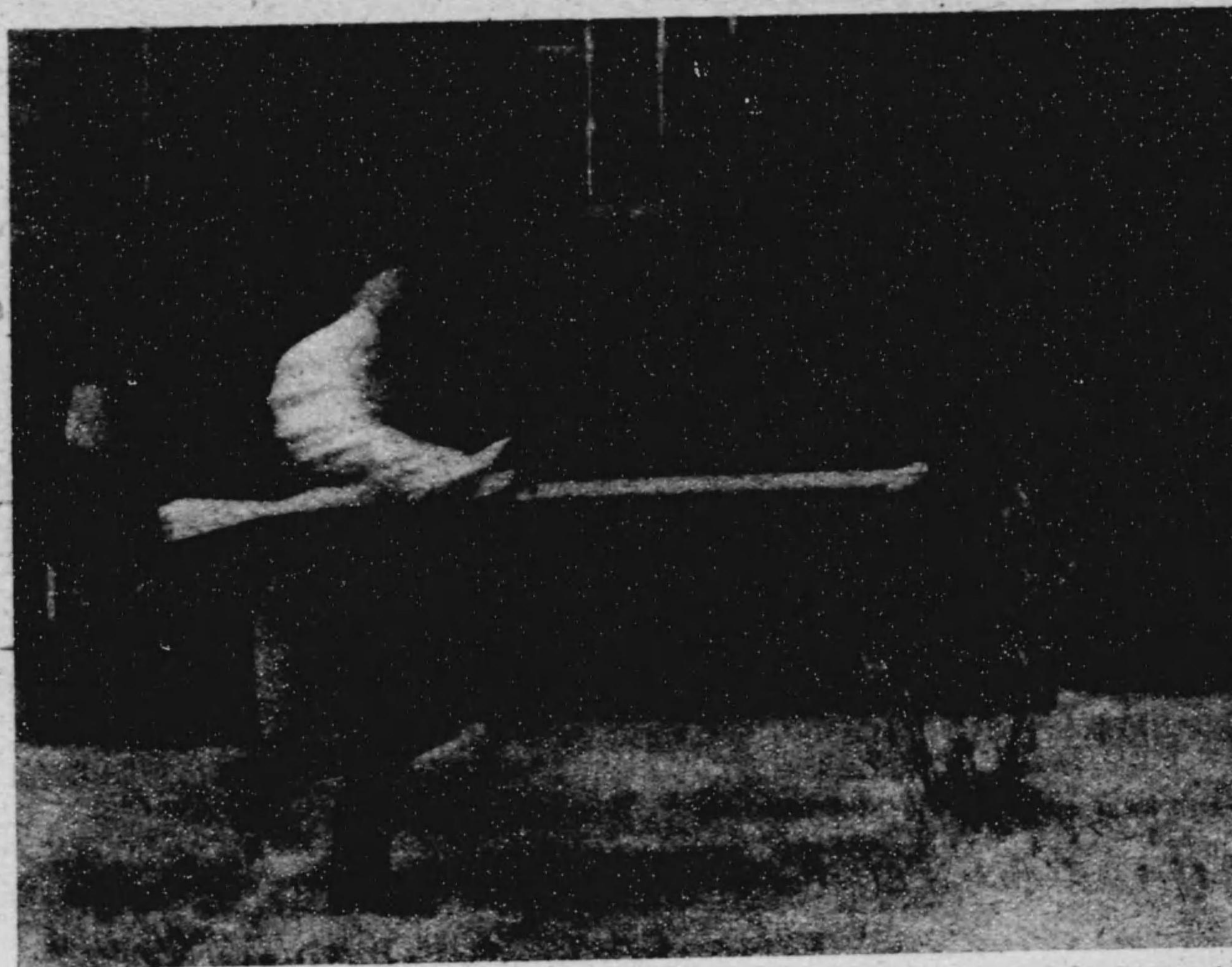


例い悪の持保の銃



突入中、劍尖を高
くし、左右にふら
ふらさせる例。





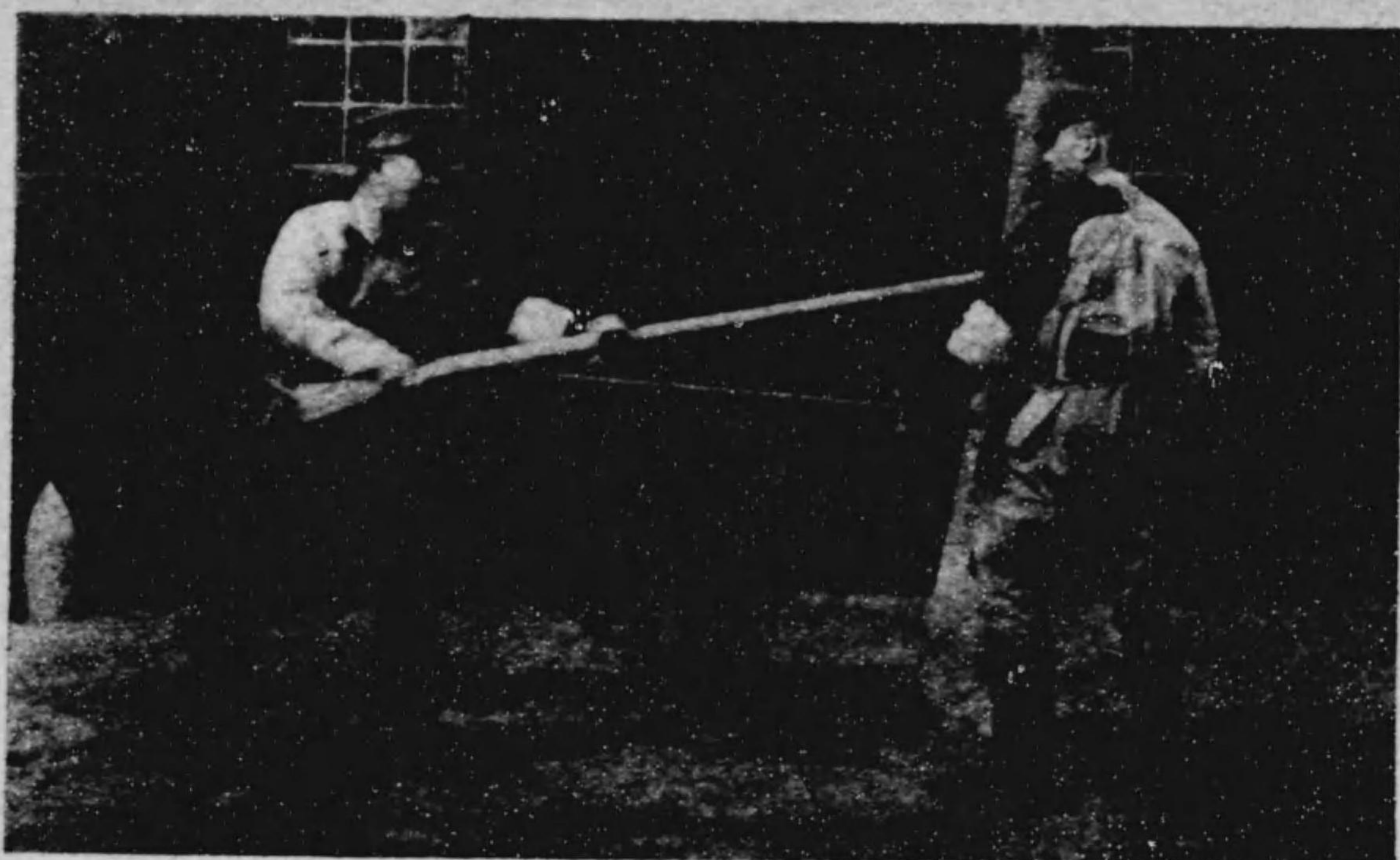
第一動

銃を持ちかへる動作。

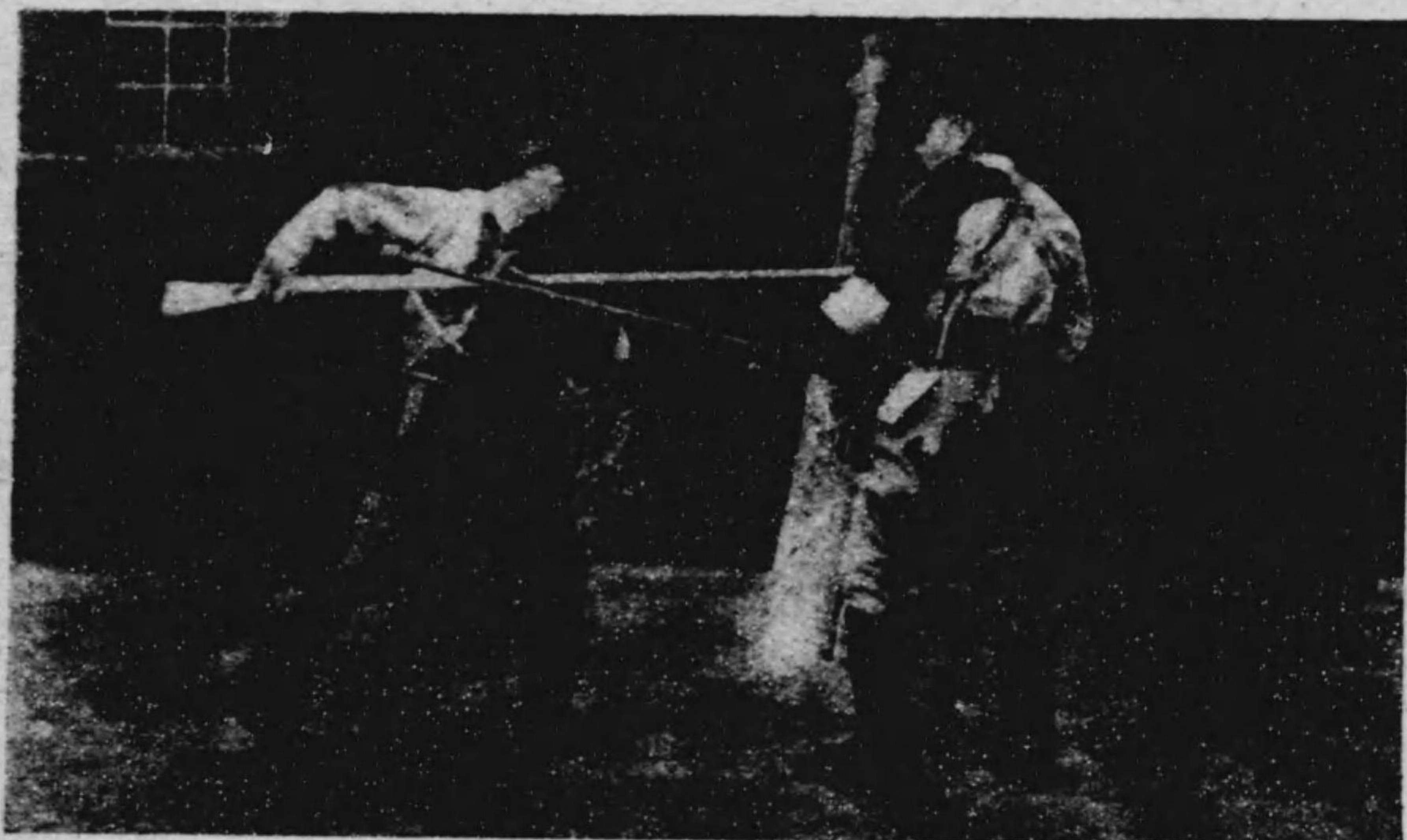


第二動

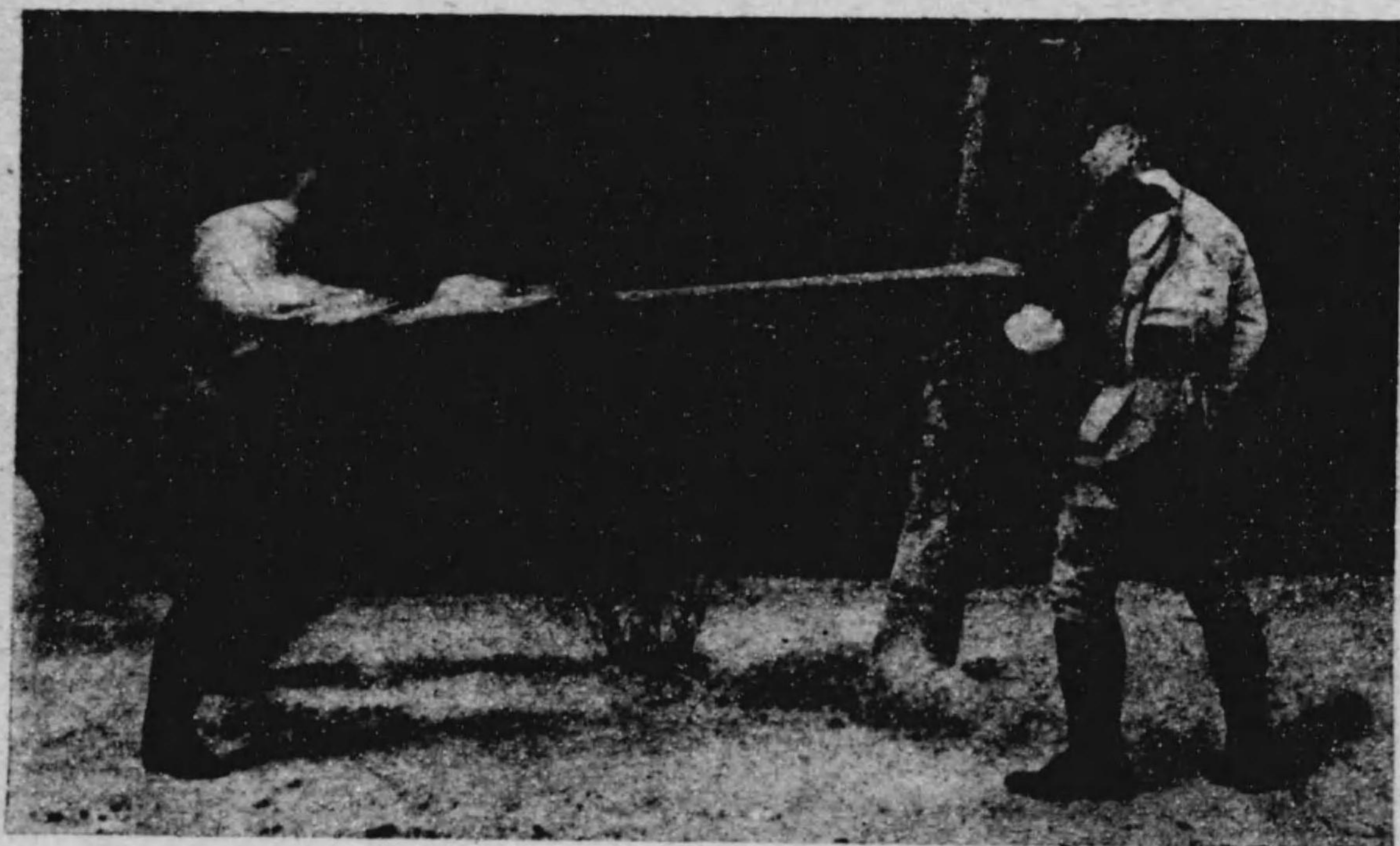
剣尖動揺せず、氣勢充實し、突入刺突の準備を完了することが大切である。



突き上げ



間合近し
敵にぶつかつてゐる。



繰り突き

銃
劍
道



殺 必 突 一

るけおに會大道武練訓丁壯國全下府阪大
月一十年六十和昭) 況狀の練訓鬪格擊突
。るあで(場動運社神國護阪大、日八

銃剣道の使命

わが國民が、古來武道によつて心身を鍛錬し、強壯なる身體と剛健なる氣風を練磨して、大和魂を培ひ、日本精神を涵養して、日本固有の國民的性格たる至誠盡忠篤れて後も已まざる精神を傳承してきたことは、いまさらこと新しく論ずるまでもない。

高度國防國家の建設と、暴戾なる米英を撃滅し、もつて大東亞を解放せんとする聖戰の完遂途上にあるわが國民は、一にはおのれが心身を鍛錬して、皇國民としての實踐力を鍊成するとともに、直ちに劍をとつて立つべき用意を緊要とする。

わが國民は、皆兵なり。しかもこの大部分の兵が銃剣をもつて戦ひつゝをる事實からして、わが國民たるものは悉く銃剣道の修練により心身を練磨して、潤達剛健なる氣魄を養ひ、武道精神をもつてあらゆる國民生活の場につき、時艱に克ち、禮節正義を重んずる氣風を涵養して、忠誠なる國民たる鍊成を期することこそ現下必須の要件である。

銃剣道教育の主眼

(一) 武道精神の體得

武道精神とは、銃剣道を修練することによつて涵養せられる道義的精神をいふ。その具體的内容については、忠

節・禮儀・尙武・勇氣・廉恥等があげられるが、軍人勅諭の五ヶ條が最も適切に武道精神を現はしてゐる。しかし武道精神とは、決してかゝる抽象的な數語をもつて、その全部をいひ表はすことができないほど、深遠であり、高尚であり、傳統的・歴史的に生成發展し、永い年月の間に國民の風俗習慣、傳統の國民性となつて育成繼承してきた國民精神であり、日本民族の傳統的精神であつて、筆舌のよくつくし得ぬ皇國の道義的精神であると考ふべきである。

攻撃精神の旺盛、工夫練磨、果斷決行、膽力、剛健なる意志、自信力、敬神、禮讓、献身奉公の念、謙讓眞面目な態度、正義廉恥、動作の機敏、耐久力、注意力、觀察力、忍耐力等、銃劍道による徳性の涵養はいくらでもあるのであるが、いづれも國民資質を陶冶し、性格を鍊成する上に缺くべからざるものである。くれぐれも單なる技術形式を把握させるばかりでなく、實踐による鍊成鍛鍊たることを忘れず精神鍛鍊をなすことが緊要である。

(二) 心身一體の眞剣なる修練

眞に實敵に對する觀念をもつてやれ。所謂體育的遊戲的に實施したなら、たゞ劍術道場のみの勇者たるに止まり、實戰に臨んでなんらの功をもあらはすことができない。四六時中、寸分の油斷なく、生死を常に度外におき、如何なる場合、いかなる敵に對しても自若たるところがなければならぬ。

(三) 死中に活を求めよ

これを鍊成するためには、防具を着けた敵に對するときも、これを眞の敵なりと觀念し、一撃一突も生死の岐れ目と思ひ、意を決して刺突し、もし敵から刺突せられるときは、これに屈せぬ磐石不動の氣力を養成せねばならぬ。

銃劍道はもとより勝敗を争ふものであるが、敵に對するときには微塵だもこれを念頭におかず、たゞたゞ純一無雜、無二無三に進むことが肝要である。

(四) 銃劍道と禮讓

そもそも銃劍道は、道場の勇者を養成するのではなくて、有事の日眞に役に立つ人間をつくるのだから、僥倖の勝利のごとき、また實際を無視した術を施すときはなんらの價值をなさない。人禮讓なければ輕薄驕慢にはしり、驕慢は畢竟油斷を生ず。これ銃劍道における大敵である。

(五) 剛健なる意志を養へ

剛健なる意志とは剛操の志である。大丈夫の世に在る、まさにこの心かなければ、萬事成功し難い。剛とは剛毅にして物に屈しないことをいふのである。操とはわが義とする志を守つて少しも變らぬ心である。

(六) 果斷決行

心すでに決せば、すなはち志すところを望んで一斷直進せよ。汝の前面に横たはる障碍も汝が氣と勢との猛烈なるをみれば、たちどころにその道を開かん。

(七) 自信力

われに百鍊の心腸あり、不拔の精神ありといへども、しかも自ら信ずることが深くなければ、すなはち百鍊の心

腸も軟化し、不拔の精神も動搖する。すなはち自信は、これをして鐵石心腸たらしむる所以である。山嶽前に崩るゝとも避けず、海濤後に追ふとも走らず、泰然として立つは自信のためである。この信念は千磨必至の訓練に生ず。

(八) 刺突要功の要訣

充實せる氣勢、確實なる使術、正確なる姿勢の三つが渾然一體となつてはじめて、無念無想、明鏡止水のやうな境地に至り、勝利をうべきものである。

(九) 丹田に力をいれよ

丹田とは、臍下一二寸の下腹部のことをいふのであつて、人身の重心點のあるところである。頭腦を常に清涼にし、不意のできごとに對しても機敏に應じ得ることは、銃劍道においては必須欲くべからざるものである。その方法は、下腹部すなはち丹田に力を充實するにある。かくのごとく下腹部に力があれば、いかなる急場の際會しても理論でこれに應對する前に先だつて體でこれに反應し、ために神氣よく平靜なるをうるから、その瞬間に悟道なり、學問なり、容易にとりだして臨機處置をすることが出来る。

(十) 懸聲は腹から

懸聲(發聲)とは、敵を刺突するときのだす聲のことである。氣勢の充實に伴ふ發聲は大いに價値がある。通常氣合がかゝると聲が作ふものである。こゝに注意することは發聲の害である。劍法遺書に「聲のみだりに多きは息合せきりて(勢力を減ずる意ならん)かへつて害あり」と。劍法至極詳傳によれば「業の進むに従つて大聲を發す

れば内にある勇氣を損ずる心地するを覺ゆるに至る。故に一呼吸だも容易にせず況んや矢聲をや云々」というてゐる。だから喧嘩にわたらず、腹からだすやうにせねばならぬ。まさに、眞の聲は、猛虎一聲山月高し、獅子一吼すれば百獸腦破裂するほどの氣合が必要である。

銃劍道の基本教育

すべての教育において、基礎教育が必要であるやうに、銃劍道の教育においても亦同様である。この基礎教育を基本教育といふ。

そこでこの基本教育によつて、幹部および兵を訓練して習熟の域に達せしめ、實戰における格闘の確固たる基礎をつくるのである。

これがため、基本動作によつて使術の基礎をつくり、應用動作によつて試合に必要な使術を修得し、試合教育によつて基本動作および應用動作の活用を演練するとともに、判断の能力および剛健なる氣力を錬成し試合の要領を體得し、試合によつて必勝の確信を得るにある。

基本動作の教育

目的

基本動作は單純な使術につき、充實せる氣勢、確實な刺突、正確な姿勢、即ち氣劍體の一致活動を錬成して使術

の基礎をつくるにある。

この教育は使術を合理的にし、技辭の矯正に役立つが、もしこの教育を全くしないか、または不完全にして、試合教習、試合を指導するときは銃を暴力で振りまはすにすぎないで、術とならず、刺突は成功しない。また使術の進歩がおそく、外傷の原因となる。

姿勢と刺突との関係

一般世間では、姿勢にかまはず、専心試合において命中するやうに教育するのが得策であるといふものがある。姿勢を正しくしなければ、進退の自由を欲し、銃の操作を合理的にすることができない。

姿勢を悪くして勝たうなんて考へるのはとんでもない誤りである。もしそんなことがあれば、非實戰的に刺突部を體をもつてかくすか、または防具をまげてつけるか、または忌み嫌ふ待ち突きをするからである。こんな動作は眞剣に對しては、なんの役にもたないし、實戰場裡においては守勢に陥り、敵に壓伏されてしまふ。

姿勢を悪くするのは、防ぐ心があるからである。攻撃精神がなくて勝つ道理がない。心は常に圓轉滑脱向ふところに滞ることなく、體は影の形にそふごとく、その心に應じて動き、微塵も凝滞があつてはならない。

この姿勢と、この心があつてこそ、はじめて機に乗ずる動作もできるし、刺突の命中も亦できる。また堂々敵を壓伏する氣力も自ら養成することができぬ。

術で負けても、せめて心だけは決して負けてはならない。

間合

「間合」とは一足踏み込めば、敵を刺突できる距離のことである。その場で突ける距離のことを「間」といふ。こ

の間合の判定は勝敗の鍵であるが、なかなかむづかしいものである。

これを教育するには、劍を交叉してやる。初歩者には交叉を深く、教育の進むにつれて正規の交叉（概ね十握）でやるやうにする。

教育上の注意

最も正確に教育すること

すべて教育は特にその初期が大切である。基本動作は使術の基礎であるから、深くこゝに留意して教育する必要がある。

教育は順序的なること

- (一) 模範を示し、到達點を知らしむる。
- (二) 動作を分解して行ひ、所要の説明をする。
- (三) 初めは緩徐に行ひ、その要領を會得させる。
- (四) 漸次姿勢の正確、刺突の確實、快速、氣勢の充實をはかる。

技辭はすぐに矯正すること

技辭をすぐに矯正してやらないのが使術が進歩しない所以である。その矯正は一時に多くやらずに、漸次に要求するやうにする。

興味心を喚起すること

基本動作は飽き易いから時に賞詞を與へ、あるひは審判して愉快にやるやうに指導する。

使術の完成を急がないこと

訓練を中絶しないこと

基本動作は術の向上、技癖の豫防、準備緩和運動として必要であるから試合教習、試合に移つても中絶せず、その前後に必ず實施するやうにする。

習技者の心身の状態を顧慮すること

疲労や心痛のあるときは生理上動作が極めて緩慢なものである。これを知らずにやるときは、習技者の苦痛を増し、技癖を生ずるやうになる。

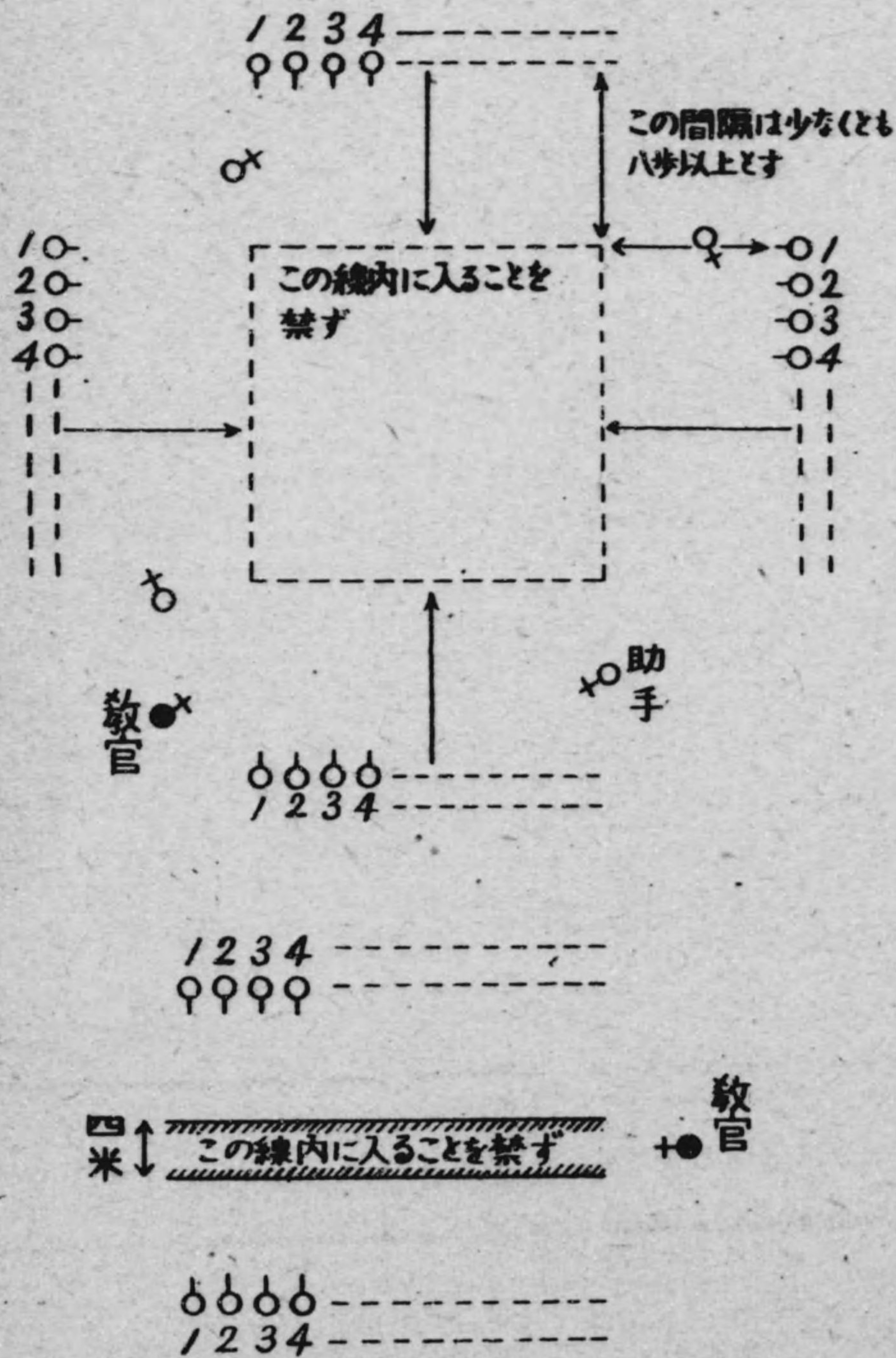
隊
形

いかなる隊形をもつて教育訓練するかは、教育上の着眼點、習技者の多寡、運動場の廣狹、用具の有無、教官助手の技倆、人數等によつて一定しない。次に述べるものはその一例である。運用の妙は一に教官にある。

四方隊形

正對させて同一番號をつけ、相對抗せるものを敵と心得て實施する。全員同時に、または指名して行ふ。

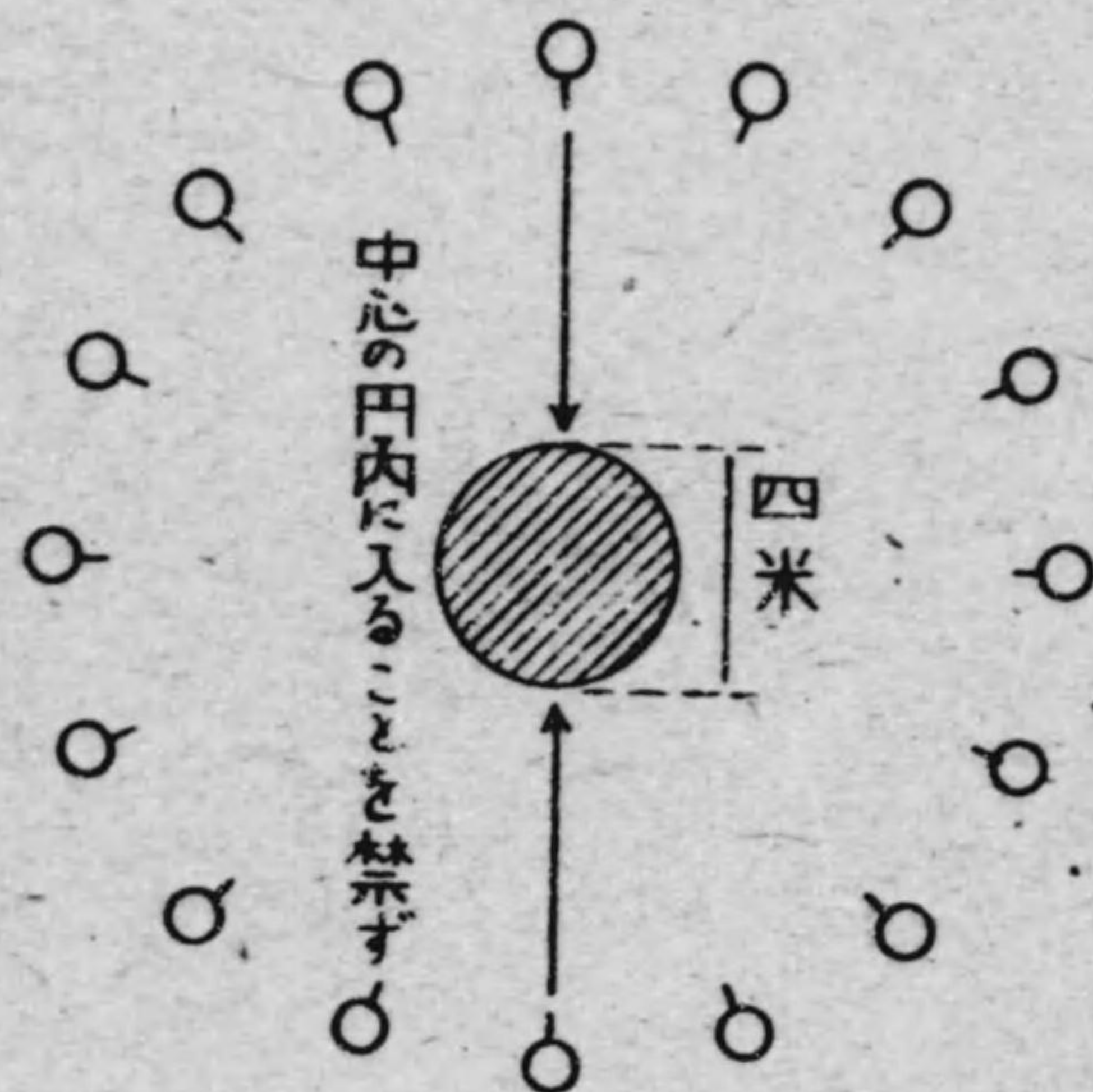
(以下同じ)



二方隊形

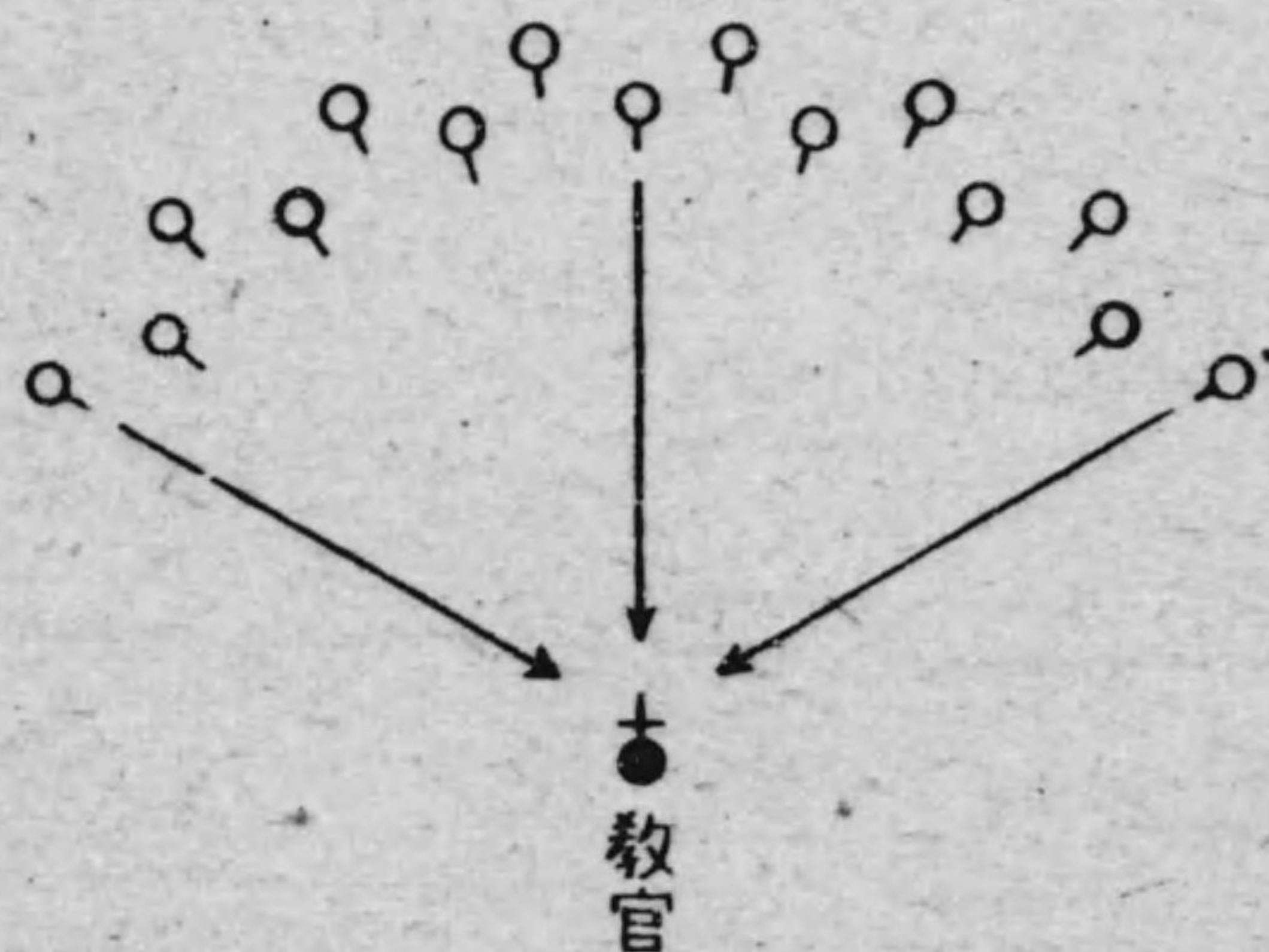
圓形隊形

人員に應じ適當の圓にひらく。



半圓隊形

教官に對し、正對し敵として動作す。教官と同一動作をなし、



または反對動作を行はしむ。號令を用ひ、または用ふることなく實施する。空間直突の要領を會得した後に行ふ。

應用動作の教育

目的

試合にあらはれる術は、千變萬化である。變幻絶妙な術が心手期せずして、心のまゝに自由自在に使へるやうに

なるには並大抵の修業ではだめである。そこで平素から一種の型として、充分に練習し、試合教習および試合によつて練習體得するのである。この型を應用動作といふのである。

開始時期

基本動作の要領を會得したならば、應用動作を教育する。

指導要領

應用動作は、試合教習および試合の進度に應じて教育し、且つ練習體得するのである。

最初は簡易な使術を教育し、漸次精妙な使術におよぶやうにする。たとへば第一教習を始めるまでに、脱突、下突を教育し、第二教習を始めるには、二段刺突、體轉刺突、打撃押壓刺突等の應用動作を教へつゝ、程度を向上せねばならない。

これが教育には、先づ空間で兩手の作用を教へる。次に教官に對し動作を分解し、熟練するに従ひこれを綜合して確實快速を要求する。

應用動作の利害

- (一) 氣勢の鍊成。
- (二) 刺突すべき機會の作爲。
- (三) 各種場合における間合の會得。

- (四) 進退動作の輕捷、各種の使術に伴ふ堅確な姿勢態度の錬成。
- (五) 劍の運用自在、敵の刺突動作に應じ得。
- (六) 敵の欺騙動作を看破し得、且つこれに顧慮することなく斷然刺突する氣力の養成。
- (七) 試合の教育を容易にする。
- (八) 嗜好心の喚起。
- (九) 初歩者にはかへつて虚隙となる。
- (十) 小業となり、攻勢に出でず、待突の害に陥る。

試合教習の教育

目的

試合教習の目的は、基本動作および應用動作の活用を演練するとともに、判断の能力および剛健なる氣力を錬成し、もつて試合の要領を會得せしむるにある。

試合特に眞劍勝負において、精神極度に興奮し、ほとんど無我夢中となつてゐるときに尙且つ術を合理的に心手期せずして實施できるのは、試合教習の訓練の結果である。

開始時期

基本動作および應用動作を修得し、連續刺突において氣劍體概ね一致するに至れば開始するのを適當とする。

習技者の心得

- (一) 反應時を短縮せよ。
これがため注意力を緊張し、氣分を快活にし、常時不斷の練習を必要とする。
- (二) 刺突動作を半自動的にせよ。
- (三) 虚隙の有無にかゝはらず猛烈に刺突せよ。
- (四) 刺突の命中のみに腐心せず正確に刺突せよ。
- (五) 間合を遠くし大業になせ。
眞の武道は敵を斬るの位(氣分)である。常に正々堂々勝敗にこだはらず練磨せよ。然らば術は進歩し、勝つべき道を體得する。
- (六) 練磨の功を積み。
武道は机上の理論のみでは上達すべきものでない。練磨に練磨を重ねて始めて達する境地である。とにかく鍛錬第一主義でやれ。
- (七) 敵の刺突を厭ふな。
敵から突かれても意にとめぬやうになれば、武道の一進歩といへる。眼を閉ぢ頭を傾け體を俯くやうでは、まだまだ磨力の養成も術の進歩も遅々たるものである。
- (八) 理と業を究めよ。
理と業は車の兩輪のごときものである。劍理に基づき練磨を積み。

(九) 術を偏修するな。

(十) 傍觀なほ注意を放たず。

術を見取るといふことがある。常に他人の試合にも注意して、術の巧拙遅速等をはかりて、巧妙な術を見て自ら銘記し、これを實際に練習して自得するやうに心掛けよ。

(十一) 機眼を養へ。

刺突時機を看破せよ。敵の虚隙を發見せよ。虚隙のないときは敵の銃を叩き、押し、排除して斷乎刺突せよ。

教官の心得

(一) 精神的に習技者を感化せよ。

武道は眞劍的にやるところに價值がある。教官の氣勢充實し眞劍的なるに従つて習技者もまた氣力が充實する。

(二) 習技者の動作を妄りに殺すな。

教官は常に習技者をして攻勢に出で、果敢決行の氣力を養成するやうに指導しなければならぬ。これがため教官は適當な間合と虚隙を與へ、習技者をして充實せる氣勢と伸暢せる動作とをもつて勇猛刺突させるがよい。みだりに間合をつめ、銃を押し、強き刺突を加へ、また起り頭を刺突して習技者の氣勢をそぎ、使術を殺して、退嬰萎縮させてはいけぬ。

(三) 矯正は適切にやれ。

教官は機を失せず姿勢、使術の過失、技癖、機會の得失について懇篤に教示せねばならぬ。

(四) 賞詞を與へよ。

好機に投じて正確なる刺突をしたときは、すぐに賞詞を與へるがよい。これは習技者に自信と快感を起させ、術の進歩に有効である。

(五) 宏量なれ。

習技者が未熟なため、防具以外の箇所を刺突したときには、叱責したり、荒々しい動作をしたりせず、むしろこれを迎へるやうにせねばならぬ。

指導法

試合教習の順序を第一、第二、第三教習に分けるのは、單に教育上の便宜のために概略の基準を示したものである。元來教官の技倆、習技者の氣力、體力、素質は多種多様であつて、その指導法もまた自ら差異がある。

以下述べんとする指導法も、その一斑を示すにすぎない。實施にあたり適宜取捨すべきである。要は教官の技倆と熱心とかすべてを解決する。

第一教習

目的

習技者をして隨意に簡単な刺突を行はしめ、主として試合における使術の根底を習得させるのである。その應用變化、機眼は從とする。

(イ) 姿勢使術について

- (一) 姿勢の正確。
- (二) 刺突の確實快速。
- (四) 動作の伸暢。
- (五) 臂脚體の凝固を解く。
- (七) 身體の靱強。
- (三) 進退の輕捷。
- (六) 氣劍體の一致。

(ロ) 機眼の養成、同合の判定について

この教習においては特に機眼の養成には注意しないけれども、教官の虚隙機會を捉へて刺突することによつて自然に會得する。同合は通常教官からとることによつて、漸次無意識的に會得するやうになる。

(ハ) 精神氣力について

- (一) 氣力の充實。
- (二) 果敢決行の氣力。
- (四) 忍耐力。
- (五) 心の凝固を解く。
- (三) 丹田力。

指導要領

第一教習においては、刺突および刺突法を指示せず教官の與へる虚隙機會を隨時捉へて單一なる刺突をやらせるので約束動作ではない。これがため習技者の技備に應じて、大きく、または小さく、適當に虚隙と機會を與へる。(寫眞参照)

實施上の注意

- (一) 虚隙の與へ方は習技者の技備によつて行ひ、なるべく劍を交叉して行ふ。ごく初歩のときは必ずしも交叉しなくてもよい。
- (二) 刺突するときは下腹部に力をいれる。
- (三) 最初は確實第一、漸次快速を要求する。
- (四) 動作を確實にするため、一刺突毎に必ず構備の姿勢にかへす。
- (五) 無理な力を用ひて刺突したときは軽く打拂ひ、體轉をなしその要領に合せざることを自覺させる。これは臂脚體の凝固を解く一方法である。
- (六) 刺突の際教官の後退する距離が遠すぎてその姿勢を崩させ、あるひは氣勢を挫かぬやうにする。
- (七) 伸暢した動作をさせるため漸次距離を遠くしてやる。このときは習技者は適當の位置まで進出して刺突する。
- (八) 漸次に猛烈果敢な動作を要求する。
- (九) 疲勞して中止せんとするとき、尙一、二回の刺突をやらせる。
- (十) 危惧心、躊躇心、慾心は進歩に害をなす。無念無想基本動作そのままを實施するやうにする。

第二教習

目的

第二教習においては、習技者は常に自主積極的に自ら虚隙および刺突の機会を作り、間合を判定して刺突し、機先攻勢、果敢決行、不撓不屈の氣力を發揚するとともに使術の應用變化を演練する。

教育事項

(イ) 姿勢使術について

- (一) 第一教習にて教育した諸件の向上。
- (二) 體を轉じて行ふ刺突。
- (三) 打撃、押壓して行ふ刺突。
- (四) 交叉の反對側より行ふ刺突。
- (五) 打撃、押壓の反對側より行ふ刺突。
- (六) 進出、後退、體をひらいて行ふ刺突。
- (七) 排除刺突(返突)の正當確實快速なること。
- (八) 敵を欺騙して行ふ刺突。
- (九) 刺突を反復すること。
- (十) 體當り動作。

(ロ) 機眼の養成、間合の判定について

- (一) 動作によつて虚隙、刺突法を知らしめ、漸次敵の意志を判斷させること。
- (二) 間合を判定して、刺突、排除刺突をやらせる。

(三) 進出、後退、體轉、體當りをして距離をとらせる。

(ハ) 精神氣力について

- (一) 第一教習にて要求せし諸件の向上。
- (二) 自己を棄てる決心をもつて行ふこと。
- (三) 敵を壓伏撃滅する意志をもつて行ふこと。

指導要領

第二教習をやるときに、習技者に今から第二教習をやるといふことを豫告してはいけない。

この教育においては、第一教習にて教育訓練したほかに、各種の攻勢的應用動作および排除刺突の動作を行はしめる。

實施上の注意

- (一) 好機に乗じ正確な刺突をしたときは、教官はこれを打拂ひ、排除刺突をやらせないやうにする。
- (二) 習技者の姿勢、使術上の過失、技癖、間合の判定の過誤、機會の得失等を自覺させるため、教官は必要に應じ刺突または排除刺突を行ふ。
- (三) 排除刺突の指導はなかなかむづかしいものである。間合を遠くして氣勢を充實し、ほんたうに刺突するやうにみせて、術を或るところでとめるやうにする。氣勢も術も、ほんたうにすれば、習技者は拂ふ餘裕をもたない。よろしくこの間の呼吸を研究すべきである。

- (四) 躊躇、危惧、慢心、待突き等に對しては、斷乎刺突を加へ、反省奮發心を起さしめることが必要である。
- (五) 習技者の起り頭(動作を始めようとするところ)を刺突し、排除刺突ばかり行ひ、危惧心を起さしめ、失望させぬことがまた必要である。

第三教習

目的

第一、第二教習において習得した技倆を向上し、機眼を養成すると同時に、使術の活用に習熟し、もつて試合の要領を會得せしめ、且つますますその熟達を圖るにある。

教育事項

(イ) 姿勢使術について

- (一) 第一、第二教習において習得した諸件の向上。
- (二) 接近したときの使術。
- (三) 追込の場合、追込められたる場合の使術。
- (四) 敵の欺騙に先んずる使術。
- (五) 敵が刺突してきたとき、刺突距離外に離脱してから刺突すること。
- (六) その他、敵の諸動作に應ずる使術。

(ロ) 機眼の養成、同合の判定について

- (一) 第一、第二教習において習得した諸件の向上。
- (二) 敵の意志、動作を察知して、速かに乗ずべき機會を看破すること。
- (三) もし機會のないときは百方手段を盡してこれを作る。
- (四) 同合を掛引きすること。

(ハ) 精神氣力について

- (一) 第一、第二教習において習得した諸件の向上。
- (二) 剛健なる氣力を養成すること。
- (三) 膽力を養成すること。
- (四) 沈著なること。

指導要領

この指導は試合の要領に準じてやる。このとき教官は、その形を對等者のごとくやるけれども、心の底では、あくまで教育指導する考へをもつてせねばならぬ。通常、第一、第二教習を併せてやるのである。

實施上の注意

(一) この指導の要訣は、習技者をして教官とはほとんど同等の技倆をもつてゐるとの感じをもたせることである。そこで教官がすこしも虚隙を與へなかつたり、反對に大きく虚隙を與へすぎたりしては興味心をなくしてよくない。

(二) 習技者の長所はますますのばし、短所は力を用ひて矯正する。

(三) 正當敏速な術に對しては排除せず、不良な姿勢、無理な術に對しては、極力これを制し、また不得意の術をなるべく多く練習させる。

(四) 教官から諸種の機會を與へ、術を試み、習技者をしてこれに應ぜしめて、機眼を養成し、術を練磨する。

(五) 不撓不屈、剛健な意志を養成するため、教官は、或るときは猛烈に刺突し、氣を壓し、劍を殺して迫るのがよい。

(六) 攻勢に出ず、教官の刺突を待つてゐるやうな心身固着の状態にあるときは、教官は敏速正確な刺突を加へるがよい。眼があかるくなるにつれ、驚愕の心は略々のぞかれるが、疑惑の念はかへつて増加するものであるから、動作をもつてその過失を悟らせる。

刺突時機の一例

(イ) 敵の虚隙を發見したとき

(一) 刺突せんとする瞬間。

(三) 身構へをかへるとき。

(五) 劍を著しく壓するとき。

(七) 打撃、押壓したとき。

(二) 劍を上げ、または下げんとするとき。

(四) 前進、後退せんとするとき。

(六) 敵が間合外から刺突してきたとき。

(八) 危惧、慢心、止心の状態のとき。

(九) 術のつきたとき。

(十) 姿勢の不完全、體の凝固したとき。

(ロ) 敵の虚隙を作つたとき

(一) 敵の劍を排除し、體を崩し、刺突の機會を作つたとき。

(二) 刺突を數回反復して敵を應接に遠なからしめたとき。

(三) 氣攻め、術攻めにして無謀に劍を出さしめたとき。

(四) 敵の意志を動搖せしめたとき。

試合教育

目的

試合の目的は、彼我相對抗して互に術をつくし、全能力を發揮して勝敗を決し、銃劍道に精熟するとともに、必勝の確信を得るにある。

開始時期

第三教習において概ね試合の要領を習得させてから開始する。試合教習が不充分なのに過早に始めると、技辭を生じ、外傷を多發し、銃劍道の進歩を阻害し易いから、特に注意しなければならない。

實施要領

試合者概ね六歩のところに向きあつて立ち、相互に敬禮す。

審判は「始め」と令す。試合者秘術をつくして戦ふ。

勝敗決すれば審判は「よし」または「よし、勝負あり」等と令す。試合者は戦ひを中止し、もとの位置にかへり、立銃をして不動の姿勢をとる。

審判は勝者の方に手をあげ「某の勝」または「某の上届」等と判決を與へ、要すれば使術、機眼、氣力等について矯正指導する。

審判の「止め」の號令により試合者は敬禮してかへる。

一本試合

有効なる一回の刺突をもつて勝敗を決する試合法である。實戦にありては、初一本をもつて勝敗を決するものであるから最も重視すべき基礎的試合法である。

勝殘試合

一本試合に勝つたものが逐次他のものと試合する方法で士氣の鼓舞、氣力の錬成上特に價値がある。

總當試合

數人をもつて一組とし、その組の一人は他の全部のものと勝敗を決する試合法で、各人はその實力を發揮し、特に不撓不屈の氣力を鍛練する。

限秒試合

限定せる至短時間内に勝敗を決する試合法で、特に機先攻勢、果敢決行の使術を演練する。通常、時間は一分以内とす。

不期試合

數人または十數人をもつて、通常、圓陣を作り、全員構銃の姿勢をし、一組の勝敗裁決されるや指示を待つことなく、圓陣上の任意の一人は機を失せず、勝者に對して勝敗を挑む試合法で、氣勢を發揚し特に紛戰場裡に機を制し變に應ずるの使術を演練するに價値がある。

試合必勝の要訣

(一) 機先を制せよ。

機先を制するとは、剛健なる意志をもつて敵を壓伏し、わが意志に追隨せしめて、遂に守勢に立ち、攻勢動作にできることができぬやりにすることである。これがため常に純一無雜、無凝無滯、眞如の月のやうな心をもつてゐることが必要である。

(二) 身を捨てよ。

防守の心は、心の固着となり、敵の虚に乗ずることができず、かへつてわが虚となり、敵に好機を與へる。常に心を明鏡止水のごとくし、氣勢充實、すこしも凝滯なく、虚あれば直ちに刺突する氣分をもつて、一突必殺、生死の岐れ目と思ひ、われ刺突せらるるも、磐石不動の精神氣力をもつてせよ。死中に活を得ることこそ、わが國武道の極意である。

(三) 恐怖心を去り、死の工夫せよ。
生を欲し死を忌むは人の本能である。もし人一度死を覚悟せんか一切の苦悶恐怖から離れ、勇猛自在なることができる。

刺突奏功後の動作

試合において、刺突奏功確實と認めるときは、一時刺突を中止するがよい。その理由は、一は實敵に對して出合頭の一本がすこぶる價値があるのと、また二には武道の興味心を増進せんがためである。然し氣勢を緩めてよいわけではない。氣勢を充實して必ず爾後の變化に應じ得らるゝ備へを必要とする。これを「殘心」を示すといふ。刺突が確實でないのに引上げをして、敵の刺突を妨げるやうな動作をしたときは、斷乎刺突を加へてもよい。以上は熟達者に對する理想であつて、初歩者のためには弊害があるから、たとひ二、三の刺突をうけても意とせず、體力、氣力をつくして、刺突を反復するやうに訓練指導するのがよい。

應用教育

應用教育の目的は、基本教育をして、狀況、地形に適應せしめ、もつて戰場において、遭遇すべき格闘の要領を修得せしむるにある。これがため各種不齊地において、戰場の實相と同様に教育するのが理想である。寫眞にては、平坦における假標刺突および實敵に對する突入格闘の要領のみを解説したにすぎない。

銃 劍 道
陸軍認可
不許複製

昭和十八年九月二十日印刷
昭和十八年九月廿五日發行
●【定價 七拾五錢】

發行者並
大阪市東區大手前之町五
帝國在郷軍人會大阪支部
塩原 庫三

印刷人
西宮市松下町九五
須古 清

印刷所
大阪市北區堂島上二丁目三六
株式會社 毎日新聞社

發行所
大阪市東區大手前之町五
帝國在郷軍人會大阪支部
電話東 五五・二〇〇番
振替口座大阪二五六三番

(八七四六西)





